



**マンガ大賞2017決定！
選考員コメント掲載！**



マンガ大賞2017 大賞受賞作品

ビッグコミック スペリオール / 小学館

「響～小説家になる方法～」柳本光晴

選考員コメント・1次選考

- こ、この娘さん、すごい！読んで思ったのは小説の天才という部分もすごいのですが我が道を行く、というかその道を彼女が気分よくドライブしてるのに邪魔しちゃうと大変なことになっちゃうところもすごいというか爽快というかちょっとやりすぎじゃない？と心配しちゃうところもすべて魅力なのです。好き。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川元良

- んな馬鹿な！と思いながらも、楽しく気持ちよく読ませてもらっています。ついつい続きが気になる展開がにくい

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 天才とは如何なるものか、言語化が難しいその問いの答えを、主人公の言動で表そうとしている力作。

元書店員 / 齋藤隼

- 主人公の女子高生は小柄でメガネで小説好き。ただし、その思考や行動は、世の中の常識とはかけ離れている。世の常識をひっくり返すほどの圧倒的な才能、無軌道な振る舞いには憧れすら覚える。およそ素直とは言えないながらも、時折見せる可愛らしい仕草や表情も魅力的。主人公を含め、主要キャラに微妙にイラつく要素を散りばめながらも、実は全キャラクターが善良という心配り（？）も読んでいて心地いい。

(有) 馬場企画 ライター／編集者 / 松浦達也

- 早熟の天才少女というキャラ付けのバリエーションは古今東西あまた存在するが、ナチュラルに暴力的という設定は斬新だ。しかもそれが権威主義の文壇連中を狼狽させ、逆に彼女に惹き込まれるキーになっているのも面白い。そして主人公・響があくまで小説を愛し、真摯に向き合う姿勢がぶれないのが何とも素敵だ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 巻を追うごとにテンションが上がっていて、とにかく固唾を飲んで見守っている作品。響というキャラクターがあまりに強烈すぎて、読んでるこっちまで彼女の“まともじゃない”行動に憧れるファンになっちゃうのが困りものです。純文学というテーマを、こんなに面白いマンガにできちゃうなんて本当にびっくり。

会社員 / 末永龍介

選考員コメント・2次選考

- タイトルから、『小説の書き方』的な内容だと思って読んだら違った。主人公は実際目の前にいたらとても近づきたくない、少し風変りな人物だが、キャラクターとしては魅力的で、巻を追うごとにおもしろくなる。実際一気に読んでしまった。過去に大学ノートなんかにはひっそり小説を書いたことがある人は古傷をえぐられ、そうでない人も物語として楽しめる、読む人を選ばない作品。

主婦 / 赤坂真実

- なにかとんでもないことが起こってる！リアルタイムでこの興奮を味わえる幸せをかみしめながら読んでます。そもそも、「ひとりの才能が世界を変える」というダイナミズムは、マンガの醍醐味中の醍醐味！演劇、バレエ、クラシック……そんな舞台で天才を描いてきた数々の名作マンガと同じ、日常をゆるがす圧倒的な熱気を感じます。ただそれだけじゃ済まないのが、本作の舞台が文芸界だってこと。なんたって小説は自分を世界にさらけ出す「自己表現」のカタマリですから、お手本も正解もない。そんな世界だからこそ、「書くこと」をめぐる躊躇ない価値観のやりとりにぞくぞくします。いやその実、主人公・響をヒーローのようにただ憧れてみてるだけなんですけど（ファン心理って怖い！）。そのなかでヒーローではない、「ただ純粋に小説が好き」な同級生かよちゃんのエピソードも好きなのですが、これを苦悩するプロ作家たちの話に差し挟んでくるところがまた怖いんです。ああ小説を書くってどういうことなんだろう？

会社員 / 末永龍介

- 見た目はおとなしそうな女の子だが、そこからは想像できない行動や言動に驚かされます。そこから出てくる才能にあふれた小説を書くといった極端な違いに惹かれます。あそこまで一気に直木賞・芥川賞までとってしまうのはありえないだろうと思う所だが、どこまで行けるのかなと期待させてくれるのが面白い。今後どうになってしまうのかと次の巻が楽しみな作品です。

デザイナー / 平沼寛史

- 15歳の天才新人小説家の鮎喰響が、様々な大人たちや文学部の友だちと真正面から向き合って影響を与えていくお話し。「響自身はかわるのかな。」と読み進めていきますが、気に入らないと本棚倒すし、すぐ足が出るし…（笑）ですが、一度話して（蹴飛ばして）理解した相手には真摯に批評をする。話を聞く。ここも変わらず読んでて気持ちがいいです。あとは、だいぶ気持ちの悪い涼太郎に幸せになってもらいたい。がんばれ！涼太郎！

アニメイト 販促課 / 鈴木寛子

- 小説家になるためのハウツー本なのか、なんなのか…？と思いながら読み始めたらこれまた大間違い！なんでしょう、非常にスカットする！！面白い。なんでこんな小説だけが好きな女の子がこんなに腕っぷしが強いのかとか疑問はあるけれど、とにかくスカットする。普段腹が立ってもここまで出来ないということを響はけろっとやっつけてのける。響がこれから文学界にどんな波乱を巻き起こすのか目が離せない

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 主人公の強烈な性格に、一巻を読んでからちょっと腰を引いていたのだけれど、今回ノミネートされたことで一気に読んで、驚いた。例えば音楽をテーマにした作品において、いかに主人公が優れた演奏者なのかを描き出す時「画面から聴こえないはずの音が聴こえてくる」感じが伝わってくることもある。『響』の場合、主人公の書いた作品の内容が描かれていないのにも関わらず、圧倒的なものとして伝わってくる。周囲の人間の反応を描くことで、主人公のずば抜けた才能が光り輝く。そのことにものすごく驚いた。そして芥川賞や直木賞をめぐる戦いが、こんなにも面白く描かれるとは。マンガにできることって、まだまだたくさんあるんだな。そんな気持ちになりました。この機会をくれたマンガ大賞にも感謝したい。薦められて読んで面白って、すごいことだ！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

- ○○賞しか話題にならない小説界の戯画化と思えるが、その錆びついた価値観を、天才少女・響がどう壊すのか（色々な意味で）、ますます目が離せない。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 読んでいて楽しかったです。どのキャラクターのことも好きになる。桔梗さんは絶対幸せな結婚できる人だから幸せになってほしい、って思って泣きました。この漫画は小説を書いている人たちの話なのですが、大体のことは暴力で解決(？)していて、ダメなことなんですけど何だかもう清々しかったです。悪いことする奴にはとにかく暴力。暴力が一番強い。この漫画はバトル漫画かもしれない。どんなに嫌な奴も、響(ヒロイン)が振るう暴力で(？)心を入れ替えて(？)愛すべきキャラクターへ…??文系なのに拳で分かり合う…??暴力はペンより強い…???文系のヒロインが暴力で世界を変える青春バトル漫画????これから目が離せません。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 自分が壊されてしまいそうなほど圧倒的な才能が目の前を突き進んでいく。何かに真っ直ぐであるだけでこんなにも近寄りがたくて優しい。

往来堂書店 / 三木雄太

- ある意味、純粹で自分の信じる正義を貫き、自分の歩く道に障害があれば排除する。悪く言えば「頭がおかしい」のですがそんな常軌を逸した「天才」の彼女から目が離せず、これから作る彼女の世界を観れるかと思うとうれしくてたまりません。常人とは違う彼女の世界を多くの方にも体験してほしいと切に願います。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川元良

- 最初のワルい人達が出てきた時、んん?と思いました、段々引き込まれて行きました。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- 響のキャラクターに惹きつけられました。今後の展開が気になります。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 一人の天才の描き方が秀逸ではあるものの、その天才を囲む人物達も非常に魅力的。ストーリー上、空間的・時間的には大きな展開はないものの、それでも静かに淡々と天才が周囲に影響を与えていく流れは必見。

元書店員 / 齋藤隼

- 読もう読もうと思っていたのに手を出していなかった作品。マンガ大賞選考に参加していてよかった!この作品に出会えてよかった!響が普通でなければいけなくて、世間とズレていなければいけなくて、彼女が天才である、ということが伝わってくる。天才って生きにくいんじゃないかな、ということもあるけれど響の絶対にぶれない芯の通った姿をみるとそんな考えも吹っ飛んでしまう。さすががしいですね。ここまで圧倒的に力の差があると嫉妬みたいなネガティブな感情って湧いてこないのかもしれない。響に出会った周りの人々が刺激されて変わっていく姿も気持ちがいい。響の書いた小説がどんな作品なのか……。読み手ひとりひとりの脳内でそれぞれに妄想されている世界観も覗いてみたいです。

三省堂書店営業企画室 係長 / 内野 智未

- 天才の才能自体ではなくてむしろ一般的な天才観、救世主願望的な天才待望論の危うさを描いているように読めるところがいいです。とにかくヒキが強い作品ですが、新人賞の選評とかの業界的にそれっぽい細部の描写が個人的にツボに入りました。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 不器用ながらも自らの価値観や信念に従って正直に生きる天才「響」の姿はとても人間臭く、不思議と身近に感じることができる。だからこそ常識にとらわれない彼女の豪快な行動や発言はとても痛快。主人公の響が天賦の才を持つ人間として見事に描かれている一方、持たざる者にとって彼女の才能がどれだけ残酷かという部分にもしっかり触れられており、「才能」というものについて深く考えさせられる作品。

醤油製造業 / 小野塚博之

- 最新の5巻を手に入れるために都内をあちこち探し回った。どこも5巻だけ売り切れだったので。高田馬場の書店の小学館のコーナーで高校生男子のふたり組が4巻を手にして「これ知ってる？ 小説家になる話なんだけど」とか要領を得ない話をされていて、ひとり「ふーん」と興味ない様子だった。タイトルも題材も地味だし仕方ないかなと心中苦笑い。5巻は次の日に新宿でようやく手に入れたのだけれど、それにしても4巻を読み終えてからの何日間かが長かったこと。無名の高校一年生、鮎喰響が文学賞に投稿した小説が、小説そのものの力のみで社会現象を引き起こしていく。その作品「お伽の庭」は作中、まとまった文章としては提示されない。せいぜい登場人物の口を介してプロットの断片と感想が語られる程度だ。提示されないまま、文壇の大御所からラノベ好きの女子高生まで、あらゆる人に「凄い」と言わしめる。主人公である響はそんな別格の、まさに神がかった作品を生み出した類まれな才能として描かれる。それでいて弱冠15歳の女子高生なので、周囲にあふれる凡庸な小説とそれを書いた大人の小説家、俗物的な文壇を断罪するのが許される。しがらみに絡み取られて誰もが言いたくても言えないことをばっさり言い切る響の行動には、それゆえ妙なカタルシスを感じる。加えて、地味なメガネの文系女子っぽい容姿でありながら、世間的な常識からすればサイコパスすれすれ、洒落にならない暴力性を隠そうともしない響の存在感がなにしろとてつもない。某テーマパークのランドマークの某城をバックに振り返る目チカラの凄味たるや……。要所要所でつぶやく決め台詞には「正義の味方」のようなあやうい分かりやすさがある。無垢、無意識な天才が並み居る凡才を（必然的に）蹴散らし、出るべくして世の中に出ていく過程を綴るシンプルな骨格は、若きジャズサックス奏者が主人公で同じ小学館刊行の「BLUE GIANT」に通じる既視感がなきにしもあらずだし、作画も自分の好みとは違うところがあるのだけれど、最強のキャラクター造形がそんな「重箱の隅突き」を打ち砕く。迎合したり距離を置いたり、どっぷり同化したり拒絶したりしつつも、どこかで仕方なくそれ（＝社会）を意識して生きざるを得ない大人のしょうもなさ、打算、計算に、ゴスロリ服で臨んだ授賞式でパイプ椅子を振りかざして殴りかかる。そんなあられもないパンクな暴力性こそが、不思議に爽快な読後感の正体のように思う。マンガ的なお作法に照らした時の細かい違和感はこの際置いて、ぐいぐい引き込む破天荒の行く先をあっけに取られて味わいたい。

会社員 / 天野賢一

- 今回のラインナップのなかで「イッキ読み度」は個人的に一番高かったです。主人公・響の強烈なキャラクターだけでなく、傑出した天才の対比としての「凡人（＝人間）」の描き方も読みどころ。女の子はみんなかわいいし、青春部活モノとしても楽しめるなど、一見親しみやすい作りですが、読み進めるうちに色々な方向から考えさせられました。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- ヒロインの響の造形が魅力的。斜陽の文芸業界を舞台にしつつも、ここでしか息ができない人間もいるのだと思える。

ブロガー / サイトウマサトク

- 出版界隈のしがらみを才能だけでブン殴って（稀に物理攻撃）こじ開けていくという。フィクションに求められる爽快感と主人公の行動から目が離せない「何をやらかすか」という期待感が凄く、目の離せなさでは随一かと。また絶対に眼鏡を外さないタイプのヒロインであることを加味いたしますと大賞に推すべきかどうか最後まで悩みに悩んだ作品でした。

住職兼ライター / 蟬丸P

- 冷静に見ると好きになれない主人公なんですけど、話は文句なしに面白い！

明文堂書店 TSUTAYA 金沢野々市店 / 木村 俊介

- この漫画を読んでいると、改めて「小説」を読みたくなる！ぶっ飛んでいる「才能」、急募！ですね。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 「小説家になる方法」とあるものの、実際に方法が描かれてるわけではなく、ひたすら響ちゃん無双物語。というわけでエキセントリックな響のキャラを楽しめるかどうか、本作の一番のポイントかと思います。自分は楽しめました。

ライター / 芝田隆広

- 小説家を目指す天才女子高生・・・でも、天才ゆえの「やらかしちゃってる感」がたまらない。文豪にはこうしたズレた感覚が必要条件なのでしょうか。ときに等身大の高校1年生、しかし社会を変えるコトバを持っています。最近、身近なところで社会を変える強いコトバに出会ったので、とてもしっくり来ます。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- 危ういくらいにストレートな主人公の響に痺れます。腹を立てた時の危うい行動を、至極真っ当な反応のように感じるのは何故なのでしょう。

教師 / 持丸宏司

- はっきり言って、主人公の響ちゃんのことは好きになれません。だって才能もあって可愛くて運も良くて、それなのに性格が悪すぎる！ムカつく！のですが、そんな性格極悪な彼女の、純粋さ・真っすぐさに思わずハッとさせられ、彼女の生み出す作品を読んでみたくてたまらなくさせられてしまったのが悔しい…。

ホビー会社勤務 / 畑中 瀬路奈

- 主人公、響の人格にハラハラさせられながら、読みました。「あぶない子？」だけど、独自の正義で道を切り拓く姿に爽快感あり。

鍼灸師、理学療法士 / 碓氷麻里子

- ミスリードに続くミスリード！ 全然先が読めません。「女子高生が純文学を書く話をマンガで描く」という構造を取っているのがまず冒険だしアイディアがある。マンガにも、これが小説だったら純文系と分類されるだろうなと感じる純漫系とでもいうような作風の作家さんはいらっしゃるわけですが、この作者は完璧にエンタメ。作風としては、わかりやすい例えでいえば、ガラスの仮面的といえいいでしょうか。漫画がうまい。純文学をエンタメ漫画で描くおもしろさは、たぶん、漫画編集者の黎明期、文学編集者との確執とかライバル意識とかをよくご存知のかたは、もっとこの「おかしみ」が深く味わえるんじゃないかな？と想像。いまのところ、肝心の小説をまったく読ませずに、読者に漫画をぐいぐい読ませるところにも柳本光晴先生の力量を感じました。

お菓子研究家 / 福田里香

マンガ大賞2017 ノミネート作品

ビッグコミックスピリッツ / 小学館

「アオアシ」小林有吾・協力：上野直彦

選考員コメント・1次選考

- 地方の町で暮らす、サッカー好きの男子中学生があるとき、Jリーグのユースチーム監督に出会い、その才能を見いだされて……という設定は、サッカー漫画の“あるある”。でも、そこからの展開がすごかった。セクションで一緒になったメンバーとのぶつかり合い、いがみ合い、分かり合ったり、分かり合えなかったり。サッカーだけあって、登場人物はものすごくたくさんいるのに、見事にキャラがかぶらず、どいつもこいつもチャーミング。敵役として描かれる人も、いちいち憎らしく、でも、単なる悪役におわらない余韻もある。サッカー漫画ってルールよくわかんないし、興味ないんだよねと言ってる友だちにもむしろ進めたい一冊です。

馬場企画 / 島影真奈美

- 連載開始当初からキャラクターとストーリーをじっくり育て、最新の7巻で大きく展開。このマンガ自体に良質のサッカーの試合のような気持ちよさがある。ページやコマといった、ひとつひとつの局面にも魅力的な要素が満載。そうした細かいパスワークでつないで崩す。7巻ではストーリー上、大きなサイドチェンジを行った。実際のチーム運営でも重要とされる、コンセプトも「戦術眼」という視点が明確になってきた。各話、各場面のパスワークを楽しみながら、全体のダイナミックな展開にも歓声を上げたくなる。久しぶりに腰を据えて読みたいスポーツもの、満開前夜である。

(有) 馬場企画 ライター／編集者 / 松浦達也

- サッカー漫画には珍しく、下部組織に関する漫画。実際にやっている人が読んでも楽しめます。徐々に成長していく姿をみていると、一緒に成長しているように感じ応援したくなります。おそらくサッカーを小さい時にやっていた人はわかる練習方法や、言われた事がでてきてあの当手を思い出すかもしれません。新しいリアルサッカー漫画としておすすめです。

ブックエクスプレス / 中村 哲彰

- 最近のサッカー漫画は面白いものが多いですが、主人公個人に特にクローズアップした一冊。真っ直ぐで実直、不器用な主人公の心の葛藤が見どころです。戦術だったり基礎だったりを全く知らない主人公周りは子供のころからユースなどで「サッカー」を徹底的に鍛え上げられた選手ばかり、果たしてこの逆境を乗り越えられるのか!? 悩みながら成長して行く姿がとても良いです。

TORICO まんが王 通販部 / 日吉 雄

- 展開がアツい漫画は？と訊かれたら、今はこの漫画を紹介する。若い才能が開花していくストーリーは爽快。

元書店員 / 齋藤隼

- サッカー漫画は多いですが、王道的な面白さのサッカー漫画です。主人公のサッカーに対する考え方が周りのチームメイトやコーチからの刺激により変わっていく様がやはり王道的ですが鉄板な面白さです。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

選考員コメント・2次選考

- 一次にも投票させて頂いたのでここはしっかり推したいですね。海辺の田舎の楽しいサッカーチームから、真のサッカープレイヤーとして成長して行くある意味王道のスポーツマンガです。 ですが魅力的で存在感あるキャラクターの確立・主人公に降りかかる読者の予想以上の困難。 主人公達は、どう葛藤し、どう成長して行くのかずっとワクワクドキドキする展開に目が離せません！主人公の名前が「葦人」ですが、植物の「葦」のように真っ直ぐ大きく成長して行くという意味が込められていると勝手に思っていたりします。 どん底に落とされたり、ほんのり!?ラブコメもあったりと読み応え十分の一冊です！

TORICO まんが王 通販部 / 日吉 雄

- 一気に読みました、めっちゃ面白い。途中途中で泣いたりしながら読んだ。こういう作品を読むと、やっぱり漫画は面白いなあと純粋に思います。私はたいしてサッカーのことはわからないけれど、これだけは言える。これはいいサッカー漫画だ!!!

オリオン書房ノルテ店 / 池本 美和

- ぶっちぎりでした。キャラクター、絵の力、お話の面白さ。全てにおいて文句なく一位だ！と思いました。絵で、キャラクターの視線や表情で語らせて、アシト以外のキャラをモノログで雄弁にさせない描き方も巧いと感じました。あと、ヒロインがしっかりかわいいのも魅力！

事務員 / 工藤圭

- 圧倒的な熱量とパズルのように組み合わせさせていく試合の展開に心が躍ります！

教師 / 持丸宏司

- 必殺シュートがある派手なサッカー漫画ではありませんがチーム作りやポジションごとの大切な考え方、また若いながらもプロの世界でやっていく少年の成長が描かれ、ユースという今までのサッカー漫画では比較的描かれることの少なかった世界に引き込んでくれています。加えて個人的に作品には常々大切な事だと思っていますが、絵が綺麗で読みやすいという事が好印象です。続きが楽しみであっという間に読み終わる作品でした。良作だと思います。

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- サッカーに興味がない人でも、ぐいぐい引き込まれる丁寧さと面白さがあると思います！

明文堂書店 TSUTAYA 金沢野々市店 / 木村 俊介

- 毎回マンガ大賞のノミネート発表後、未読だった作品を読むのが楽しみなのですが、今回はそれがこの「アオアシ」で、さらに多めの既刊を一気に読む、あの最高に贅沢な一晚をもたらしてくれました。むろん翌日、周囲の友人に勧めまくったのは言うまでもありません。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- ますます面白くなっている漫画。アシトの成長と恋？になるかわからない女の子との微妙な関係。ユースのセクション後に紆余曲折ありすぎてそれに1つ1つ対応し、成長している主人公。簡単に書いてますが本当に色々あるんです。成長するために、これからもっと大変な事があるのはわかっているので、変わらず応援していきたいです。サッカーをすごく丁寧に描いてくれていて読み応え十分。もっと売れていい作品。

ブックエクスプレス / 中村 哲彰

- 細かいことはわかんないけど、面白い！サッカーに余り詳しくないので、普段は自分から手に取らないところを、ノミネートをキッカケに読みました。すごい熱量を持っていて、グイグイ引っ張られる感覚。共感させる力というのをすごく感じて、読めてよかったなと思ったと同時に、スポーツ漫画を敬遠しがちな人にこそ勧めたいと思います。

WEB デザイナー / 河本智芳

- プロのスポーツ選手とは何かどんな人かプロになりうるのかその一瞬一瞬にかける熱い想いが過去にギッシリ詰まっています

(株) キャナルエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 飽きさせない展開、決して順風満帆でない物語がたまらなく面白い、そして熱いです！登場人物それぞれの個性もあって、群像劇としても見ごたえが出てきました。そしてヒロインが可愛い。正統派に可愛い。（重要）王道という言葉はこういうマンガにこそ使いたいです。

文教堂書店浜松町店コミック担当 / 金田健太郎

- スポーツ漫画は限られた世界ゆえにどうしても切り口が似て来たりするものですが、まだまだサッカー漫画に残る新しい世界を見せてくれた作品。Jリーグユースチーム、素質は一流でも戦術を知らない主人公。上京の場面で泣いてしまうほど成長物語としての魅力がありながらも、ボールタッチとは、ラインで動くとは、など実は初心者にはサッカー観戦のポイントを教えてくれる、秀作です！

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- 読んでいてとても気持ちがいい漫画だなという印象。天才肌ではないがまだ見ぬ才能を秘めた少年が葛藤とともに進んで行く姿が非常に応援したくなる。王道な展開だからこそやっぱり面白いと感じさせてくれました。サッカーに誠実な姿もまたいい感じですね。このまま世界の舞台に羽ばたいていくのかなと、期待させてくれる、そんな少年の姿が楽しみです。

デザイナー / 平沼寛史

- 「人に薦めたい」というコンセプトに戻った時、この作品がたぶん初めて読んだら一番先が読みたくなるかなと感じた。サッカーを知っていたら、好きだったら、もっと面白く読めるのだらうというところは（個人的に）残念だけれど、何も知らない身からしても十分、作品からの熱を感じることができた。ちょっと古風なところもあるけれど、でもこの情熱と王道の面白さはきっと揺らがない。先が楽しみな作品です。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

- クセ球揃いの候補作の中で、唯一オーソドックスな熱血少年マンガ。しかしそれゆえに「ホッ」としてしまったのは私だけか。サッカーに全く興味がないため、詳しい人から見てどうなのかわかりませんが、少なくとも近代サッカーが「根性」でなく「頭脳」で成り立っていることが素人によくわかった。展開は王道すぎるくらいはあるが、それでも何度も感動してしまうのは、隅々まで力が入った作画と、キャラ造形の巧さゆえ。やっぱりこういうのが好き。7巻からまた盛り上がってきたのでしばらく目が離せません。

読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員 / 石田 汗太

- マンガ自体に良質のサッカーの試合のような気持ちよさがある。ページやコマといった、各局面でも細かいパスワークでつないで崩す気持ち良さがある。ストーリー上、大きなサイドチェンジを行った7巻まででキャラクターも育ててきた。実際のチーム運営でも重要とされるコンセプトも「戦術眼」という視点が明確になった。各話、各場面のパスワークを楽しみながら、全体のダイナミックな展開に思わず歓声を上げたくなる。誤解を恐れずに言えば、現代のスポーツマンガにおける『SLAM DUNK』に化ける可能性すらあると思う。

(有)馬場企画 ライター／編集者 / 松浦達也

- サッカー少年の成長物語です。スポーツマンガは技術の差を、努力と根性で埋めるイメージが強かったのですが、このマンガでは考えることや、コミュニケーションにもスポットが当たっています。未熟な主人公は、技術はもちろん、考えや、コミュニケーションのレベルの違いに、直面します。考えや、コミュニケーションのレベルの差って、技術の差を見せつけられるよりもずっと厳しい気がしませんか？愚直に努力すれば追いつけるというものではなく、考えて正しく努力しなくてはならないのですから。そんな厳しい状況にも負けずに、たくましく成長してゆく主人公の姿に胸が熱くなります。心技体そろった新しい熱血サッカーマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

- 主人公が己の才に自覚がないまま、ひたすら愚直に努力を続け、それが一歩ずつ実を結んでいく描写は読んでいて非常に爽快。絶対に折れないその姿勢からは力を与えてもらえる。

元書店員 / 齋藤隼

- 久しぶりに、次の回が待ちきれないサッカー漫画に会いました。主人公のひたむきさ、不器用さもさることながら、主人公を取り巻く仲間たちの熱さもチャーム。敵なのか味方なのか、イマイチつかめぬ監督たちや、わかりやすく「敵」なキャラクターのいやったらしさもいい。話が進んで、どんどんキャラクターが増えていくのに、ひとりひとりの濃度が薄まらない。フィールドの中も外も両方おもしろく、今後の展開が楽しみな作品です。

馬場企画 / 島影真奈美

- ノミネートで知って読んだのですが、こんなにも面白い作品をノーチェックだったことを後悔しました。2016年末時点で7巻まで出てるなんて…。サッカー漫画はたくさんありますが、部活ものが多いなかでこちらはJユースもの。そのせいなのか、一巻から既にキャラクターたちの気迫が段違いで、徐々に盛り上がっていくのではなく、最初からフルパワーでぐいぐい引っ張られてしまいました。今期一番勢いを感じた作品です。

会社員 / 宇田川 結衣子

- 才能は幼少時から管理育成される時代に入ったサッカー界で、Jリーグのクラブユースの生存競争を描く。サッカー選手に必要な不可欠な情熱とインテリジェンスを基礎から教えてくれるアツい作品です。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- ノミネート作品ということで、サッカー漫画があまり得意でないが、とりあえず読み始めた。しかし、巻を追うごとに面白くなって、まさに『今読んでおく作品』だと感じた。天才が一人目立って勝ち続けるわけではなく、基礎や戦術を学んで強くなっていくのいいなと感じた。

主婦 / 赤坂真実

- ノミネートをきっかけに知った作品をつい入れたくなっちゃうのですが、それがこちらの作品。普段スポーツ漫画はほとんど読まないのですが、読めてよかった。主人公の真直ぐさに時々タイライラするけど、それ以上にハッとさせられ心が洗われました

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- よく練られているなあと思わされます。ストーリー展開もキャラの配置も、初めはベタだな～と思わせておいて、巧妙な戦略が潜ませてある。なおかつベタの部分（特訓してすぐ成果が出るとか）もちゃんと残してあって快感のツボをつく。主人公とヒロイン2人の距離感もバランスよく、押し引きが楽しい。うまいですね。

朝日新聞記者 / 小原篤

- プロサッカーリーグの構造は知らなかったけど、それでもグイグイ引き込まれる。「プロの世界は厳しい」なんて安易な言葉、二度と言えなくなりました。

医師 / 岸本倫太郎

- サッカー漫画って正直あまり読んだことが無かったのですが、作品の熱さに思わず一気読みしてしまいました。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- もともとスポーツマンガは読まない上にサッカーのことが全く分からないのですが、それでも1秒も飽きることなく読める、しかも泣いちゃったりもする。とてもリーダブルで、エンタメ感のある作品でした。あと、スポーツ＝男の世界、というありがちな世界観ではなく、女の子たちがちゃんと存在しているのがすごくよかったです。

ライター・大学講師 / トミヤマユキコ

マンガ大賞2017 ノミネート作品

ゲッサン / 小学館

「からかい上手の高木さん」山本崇一朗

選考員コメント・1次選考

- 一言。高木さんが可愛い！これにつきます。巻を追うごとにどんどん可愛くなる高木さん。読んでるこっちがドキドキします。高木さんの淡い恋心を感じてしまいますが、肝心の男の子西片くんはからかわれてると思っていて（実際はからかっているのが大部分ですが）クスッとしてしまいます。こんな女の子が隣で毎日からかってくれたら嬉しい・・・いや楽しいだろうなあ。この可愛さ満点の『高木さん』にもっとはまってしまえばいいのにと、皆様におすすめします！

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- かわいい、かわいい、とにかくかわいい。ヒロインの高木さんだけでなく、相方？の西片くんもかわいい。（男女で受け止め方が違う作品だと思いますが、女性から見るとどんな漫画なんですか？）

会社員 / 林礼春

- からかうヒロインと、からかわれる主人公。それだけの話なのに、ほんわかさせられます。

まんたんウェブ副編集長 / 河村成浩

- 単純な中学生である西片くんは隣の席の高木さんにかからわれっぱなしで、なんとか高木さんに一泡吹かせてやろうとするも…というオッサン連中が皆、遠い目をして、こんな同級生と過ごしたかった！という理想の学生生活の時点で、してやられた感に打ちのめされました。

住職兼ライター / 蟬丸 P

- ラブコメに必須である独特の「間」。思わずニヤニヤ。十分堪能できます！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 高木さんのイタズラがとっても可愛くて、ニヤニヤが止まりません……！ずっとこの二人を見ていたい！

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

- 1話完結で、テンポがいい作品。とにかく、高木さんが良い！

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

選考員コメント・2次選考

- からかう高木さん、からかわれる西片くんの2人だけで、これだけ読ませるとは。西方くんを応援したくなるように、「からかい」加減が絶妙です。

まんたんウェブ副編集長 / 河村成浩

- 中学生時代に帰りたくなる！ これぞサンデーと言わんばかりの軟弱系ラブコメの最高峰！ おそらくアニメ化になると思うけど、高木さんの声はみんな色々妄想（イメージ）しているから、すごく注目されますね。

COMIC ZIN 商業誌部門責任者 / 塚本浩司

- 個人的に大好きな作品。高木さんにからかわれ続ける西片くんだけど、二人とも可愛すぎる。話が進めば進むほど高木さんが可愛くなっていくのがたまらない。こんな高木さんにからかわれたい！と思いながらも、西片くんとの距離（気持ち）が少しずつ近付いていて、読むたびに悶絶・・・いやニヤニヤしてしまう。日常に疲れてる時に読んで癒されて欲しい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 毎回高木さんにからかわれるのが羨ましい(笑) テレもなくあんな風にかからかわれてみたい(笑)

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- なんととっても高木さんが可愛い。学生時代の異性って、なんか恥ずかしくて、直視できなかったり、うまく話せなかったり……そういうの、誰もがあったと思います。だからでしょうか、高木さんを読んでいてとっても羨ましいなあと思いました。高木さんみたいな女の子にかからかわれてみたかった……。ずっとこの二人を見ていたい。そう思える作品です。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

- かつての星やつらの映画「ビューティフル・ドリーマー」では永遠に続く楽しい楽しい文化祭前日がえがかれた。この作品のアプローチは明らかにそれとは違うものの、永遠に続く本当は好きあっているのにその先は描かれない展開が甘酸っぱい青春のきらびやかさそのものとなり読み手を飽きさせない。告白なんてなくなったらラブコメは成り立つ。望むことならずっとこの時間が続いてくれればいい。

株式会社マーズ・シックスティーン取締役社長 / 北山友之

- 「からかい」のバリエーションがこんなにもあることに驚きます。からかいからかわれ、という無邪気な遊びが第1層。異性であることを意識させるおもわせぶりの高木さんの言動で主人公（と読者）がドキドキするのが第2層。そして、のぞき込んでくる彼女の瞳の奥にある（かも知れない）真情をあれやこれや想像する楽しさが第3層。高木さんの表情につけられたごく微妙な変化を読み取るため、ページをめくる手が止まり、その1コマをじいーーーーと見つめてしまいます。シンプルなシチュエーションと絵柄なのに、奥深く、味わい深いマンガです。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 日常系という枠の中でも高木さんと西片君のころころと変わる表情がとても微笑ましく、二人の距離感がずっと続いてほしいような…うまくいってほしいような…そんな作品でした。ニヤニヤしてしまうので周りに気を付けて読みましょう！

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

- 次から次と、小気味良い位にかからかわれまくりで、甘酸っぱい気持ちになりたした。何だか、高木さんが羨ましいような気がします。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- そして次に楽しいのが高木さん。ハイクオリティな「楽しさ」と「かわいさ」の両立っぷりには参りました。何回でも読めそう。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 高木さんがキュート。西方くんが可愛い。忙しい毎日の通勤・通学・寝起きに…とっても合う気持ちがゆったりとする漫画です。高木さんの「仕掛け」が毎回面白く、私も西方くんのように騙されてしまう。それが心地いい。ゆっくり読み進めていきたいです。

アニメイト 販促課 / 鈴木寛子

- こういうテイストの作品大好きなので、選びました！まさに友達以上恋人未満な微妙な関係と、主人公の心を知ってか知らずか色々仕掛ける高木さんの可愛さにメロメロです！思わずニヤニヤしちゃいます。

TORICO まんが王 通販部 / 日吉 雄

- 教室の隣の席のかわいい女子にひたすらからかわれる自分（＝主人公）。そのちょっかいにむきになって対抗しようとするけれど果たせない自分（＝主人公）。自分（＝主人公）では気づいていないけれどそんな日常が何より幸せだとよく分かっている自分（＝読者）——。ニッポンの青春のそんな分裂、せつない不可逆性を体現していて、かわいい作風なのに胸が詰まるマンガだ。印象的なタイトルを掲げたこのマンガが書店で平積みされているのは目にしていたけれど、候補作にならなければ読むことはなかっただろう。たぶんくやしいから。うらやましいから。1巻を読み終えた時、かわいい絵柄と甘酸っぱいクスクス笑いを誘う日常エピソードは好感度が高いけど、正直「このワンイシューで単行本何冊も出てるのか～。おじさん忙しいからついていけないな～」など感じた。けれどついつい既刊5巻を立て続けに面白く読み通してしまった。読み通した感想は果たして当初の印象どおり。とてもくやしい。とてもうらやましい。いいですね若いうて。永遠の日常と見せておいて5巻冒頭「想い出」で初めて繰り出す技……。ずるいです。日常すぎるというか、主人公も、その主人公に肩入れする読者も若いのになんという志の低さだ、世界が小さ過ぎやしませんか、などとイヤミにつぶやいてみせるのは簡単だろう。そうであっても、志が低くて何が悪い、と開き直りたくもなるほどに高木さんのキャラクターは魅力的だ。こんな子が隣の席にいたら毎日の登校も楽しかろう。現実にはそんな楽しい日々は起こり得ないと知っている大人こそ野暮なこととは言わず、これはもう「参りました」とこのマンガの、このマンガでしか体験できない世界に、ただただとっぷり浸るべきなのかも。

会社員 / 天野賢一

- 可愛すぎる、とはこのことかと思います。こんな幸せな感じのする作品もなかなかないかと。

会社員 / 林礼春

- これはラブコメなのか、お笑い漫画なのか。漫画界に新しいジャンル、からかい漫画を創設した意欲作。ほのぼのとした絵、ゆるい雰囲気、どこか「よつぱと」を想わせる風景を描くが、からかいネタも秀逸。いやされる作品も、もう4冊目。よく続きます

弁護士 / 長島・大野・常松法律事務所 / 三村量一

- オッサン連中のノスタルジックな感傷をこれでもかと責め立ててくる「こんな学生生活を送ってみたいかった」学園日常モノの雄であり、高木さんをはじめキャラクターの表情や可愛さという漫画における演技・演出の妙が詰まった作品といえましょう。

住職兼ライター / 蟬丸 P

- もう西片くんの反応がイチイチ可愛い！ 読んでいてこっちまでニヤニヤしてしまう。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- なんか年甲斐もなく読んでいると、キュンとしてしまう自分がいるのは気のせいでしょうか。主人公の常に先をいつている高木さん。その先にいったと思っていたら、相変わらず先にいかれている主人公。2人のやりとりに、思い当たる人もいるんだろうなと思いながら読んでます。青春時代を思い出させてくれる漫画。

ブックエクスプレス / 中村 哲彰

「金の国 水の国」岩本ナオ

選考員コメント・1次選考

- 世界を糾弾したり過激に問題提起するということではなく、世界への好意の示し方という方向から描いているから、むしろ沁みる。少女マンガ伝統の、1巻ものの大傑作。現在連載中の「マロニエ王国の七人の騎士」も楽しみです。年末のマンガランキングで1位だったのは知っていますが……『もう評価されていることがあきらか』だからって、オレが『投票しなくていい』って事にはならない」です（3月のライオンの島田さんの台詞より改ざん）。

お菓子研究家 / 福田里香

- キャラクター造形、物語構成、世界観、全てが完璧な形で1つの作品になっている。姫、なんてかわいいんだ……！そして読後感が最高に幸せ！世界中の老若男女にすすめたいファンタジー。

漫画ライター / 門倉紫麻

- いろんな伏線が小気味よく回収され、読み終えた後にホッと幸せな気持ちになる漫画でした。

教師 / 持丸 宏司

- キャラクターの愛らしさ、作品全体の空気感が秀逸です。つかれた心に処方したい大人ファンタジー。

アナウンサー / 松尾 翠

- 手に馴染む厚めの単行本。王国、姫様、城塞都市、尖塔。RPGのような中世風の設定。全1巻300ページ弱で完結する「おはなし」——。12巻に及ぶ長編になった前作『町でうわさの天狗の子』から一転、短編、中篇も冴える岩本ナオの引き出しの多さにやられた。舞台は商業集積地として栄華を極めるものの、水源の枯渇で干上がりつつあるA国と、自然と水には恵まれているが物資に乏しい小国のB国。隣国同士はよくある話で仲が悪い。あるとき、素朴で気丈、心根の優しいA国の姫サーラ（ぽっちゃり絵姿のかわいさは岩本ナオならでは）と、不景気で土木技師の仕事にあぶれたB国の気のいい青年ナランバヤルが偶然出会い、惹かれあうところから、隣り合うふたつの国の未来を巻き込んだストーリーが転がりだす……。国の威信って、権力って何だろう。立派な国ってどんな国なんだろう。政治って、国交って、公共事業って誰のためなんだろう？ 平和ってどうして大事なんだろう。そんな問かけを正面から大上段に振りかざすのではなく、読むうちに一人ひとりがそれぞれ考え、感じるようなさりげない仕掛けになっているのが品のいいエンターテインメント。なぜこのようなマンガが2014年から16年という3年間に描き紡がれたのかについて深読みするかどうかはさておき、満月の石橋での約束、足元すくむ隠し通路での告白などなど、見せ場の数々に触れれば、映画のような読後感に満足してページをとじること請け合いです。

会社員 / 天野賢一

- 1冊まるっとで語り終わられるサイズの物語が作者さんの真骨頂がより濃く出るので好んで読むのですが、いやあ、これはいいおはなしを読んだなあ、と、作家さんのやさしい気持ちにところが洗浄されたような一冊でした。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 近くて遠い隣国まるで日本とお隣の国のようにではないだろうか！？文字の量や分厚さから途中で挫折そうになるかと思いきや、夢中で引き込まれます

(株) キャナルエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- とても心が暖くなる作品！好きです。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 絵本や童話を読んでいるような気持ちになります。隣国同士の仲違いしている国の王女と王子が交換結婚するのに、互いに犬、猫を自国の王女、王子として交換するところから始まります。結局は、最終的に収まるところに収まる王道ストーリーなのですが、そこが岩本ナオワールド。本当にほっこりするのです。優しい気持ちになって、このままおとぎ話として読み聞かせしたいくらいです。

舞台女優 / 大倉照結

- 二国間の政略結婚という古典的な少女マンガの題材がもつ普遍的な魅力を、圧倒的にテクニカルな描写で引き出しています。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 2つの国の争いの話だが、登場人物たちの思惑と意思通りにいかないことが綾なし、心に響く物語となっている。国王を説得する場面や、互いを思いやる場面などじんわり心に効いてきます。家族全員で読める漫画。

自営業 / 小野ゆうこ

選考員コメント・2次選考

- 岩本ナオ先生のマンガの上手さはハンパないです。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 敵対していた国と国の仲裁案として、一番美しい娘と一番賢い若者が出会い……。おとぎ話風の物語だからか、作品の中では登場人物の心理とかを深く掘っていないんです。でも、読者がこの物語を心のなかであたため続けると、いろんなことが得られる、そんな物語です。もちろん、得られるものは読む人それぞれで違うでしょう。あたため方によっても違うかもしれませんが、でも、必ずやあなたの心をあたため返してくれるはずです。あと、なんか、読んだ後になんとはなしに自分の薄汚さが恥ずかしくなるんです。落ち込むってほどじゃないんですけど、活を入れられた感じになります。

鳥取県立日野高校司書 / 野間勤

- 「ロミオとジュリエット」的大人向け寓話。現代における少女マンガの王道を行く岩本ナオの最新作が、中世風のファンタジーで来るとは……と驚いた。でも、読みやすいのにディテールが掘り下げられ、のどかな雰囲気が出るなか濃密なメッセージがある。トランプ化する世界ではすべての局面で二極化が進行する。でも！ どんな世界でもこういう胆力と知力を持ち得ることが一人でも多くの読者に届けばいい……。そんなふうに思われる。困難に直面しても、あきらめず、知恵を絞り、やさしさを忘れることなく行動し、そして報われる。少なくとも僕らが生きるこの世界の土台はそうであってほしい。マンガ大賞の選考基準は「いま友達にすすめたいマンガ」だ。老若男女、すべての友達に押しつけてでも読ませたい。1巻完結だし。

(有) 馬場企画 ライター／編集者 / 松浦達也

- 政略結婚の対象になった二人の想いや優しさが周りを巻き込んで世界を変えてゆく話です。人の愛や、想い、知恵は、あらゆるものを越え得るのかもしれないという希望を見せてくれます。どこかのんびりと優しくゆったり進む物語は、新しいおとぎ話のよう。読んでとても心地よく、優しい気持ちになれる、美しい物語です。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

- 読み終わってからも深く印象を残す作品。特定の場面を幾度も思い起こした。爽やかな強さを感じることができる。

自営業 / 小野ゆうこ

- ひとつの神話の誕生に、私たちは居合わせているのかもしれない。それは、作品そのものが話題となって、世に広く名を知られて長く語り継がれるようになるということでもあるけれど、別にとある世界、とある国と国とが対立から和解、そして共に手を結んでの繁栄へと至った物語を、奇跡と認めてその経緯を一種の国作りの神話として語り伝えていくという、そんな始まりに居合わせているということでもある。岩本ナオの『金の国水の国』（小学館）という漫画に描かれた物語は、たとえ架空であっても、たとえ漫画であってもそこに感銘があって教訓もあって、そして未来を示す教唆が見えるという意味で立派に神話としての価値を持つ。なおかつエンターテインメントとしての面白さも。A国とB国という、隣り合わせている国が戦争をしたことを神様が見とがめ、仲裁に入っては交易で栄えながらも、砂と岩ばかりで水資源に不安なA国と、森と水に恵まれながらも、なかなか産業が育たず貧乏なままのB国との間で、それぞれに人をやりとりするよう言いつける。内容は、A国からは1番美しい娘をB国に嫁にやり、B国からは1番賢い男をA国に婿にやれ、というもの。そしてA国では、国王の妾の末娘サーラがB国からの婿を迎えることになったけれど、着いた輿を開いたらそこに犬が寝ていた。そしてB国では、建築に通じた学者の息子ナランヤバルがA国からの嫁を迎えることになったけれど、こちらに来たのは猫だった。A国の王もB国の族長も、神様の言いつけを守らなかったということ。それで罰が当たらないところに神様の存在が疑われるけれど、結果としてもたらされた事態を考えると、もしかしたら神様は、そうした先々まで想定して、王や族長の不敬を見逃していたのかもしれない。ともあれ犬を迎えたA国の姫、サーラは騒動になるし犬も殺されてしまうからと父王に告げ口をせず、犬といっしょに暮らし始める。ナランヤバルも気にせず猫と暮らし始める。そんな2人が出会ってしまった。A国とB国の国境付近で、ルクマンと名付けた犬を連れて歩いていたらルクマンが山芋を掘った後の穴に落ちてしまった。困っていたところに通りがかったのがオドンチメグと名付けた猫を連れてナランヤバル。ルクマンを助けて親しくなったサーラから、家に来て助けてくれと頼まれ着いてって、そこで彼女がB国から婿を送られた姫だと知り、それが犬だったことも知る。けれども黙ったまま、ナランヤバルはサーラの姉たちが直して欲しいと言っていた時計の修理に赴き、そこに入り浸る元役者で顔立ちの良さから登用された

らしい左大臣とも知り合いになって、2人で水が枯れかかっているA国をどうにかしようと計略を巡らせる。一方でサーラも、迷い込んだB国でナランヤバルの父と知り合うものの、ナランヤバルに妻がいると信じてしまう。そこだけはちょっとすれ違った2人だったけれど、互いに才能を信じ優しさを信じていながら、対立していたA国とB国の橋渡しをして2国が共に栄え続けるための道を探ろうとする。そして得られたひとつの奇跡。犬を送り猫を送った策略が、けれども心の綺麗な2人を会わせて国を近づけ平和と繁栄をもたらした。 だったらこれから嫁は猫を送り、婿は犬を送るべきかといった教訓にはならないけれど、対立していてもわかり合える部分はあるといった教訓は得られそう。上に立つ者たちが暗愚でも、A国の第一王女のように国の行く末を考え、有閑を装いながらも優れた者を集め、ナランヤバルのようなB国の人間にも行動を許して王を牽制し、民を救おうというものもいたりする。そんな思いをどう広げ、叶えさせるべきなのか。勇気というものの大切さを教えられる。 そんな姉も素晴らしいけれど、姉たちを動かしたサーラという姫の、誰よりも優しくて感性が豊かで開明的なキャラクターが良い。ちょっぴりふっくらしているけれどそこもまた愛らしい。ナランヤバルの方も風体は胡乱ながらも建築や土木に通じていて、左大臣らを図ってB国から水を引こうとし、妨害もはねのけて両国を立て直そうとする。才能は意外なところに眠っているのだなあと言うのも、物語から得られるひとつの教訓だ。 ここに至るどこかに、あるいはすべてに神様の思惑があったのか否か。神様に聞いてみなければ分からないことだけれど、そうやって生まれた平和を繁栄を見るにつけ、相争う国々がちょっとした優しさの交流から繁栄を得るという神話の雛形として、『金の国水の国』は語り継がれることになるのかもしれない。

書評家 / タニグチリウイチ

- 読後の興奮が3日たったの冷めないなので、偉そうな文章になってしまってもそんな他意はないのを先にお断りしてかせてもらいます。 もう！本当に久しぶりに「こんな漫画が読みたかったんだー！」と叫びたいような良作でした。 私の感じていることですが、近年、漫画を読む環境は変わり電子コミックの冊数も増えさまざまなところで広告を見るようになりました。読める漫画の数が増えた。これはよいこと。 でもその代わりに、数多い中から手に取ってもらわねばとインパクト勝負のものも増えてると思うのです。衝撃的なワンカットやグロとかね。それはそれで戦略の一つだけども、まとめサイトなどみるたびに出てくる広告に興味と同時におなかいっぱい感も感じてました。事実は小説より奇なりもとい、漫画のように奇妙な事件や悲しいことはいっぱいおこるこの現実。なのに、さらに漫画を読んで後味悪くなる必要はないのではと。 そんな思いでいる時にこの作品に出会えたのはとても幸せでした。 王道じゃんとか、いやいやお嬢さん都合よすぎるくらいいい人で、鈍感でしょうとか言うなかれ。 だって現実の世界じゃないもん。漫画の世界だもん。未来の子孫がロボット連れてきたり、空を飛んだり、偶然に出会った敵国の男女が運命的な恋におちて、幸せな世界を作ることくらい平気で起こる世界なんだぜ～。

鳥取県 美術教員 / 佐川由加理

- この賞の「すすめたくなるマンガ」というコンセプトにこんなにも合致する作品はない。絵、キャラクター、お話、全部そろってパーフェクトな上に、全1巻で一気读完し、手元に置いておけるし、パッケージングとしてもすばらしい！本当に、この幸せな読後を多くの人に味わってほしい。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 今年はずいぶん迷った年でした。どれもこれもおもしろい。でも、その中でいちばん、友だちに勧めたいマンガがこの『金の国水の国』でした。いじわるな姉姫に、優しい妹姫、傲慢な父王に、悪巧みをする大臣……と、おとぎ話によく出てくるモチーフが勢揃いしながらも、ファンタジーのお約束を軽々と飛び越える。たった一巻で完結するとは思えないぐらいの世界観で楽しませてくれました。単純な善か悪かではなく、第三の道を示唆してくれる勇気の書でもあります。

馬場企画 / 島影真奈美

- 童話のおとぎ話から抜け出してきたようなお話で、いつまでも何度も読みたくなる。読んでいてほっこりします。

舞台女優 / 大倉照結

- 久しぶりに心洗われる素敵な漫画を読んだなあ、という幸せな気持ちでいっぱいです。ほのぼのと温かく、それでいて冒険やスリルもあり。すさんだ心に沁みいるような、ひとの心の優しさや美しさを描いた、まさにおとぎ話のような漫画でした。

主婦 / 安田ママ

- 単巻できれいにまとまっていて完成度が高く、楽しく読める作品。ぼっちゃり系なヒロインがかわいいです。

ライター / 芝田隆広

- たった1巻でこの内容の充実度は本当にすごいと思います。少女マンガのようでもあり、少年マンガのようでもあり、歴史モノでもあり、恋愛モノでもある。ひとりでも多くの人に読んで欲しいです（学校の道德の教科書とかコレでいい！）。そして、現実の世界がいまいろいろと大変なときに、ふつうの、というか、わりと地味な（最初からヒーロー＆ヒロインタイプじゃない）人たちが活躍して世界をよりよい方向に変えていくって筋書に触れて、勇気を貰いました。あまりにも素直な感想になっちゃうんですが、わたしもあんまり世界に絶望しすぎずがんばって生きてこう…って思いました。

ライター・大学講師 / トミヤマユキコ

- 1巻ものの傑作が賞を取れる機会はなかなかない。続いてこそおもしろいマンガであるという風潮もあるし、それも間違いなくマンガの持つひとつの側面だと思います。けどやっぱり、1巻完結で完璧におもしろかったです。岩本先生の描く男子の関係性がすごく好きです。しっかり者の黒髪男子と、天然でちょっと浮世離れしたイケメン白髪男子の組み合わせは、岩本作品に繰り返し登場しますが、むしろこれからも登場してほしい！と切望。この関係性を突き詰めてほしいです。あとヒロインの造形が、すごい！ こんなぼっちゃり太った娘って……本当の「作画的冒険」とはこういうことだと思います。こういう容貌をヒロインに据えて、編集部からオーケーが出て、読者に支持されるって「画力」があるってことだと思うんです。もちろんストーリーテラーでもあるし、キャラ作りが素晴らしいってことでしょね。ようは作者にマンガ力があるということだと感じます。

お菓子研究家 / 福田里香

- 岩本ナオ版『アラビアンナイト』って感じの作品。この先生の描く人間は、たとえ悪い役ですらあたたかみを感じる。なんという才能、なんという傑作。ぐっとくるセリフ目白押し。疲れてる人はこういうのを読むといいと思います、やさしくなれそうな気がする。

オリオン書房ノルテ店 / 池本 美和

- 美しい世界観に浸れる作品。でも、ファンタジックだけど現実的な、なんとも不思議な気持ちで作品を読みました。現実から逃げて（笑）、美しい世界にただ浸りたいだけの時にもぴったりですー。

会社員 / 金子幸恵

- 読んでいる途中で「最終話」って書いてある扉絵が出てきたので、エッもう終わり！？まだまだ読みたい！って思ってた残りのページ数の厚みを確かめました。クライマックスのシーンでは「これは最高のプロポーズってやつじゃないのか（いろんな意味で）」って思って泣きました。他にも素敵シーンがたくさんあって、いっぱい泣きました。ライラさんがすごく気になる。グズになったら買ってもいいかも。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- いろんな伏線が回収され、最後には全てが丸く収まってスッキリしました。夢のある物語が好きです。

教師 / 持丸宏司

- 歴代ノミネート作の中でも、屈指の純愛物語ではなかろうか。具体的な言葉は無くとも、相手を思いやる気持ちが痛いほど感じられる。これはそういう物語。そしてもう一つ。ほんの少し見方を変えるだけで、世界は変わるのだと教えてくれる。砂と岩の国が、金の国に変わるのだ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- ああ、これはとても大切なマンガになるな、と物語の序盤でもう嬉しくなりながら読み進めました。その序盤、主人公が「(あなたの国は) キレイっすね」と告げるシーン、受け手のキャラの表情の変化にシビレてしまって5分くらいそのページを行ったり来たりしてしまいました。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 絵も物語もとても可愛らしく、最初から最後までずっとほわほわとした温かい雰囲気包まれている作品です。好感の持てる主人公とヒロインに、「こうなったらいいな」と思う展開がきちんと用意されていて、読み終わった後、「めでたしめでたし」と深く頷きながら本を閉じていました。

図書館司書 / 堀江千秋

- ユーモアや現実味を交えたファンタジー世界と愛すべき人々の造型が秀逸。多彩な楽しさをコンパクトにまとめた正真正銘の快作。

レビュアー / 福井健太

- 何とも心が温かくなった大好きな作品！久しぶりにいい涙が出ました。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- たった一冊とは思えない完成された一冊。おとぎの国の心躍る冒険譚が力強く描き切られていました。読み応えのある作品。

事務員 / 工藤圭

- 開始2ページ目の見開きで「なるほど、このマンガはハッピーエンドで終わるのだな」ということがわかる。そこへ至る過程。予兆。あるべきものがあるべきところに収まるダイナミズム。それが、美しい、と思えた。どっとはらい。とっぴんぱらりのぶう。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 1巻完結作品大好き人間としては選ばざるを得ない！宝物のような物語。何回も開けて眺めて憧れの溜息をつく、そんな作品です。

WEB デザイナー / 河本智芳

マンガ大賞2017 ノミネート作品

good！アフタヌーン / 講談社

「空挺ドラゴンズ」桑原太矩

選考員コメント・1次選考

- 絵がかっこいい。この世界の社会をどう描いていくのか気になる。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 「ドラゴン」と「飛空艇」…ズルい。「ギョウザ」と「ビール」や「ピザ」と「コーラ」に負けないほど相性抜群なこの組み合わせ。これだけでワクワクしてしまう人も少なくないと思う。でも、ありがちな剣と魔法の世界ではなく、出てくるのは至って普通の人間。まるで海でクジラを捕えるように空で異形の龍を捕えては解体し、それを売って暮らしている人達のお話。なんでこんなに食べ物めいたコメントになってしまったかということ、作中に描かれているドラゴン料理がそれはもう本当に美味しそうなんですよ…。

醤油製造業 / 小野塚博之

- 空を飛んで旅をして、竜を獲って調理する。わくわくする材料をどばっと突っ込んで、そこに流浪する人のさみしさみたいなものをスパイスでかけた感じ。冒険もそれぞれの物語も気持ちも、これからもっと描かれるのだろうけれど、まずはこんなマンガが産声を上げていることを、多くの人に知ってほしい。読んでほしい！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

- タイトルも「喰いてえ龍（ドラゴン）！」内容とかけて有り、絵柄も非常にセンスのよい作品。ドラゴン・飛空艇と出てくるものがワクワクさせてくれます。食べてる姿も美味しそうでいいですね。ドラゴンと戦う時のドキドキ感もあり、今後の展開がとても楽しみな作品です。

デザイナー / 平沼寛史

- 会社の後輩が「読みましたか！読んでないですか！」と転がりながら薦めてくれたマンガ。読み始めてもう掴まれまくって、もう次の冒険が見たくて仕方がないのです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- ナウシカとラピュタが好きな私に絵が大ヒット。ナウシカとラピュタが好きな友人に勧めたい。久々にこういう世界観に浸れるのがいいです。料理の描写が多くてまた料理マンガ的なアレかな？と思いましたが、よく考えたら料理が一番の娯楽なのかな…と冷静になりました。なので、捕物・航空マンガとしてこの先のストーリーを楽しみにしています。

WEB デザイナー / 河本 智芳

選考員コメント・2次選考

- ラピュタとかで出て来る飛空艇版の捕鯨みたいな世界観、ストーリー展開やテンポも良く進んで行くので今後に期待を持って推薦

Hair Make Lounge tetote 代表 / カ丸 真

- 空挺。というだけで何かわくわくと心を揺さぶられるのだが、生きる、食べる、など登場人物たちの立ち振る舞いから改めて自分と対話させられる。

自営業 / 小野ゆうこ

- 今の世の中では賛否両論あるが日本の伝統漁の1つである捕鯨を思い起こさせ、命をかけて生き物の命をいただいてそして命を繋ぐそんな当たり前だけど、心のどこかに置いてきた繋がりを改めて思い起こしました

(株) キャナルエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 「一冊ではまだまだ魅力がねー」とかとか、自分の中で選ばせていただくときの理由にすることがあるのですが（しかもえらそうに）、「空挺ドラゴンズ」は1巻目から魅力全開。後輩から勧められての読書中、「まさにこんなのを読みたかったんだ」とワクワクしました。2016年いちばん鮮烈な印象を残した一冊。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 捕鯨船に乗って海で鯨を追うように、捕龍船に乗って空で龍を追いかける人々の物語。龍といっても様々な形や大きさをしており、生態も多くは謎に包まれているが、「捨てるところなし」と言われるほど全ての部位が利用できる生物でもある。1話完結の短編形式で、毎回龍の肉を使った料理が作中に出てくる。この料理を食べているシーンが、本当においしそうで読んでいると腹が減ってきます。「風の谷のナウシカ」を彷彿とさせ描きこみをされた雲や龍や船は、ファンタジー世界なのに現実的な存在感を感じさせる迫力があります。この先どんな龍が現れるのか、どのような試練が捕龍船「クィン・ザザ号」の乗組員を見舞うのか、続きの気になる作品です。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 世界観があり、それをちゃんと表現できている一級のファンタジー。手触り感のある所が凄いなあ、と。これからもどんどん「違う世界」を見せて行ってほしいです。

文教堂書店浜松町店コミック担当 / 金田健太郎

マンガ大賞2017 ノミネート作品

月刊 モーニング・ツー / 講談社

「ゴールデンゴールド」堀尾省太

選考員コメント・1次選考

- デビュー作の「刻々」に続く 2 作目も期待を裏切らない物語になりそうな予感。何でもない日常がぐにゃりとゆがんでいく描写、どう転ぶかわからない展開の 1 巻。早く続きが読みたい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- こけしや日本人形って本来は可愛らしいはずなのに、見ようによっては不気味というか怖いというか…。あのなんとも言えない感情がそのまま漫画になったようなとても不思議なお話。フクノカミっていう明らかに異様な存在が登場しているのにもかかわらず、淡々とページをめくってしまう話の展開が余計に不気味さを煽ってきます。ほのぼのなのかシリアスなのか、はたまたホラーなのか。今後物語がどのように進んでいくのか全く予想が出来なくて、個人的には今一番続きが気になる作品です。

醤油製造業 / 小野塚博之

- 何だかよくわからないけど、とんでもない方向にストーリーが進んで行くことだけは鮮烈に感じます。とっても怖い。

PENICILLIN / HAKUEI

- 前作「刻々」もかなりの重厚な内容でしたが、今回も流石って内容です。話が進むにつれて段々と酷いことが起きそうな臭いがプンプンしますが、この得体の知れない怖さが作者の作品にはあるので、普段漫画読まない人におススメします。

バンドマン / TA-SHI

- 先が気になる作品です。いったいどんなことになっていくのか。まだ 1 巻だけなので、本当は 2,3 巻まで出てからとも思ったのですが、いま続きがとても気になる作品なので投票します！

会社員 / 林礼春

- コメディなのか、ホラーなのか、ジャンルに収まらない何ともいえない作品。表紙からは内容は全くうかがえないので、試し読みをぜひして欲しい。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

選考員コメント・2次選考

- 面白いですが、ただ面白いですどんなにたくさん言葉を並べても言い表せないほど面白いんですゴールデンゴールドは面白い

(株) キャナルエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- ゆるい日常にスーッと入ってくる正体不明の存在「フクノカミ」が何とも不気味。フクノカミの目的は何なのか、はたまた純朴そうな島の住人達はフクノカミに何を願うのか、今後の展開が気になって気になってしょうがない！

醤油製造業 / 小野塚博之

- ぶっ飛んだ設定なのに、リアルで怖い。

PENICILLIN / HAKUEI

- 「刻々」で漫画界を驚かせた堀尾先生の連載 2 作目ということで期待して読んだのですが、1 巻に続き 2 巻も隙のない完成度。じわじわと日常が狂っていく過程はぞくぞくする面白さです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 今勧めたい！という気持ちを優先してゴールデンゴールドを 1 位にしました。これからどうなっていくのか検討つかない、この気持ち悪い空気をリアルタイムで味わっていくには今から読んでほしいですね。

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 刻々の堀尾省太先生の最新作。マンガの紹介部分だけをざっくり聞くとピンとくるような来ないような、それなのに読み始めたら止まらないのは刻々と同じです。1 話目から突拍子もない。素敵です。どうやってこういう設定を思いついて、漫画にしまうのか。天才です。あと琉花がかわいい。

メガマソ / Migimimi sleep tight / 仙洞田涼平

- 始まりが不気味で、読み進めていくとそうでもない？と思ったけれど、やっぱり不気味。日常が見えない力でじわじわと侵食されていくのはとても怖いけれど、続きが気になって読んでしまう。物語は始まったばかり、まだまだたくさんの謎が隠されている感じなので、これからの展開がとても気になります。

図書館司書 / 堀江千秋

- 作者は「異形」を描くことに拘っていると思うのだが、前作は世界観が広すぎて、作品に入り込みずらかった。本作は話の軸を一点に絞って、読者をぐいぐい引っ張ってゆくことに成功している。これからの展開が楽しみだ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- この作品の面白さは、一言ではとても言い表せない。表紙にある言葉『金金金をみつつつけて表す神奇譚』、うーん果たして今後はどうなるの！！？？フクノカミという謎の存在が、平凡で平和だった島の人々の生活を、どのように変えていくのか……。とぼけた表情でいきなり現われた、謎の生き物が、『福をもたらす』からフクノカミ、と安易に名づけられるも、どんどんダークな面も見せてきて……。ストーリーとにかくオリジナリティがあって、引き込まれる。作者の刻々も大好きだったけど、それ以上に今回は個人的には面白い。人の悪意や欲望を知り尽くすフクノカミは、どうやら武士がいた時代にも存在していたようだ。守り神が人の欲望を吸収して巨大な力を持ち、傍若無人にふるまっているのか、それともフクノカミはフクノカミなりの意図があって、いろいろと動いているのか……。どうなんだろう。不気味さとかわいさの同居するフクノカミ、この生き物の魅力について触れておきたい。○みんなの感謝や祈りを吸収して、ニヤニヤする怪しいフクノカミ○ごはんをペロリと食べるフクノカミ○なぜかフクノカミに操られると、おばあさんであってもセクシーに○なぞのピエロの扮装をさせられても、ぬいぐるみのように静かにしているフクノカミ（かわいい）このフクノカミの謎を解く鍵になりそうな伏線がいくつかすでに提示されているのだが、2 巻が出た時点で、もう一度 1 巻を読み直してしまうほど、その設定、その詳細が気になってしまう。そしてリアリティ。金を得るごとに変わっていくおばあちゃん……。導入で破滅の雰囲気気を漂わせているだけでなく、2 巻で早くも大きなうねり。早く続きが読みたくてたまらない！！

会社員 / 西尾 美里

- 良い意味でイメージしていたものと違った作風でした。まだ、もやっとしている感じありますが、これが逆転して面白くなっていくような予感が非常にします。

鉄ばいぶレーベル・代表 / 杉本善徳

- 堀尾先生の描く、登場人物達がガラリと怖い感じに豹変する描写が好きです。内面の混沌としたモノが人間の表に出る際のあの竦むような表現に強く惹き付けられます。人には「嫌なのにもっと見たい」という恐いもの見たさな気持ちがありますが、堀尾先生の作品はそれがとてもリアルな気がします。とにかく強くオススメです！！

バンドマン / TA-SHI

- 神様なのか、崇りとなるのか、島の人には普通の人に見えて、島外の人には不思議な像に見える、だなんて集団催眠かという感じなのですが…。まるで乗り移ったかのようになるところなんて、ホントぞっとします。繁栄をもたらしたあと、ホラーな方に行くのか、怖い嫌いなのに続きが気になってたまりません。

舞台女優 / 大倉照結

- 自分のとこの会社の名前がちょいちょいでてきてびっくりするのですが、それはさておき。儲かりまくっているのに、読む側としては不安しか感じない、しかもその不安を主人公を含めた数人としか共有できない、得体の知れないおぞましさ。一巻から読み直してみると、「もう手遅れなんじゃないの、コレ……」と震えます。いまいちばん「怖いもの見たさ」で読んでしまうマンガです。

アニメイト町田 / 岡ノ部亭 真奈

- 現実にはあり得ないことでも描くことができちゃう、っていうマンガの特性を最大限に活かしたストーリーで、ゾクゾクしながら読みました。気持ち悪いし、不気味だし、なんかもう嫌な予感しかしないんですけど、それでも続きが気になって仕方ありません。

ライター・大学講師 / トミヤマユキコ

- まだ福の神なのか何か別のものなのかわからないが、続きが気になってしょうがない作品。とうとう何か得体のしれない者も出始めたのでさらに気になる作品。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- 「フクノカミ」という幸福ワードとはうらはらに、不穏さがいっぱいで心がザワザワする。なのに読むのをやめられない。たとえば自分が異世界にとばされるより、自分の日常の中に違和感が入り込んでくる方が怖いということを感じ知らされるマンガ。着地点がまったく予測不能。表紙の不気味さで敬遠されてしまうにはあまりに惜しいです。この不気味さを楽しんでください！

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- 過疎の島がどうやって？栄するのか。福の神は何なのか。だんだんきな臭さも漂い、先が気になって仕方のない作品です。

まんたんウェブ副編集長 / 河村成浩

- 不穏で淡々とした感触がよい。福の神、のように見えるものが、そのように動作してはいるけど、コミュニケーションできる対象ではないというところがいい。得体の知れない「良いもの」に乗っかるというのはどういうことか。今後の展開が気になる作品。

ブロガー / サイトウマサトク

- 田舎のじっとりした人間関係の変化をゆっくり丁寧に描写している。その変化の引き金は本当に超常的なことなのか、ただ幸運が続けばどこにでもあることなのではないか。

往来堂書店 / 三木雄太

- 気になる…福の神なの？ハッピーエンドなの？バッドエンドなの？なの？なの？と、疑問だけが残っていく。きっと選考委員さんがみんな読んだであろうアイアムアヒーローの第一巻を読んだ時のような。何とも言えない不安感とそれと同じくらいの知りたい好奇心が私の中でせめぎあってる。続きが気になるというか、続きがよめないそんな漫画

鳥取県 美術教員 / 佐川由加理

■ 異色な作品。まだまだ「先」があるように思えるのだが・・・今でも十分オシロイ！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

■ 大人の世界と子供の世界の狭間だからこそ見える“緩やかな怖さ”に日本ならではの風土風習に絡めた漫画です。終わり方よりもそこに至るプロセスをどう楽しむのかは見る手にゆだねられるところも多く、良い意味で非常に癖の強い作品です。

デザイナー / 佐藤ユウ

マンガ大賞2017 ノミネート作品

ハルタ / KADOKAWA エンターブレイン BC

「ダンジョン飯」九井諒子

選考員コメント・1次選考

- もはや安定の面白さ。ダンジョン内での食事情という突飛設定に霞み勝ちだけど、人間関係の細やかな描写から生まれる笑いが癖になる。

医師 / 岸本倫太郎

- ダンジョン飯、一巻発売時から、すごいインパクト！すごい面白い！と、思っていました。でもね、インパクトがあるとその分巻が進むにつれてだれてきたりすると思ってたんですよ。何が何が、ますます面白い！！キャラクターの魅力や作られた世界観に引き込まれて行きます。TRPG めちゃくちゃやりたくなるなー。読んでると。

鳥取県 美術教員 / 佐川由加理

- ダンジョン RPG の敵であるモンスターは、「食べることができる！」。ダンジョン内の生態系や、光の届かないはずの地下での植生、“人もどき”のモンスターは果たして食べていいのか（「気分の問題なのかなあ」と登場人物がもらすように、倫理的にどうかと）、等、昔ファミコンでゲーム（ドラクエとかウイザードリィとか）をしていた頃には思いもなかった疑問がいくつも突きつけられます。そんな大げさなことも考えずに読んで十分面白いです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- ゲームやらない私でも面白く読めた。モンスター調理が斬新！笑

主婦 / 柴 架衣

- 今年も推します！1巻・2巻・3巻と巻を重ねるごとに、単なる飯×ダンジョンではなく、じっくりと練りこまれたRPG的世界観が見えて来て、これぞ九井節！！とガッツポーズしたくなりました。

ホビー会社勤務 / 畑中 瀬路奈

- 最初は設定の斬新さに驚いたが、話が進むにつれ様々な謎が少しずつ姿を現わし、そのダンジョンの深さに驚嘆している。どこまで連れて行ってくれるのか、楽しみだ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 九井諒子さんのユーモアと、こだわりの再現性が大好きです。RPGをプレイする時いつも思っていた、「腹減らないの？」という疑問。このパーティはずっと一緒に本当にうまくいってるの？という疑問。人間の本质すら軽快に突いてくる作者の深い洞察力。誰しもが変態である。ということ。4巻は今年2月の発売。早く読みたい。何度も読みたい。読んでもない新巻を、すでに何度も読むことが決まってしまう作品。

音楽家 / 谷澤智文

選考員コメント・2次選考

- RPG のダンジョンの中では何を食べているのか、どうやって生活しているのか、ゲームをしている時には意識していなかったことが、ダンジョン飯を読んでからやたら気になるようになりました。最新刊（年明け後に発行されているので本当は審査対象外ですが）もシリアス路線も見せつつ、やはり食べる！ことに執着する姿は、表彰モノです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- やっぱり、何度読んでも面白いです。読み終えた後に、必ずもう一度最初から読み返してしまいます。最初はさらっと物語と料理を楽しみ、二回目にレシピを考察し、三回目に読むときにはキャラクターに対して並々ならぬ愛着が沸いていて、もう一度最初から読む。タイトル通りダンジョンで飯を作る話がメインではありますが、個性的なキャラクターと着々と進む物語からも目が離せません。

図書館司書 / 堀江千秋

- やはり『ダンジョン飯』が一番。行ってみたくなる世界観に、どんなモンスターでも料理するという発想。コマの端までキャラクターの表情がおもしろく、自然と笑いを誘います。九井 諒子先生の短編集から読んできましたが、ダンジョン飯は九井 諒子先生の集大成であると思う。まだまだ多くの方に『ダンジョン飯』は知ってもらいたい、読んでもらいたい。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

- 巻数が進んでも安定の面白さ！書店員の目線ですと、この作品を買いにいらっしゃるお客様も目に見えてワクワクしながらこの本をレジに持ってきてくださるのがわかります！まだまだたくさんの方に読んでいただきたいコミックNO. 1です！

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- 相変わらずなテンポが面白く、飽きが来ません。ゲームで RPG をプレイしているとき、主人公はこうして食事をとっていたのかな・・・とちょっと嫌な気分にもさせてくれます（褒め言葉です）

会社員 / 金子幸恵

- ダンジョン飯は1巻から、むしろ1話から面白かった。なので話題になったし、売れた。賞も取った。面白かったので反応も早かった。1巻からそれらの評価に値する作品で、みんなが話題にした。なんなら、みんながすでに読んだる前提になってしまったくらいすらある。それでもやっぱり、まだ読んでない人はたくさんいる。1巻から今も変わらずずっと面白いダンジョン飯。もう一度ダンジョン飯の話をしてもいい頃だ。

主婦 / 小田真弓

- 設定の奇抜さに隠れがち？かもしれないけど、必要最小限の人数のグループにおける人間関係の微妙さやそれを上手く回すための優しさとか、すごく丁寧に描かれている。飯だけじゃない！

医師 / 岸本倫太郎

- 話題性は随一でフォロワー作品などを多数生み出しつつも刊行タイミングの悪さから昨年の受賞を逃した感がありますが、当作品が与えた影響力や生物学などを含む学術的なネタ、それらをスッと理解させる漫画としての面白さ分かりやすさ、巻数は少ないのに倍近くのパリウムを感じさせる読み応え、大賞に相応しい作品であると思います。

住職兼ライター / 蟬丸 P

- ダンジョン自体にまつわる様々な謎や、登場人物たちの人間模様などが回を増すごとに複雑に絡まって、“ダンジョン&飯”というモチーフのユニークさだけではない、濃厚な作品に進化していると思います。『指輪物語』のようなどっしりとしたファンタジー世界にどっぷりと浸かれます。「ああ、最近よくあるグルメマンガね」と読まないのはもったいない！

ホビー会社勤務 / 畑中 瀬路奈

- ダンジョンに生息するモンスターを食材にご飯を作る。なるほど、ダンジョン攻略者はこうやって生き延びてきたのかと（笑） モンスターが調理され、料理として成立させるアイデアは目からウロコでした。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 「一年」という括りなく考えると、この作品で決まり！登場時の印象が強過ぎますが、未だに絶好調です！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- この漫画の特筆すべき点は、味が想像できそうなリアル感だ。モンスターを食べるだけなら、有名どころならゲームだがモンスターハンターとか他にも物語のメインとして扱っていないにせよ、異世界の食堂で空想の動植物を調理した料理が出てくる漫画は珍しくはない。しかしそれに対して読者は「うまい肉」「うまいスープ」ぐらいの情報しか得られない。ダンジョン飯は生態系や体の構造まで考えて描きこまれているので、テレビでキワモノ食を探して海外のジャングルに行ったら昆虫や爬虫類などを食べている番組を見ている時のような、食べたことがないのに味を想像してしまうという経験をする。マルシルのリアクションなど、まさにキワモノ食を食べさせられている芸人やタレントそのものである。また物語自体もダンジョン創成の謎の片鱗が出てきたり、奥深い展開となっていて飽きさせない。脳にも胃袋にも訴えてくる、非常に贅沢な作品です。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 今年こそ、大賞でしょう。マニアックなのにポップ。それに尽きます。ザ変態どポップ。

音楽家 / 谷澤智文

- 昨年もノミネートされたり既に十分注目されている作品ですが、今年こそは大賞をとってほしいので推したいと思います！九井さんの作品全てに言えるのですが、登場人物それぞれの個性を描くのがとても上手で、まるで友達にいたみたいな立体的なキャラクターがファンタジーという作品世界を越えて、生き生きと伝わってきます。登場人物が増えても、メインキャラの存在感はそのままに、サブキャラまで人間味あふれて、みんなこんなに魅力的なのってすごいです。読み手を煽ってくるようなストーリーではないのですが、テンポのいい展開はまったく飽きることはなく、もう内容知ってるよって方にも、表情豊かなキャラクターを反芻するように是非何度も読んでもらいたいです。

会社員 / 宇田川 結衣子

- 漫画を読んで久しぶりに声を出して笑ってしまいました。素直に、文句無しに面白いです。ギャグ漫画でここまで世界観が考え抜かれ、ストーリーがしっかりしている漫画は非常に珍しいと思いました。シリアスなストーリー漫画としても楽しめる……と思いきややっぱりメインはギャグか……と思いきや、あれ、シリアスなのか……？？という思考の行き来が不思議な感覚です。（やっぱりギャグでした）キャラクターが非常に魅力的です。ライオスをはじめとするメインキャラは言わずもがなですが、脇役達やモブキャラ、ダンジョンのモンスターに至るまで、細やかにキャラクターが作られていて、隅々までが本当に楽しい漫画です。九井先生の、漫画への愛と遊び心を非常に深く感じました。

明正堂書店アトレ上野店 / 荒木和美

- 今回唯一の食マンでした。近い食材見つけて試しに作ってみようかなとおもって、何品か作りました。きっとこんな味だろうと想像しながら。

スタジオフーズ プロデューサー / 小林智之

- 僕くらいの世代にはやっぱりこの世界はとてもマッチします。ドラクエFF世代に響く名作。メインストーリーも大きい展開がありそうで、常に次が楽しみです。

メガマソ / Migimimi sleep tight / 仙洞田涼平

- ファンタジー世界の食べ物はまだしも、モンスターまで食べようと思った先生にやられた感あります。本当にありそうでなかった作品。絵も世界観に合ってるし、なによりモンスターが美味しそうに調理されちゃってるのがなんだか不思議。現実世界のどの食材からヒント得ているのか考えながら読むと尚更楽しいです。男女問わず楽しめる漫画。

ブックエキスパレス / 中村 哲彰

- 一次選考でも書いたけども、第一話を読んだときにものすごいインパクトを受けました。でもインパクトは薄れていくもの・・・でも、この漫画はインパクトの後にそれ以上の面白さが襲ってきました！ねるねるねるねの色が変わった後に、さらにものすごい旨みがきたらきっとこんな感じだと思います 作者さんの作った世界観がしっかりと骨組みで作られているからこそなんだと思います。私たちの住んでる世界とは別の世界の話だけどなんか悩みとか共感できるんだよな～。料理もたべたくなってきて、なんなら移り住んでみたくなる。巻を重ねてますます面白くなってきてわくわくが止まりません。

鳥取県 美術教員 / 佐川由加理

- 二次審査のために作品を読んでいたら、4巻がちょうど出ましたね。わ???? おもしろい。とうとう地底のドラゴンが！ 1巻からテンションがまったく落ちることのないコマ運び、いやまずばかりのキャラクターたちの魅力。フードマンガの傑作です。結局、私は物理的に食べられないものこそを食べたいんですよね、一生。だけどそれは絵に描いた餅というか、モンスターの肉。物理的には絶対食べられないものが食べたい。食べられないけど、じつは、視覚を通して脳ですでにたっぷり味あわせていただいているのだと思います。このもどかしさを飼いならすところこそが快感なのかもしれません。私のその欲望にとっても叶った作品です。ハッシュタグはもちろん、#私を二次元に連れてって

お菓子研究家 / 福田里香

- もう出尽くしたと思いきや、メシ漫画の新しい可能性。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

- 面白さは既にお墨付き。最新刊も発売したばかりのこの作品ですが、全体的にぶれず、ダンジョンにて飯を食らい、ドラゴンに喰われた妹を助けるため奥に進む一行。王道ファンタジーに加えて、今やブームにもなっている、食（グルメ）を取り入れた面白さは素晴らしいと思います。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 面白い。ただただ面白い。軽く読めるけどクオリティがめっちゃめっちゃ高く、そのアンバランス感が良い。

PENICILLIN / HAKUEI

- やっつけるだけでなく食べちゃうってところが新ジャンル！でもそれだけではおわってないところがすごいところ。4巻になっても衰えない面白さです。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- ものすごーく迷ったけれど、それでも読み返すと、やっぱり面白いんだよなあ……！もう世間で広くこの面白さは認められていると思うので、いま改めて薦める必要があるのかという困ってしまうけれど、でも「人に薦めたい」作品であることにはかわりはないので入れちゃいます。のんびり、ゆっくり、先を待ちたい。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中香織

- 「〇〇を最初に食べたのは勇者」という形容はあまたあるが、未知の食材を食べるのは勇気のいることだ。それを調理過程から「美味しそう」に描くのもまた至難の業。そうした誰も思いつかなかった裏技を見事に物語のテーマに織り込んでしまうのも、やはり稀有な才能だと思う。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 親子で楽しく読める作品。登場人物たちの個性も面白く、楽しみにしている。

自営業 / 小野ゆうこ

- ダンジョン内で魔物を調理して食べるファンタジーとグルメを融合！ダンジョン飯のゲームあったらあったらやりたい！

Hair Make Lounge tetote 代表 / カ丸 真

マンガ大賞2017 ノミネート作品

KISS/ 講談社

「東京タラレバ娘」東村アキコ

選考員コメント・1次選考

- ノリの勢い、ツッコミの切れ味、胸をつく孤独、にじむ悲哀、どれも素晴らしい。時代の絶望、社会の欲望をえぐり出し、酒と笑いにまぶして突きつける。あとがきがこれほど楽しいマンガもない。

朝日新聞記者 / 小原篤

- ドラマ化され、ますます勢いありますねー！こういう作品、まさに東村先生の真骨頂。

アナウンサー / 松尾 翠

- 新刊を1番何を楽しみに待っているか？と言ったらこれだろうやはり。3人それぞれの直視できないほどのダメ恋ぶりだが、共感しかない。恋と仕事両方手に入れる事はできないのだろうか…物語も楽しみにして読んでいるけれど、巻末のたられ bar もかなり好き！

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- ああだったら…」「こうなれば…」不毛すぎる現実、独身アラサー女の「あるある」で共感、3人に幸あれと願います、巻末のタラレバ Bar 相談が良いです

Hair Make Lounge tetote 代表 / カ丸真

- 男性諸君、これはあなた方も読むべきです。アラサー女子の実態を知ってください。

漫画全巻ドットコム代表 / 安藤拓郎

- もう結婚しているのに！もう男いないとかはないのに！昔を思い出してザワザワします。渦中の子達を想うと胸が痛む…

主婦 / 柴 架衣

選考員コメント・2次選考

- パンチライン多過ぎ！アラサー女子の生傷に塩塗り込んでレモン汁ぶっかけるがごとし至言の数々。でもこのマンガのことを語っているアラサー女子はなんか元気なのがとても良いと思う。

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部店舗開発課マネージャー / 大山敏樹

- ヌルい結末はあり得ない、でもあの3人が不幸で終わるのは見たくない。全国のタラレバ娘と共に心がぐらつきながら見守っています。

朝日新聞記者 / 小原篤

- ドラマが始まって人気を博しているの、これを挙げるとミーハーっぽいですが、面白いものは面白い！特に、若い世代と話す時、人生の指針っぽい話ができるので、部下・後輩の扱いに困っている方にはおすすめかも。しかし、東村先生の多作ぶりには脱帽です。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

- 常に進化し続けるギャグセンス。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

- ドラマ化もされ、アラサーで知らない人はいないくらいになってるかもしれないがやはり勢いのある少女？漫画はこれだろう。えぐられるような共感と笑いを呼ぶ。最新刊では少しシリアスになってきてはいるけれど…とりあえず、これを読んで結婚を決めた友達がいる。実話です。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 漫画好き界限だけでなく、全国的にメジャーになってしまった！ドラマはすげえな！でも漫画面白いから。最新巻、かなりびっくりだから。読もう。「どうせなんだかんと言ってもこっちとくつつくんでしょ？」という予想ができない、そんな予想をジョッキビール片手に蹴っ飛ばしてくれそうな、かつて少女だったものと、いずれ少女でなくなるもののための漫画。(もちろん男性にも！)

主婦 / 小田真弓

- 昨年読んだ時の衝撃が忘れられません。アラサー以上の独身女性はすべからく読むべし！

公務員 / 東くるみ

- 正直、タラレバ言ってるキャラはめんどくさいヤツばっかだなー、と思うっておいしいことこの上ないんですが続きがでると買って読んでしまう…。きっと僕自身、東村先生の術中にはまっているのかもしれない。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川元良

- こちらはシリアスなテーマも内包しているのだけど、「マンガとして楽しませる」プロフェッショナルリズムに圧倒される。さすがです。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- メディア展開されまくっていることから天邪鬼な自分としては、逆にノーマークになってしまっていました、やっぱり面白いというか痛いというか、ホラーですね (笑)

鉄ばいぶレーベル・代表 / 杉本善徳

マンガ大賞2017 ノミネート作品

アフタヌーン / 講談社

「波よ聞いてくれ」 沙村広明

選考員コメント・1次選考

- セリフ回しのテンポが素晴らしく、読んでいてとにかく笑える。主人公の鼓田ミナレのキャラの立ちっぷりが素晴らしい！キレッキレです。

会社員 / 林礼春

- ひょんなことからラジオパーソナリティーになった女性が主人公のマンガです。このマンガの一番の魅力は主人公のトークです。軽妙でテンポがよく、笑わせてくれるし、上品すぎず、下品すぎず、セリフのやり取りだけでもとても面白いのに、超絶美麗な絵と、たまに入る格闘マンガとも思えるような素晴らしいアクション。さらに人物紹介とか細かいところに小ネタを挟んできたり。まさにマンガの醍醐味盛りだくさんって感じのマンガです。この主人公が現実にラジオやってたら絶対面白いだろうなあ。是非聞いてみたい。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

- ニッチなストーリーなのに、謎のスケール感。謎の臨場感。さすが、沙村先生。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- 最初読んだときは、ラジオのマンガ？って正直思いました。とりあえず、沙村さんだし読んでみようかなあ？程度で。すいません。面白いマンガここにありました。テンポよく進んでいく話と、所々というか全体的に入ってるギャグ。こんなに絵が上手くて、話の幅が、「無限の住人」からラジオまでって。沙村さんとりあえず読んで入れば間違いないが実証された瞬間でした。

ブックエクスプレス / 中村 哲彰

- 2年連続で推します。たいへんクレイジーな作品で、この面白さ、クレイジーさが、何かの間違いで世の中に流行れ！事故のように多くの人をひきはねろ！とは思いつけているので、何かの間違いで流行ればいい。たぶん、このマンガは世の中がどうしてもいい方向に豊穡であることの証なんですよ。よく知らないですけど。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 1巻第1話が凄すぎたので大丈夫かな、と思っていたのですが無用な心配でした。留まることのない勢いとパワーにはただただ舌を巻くばかり。周囲のキャラも立ってきてより一層続きが気になる作品です。

事務員 / 工藤圭

- 今年いちばん繰り返し読んだマンガかも。立て板に水のトークが“聞こえてくる”マンガ。マンガという音の出ないメディアで、これだけ声が聞こえてくるってすごい。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

選考員コメント・2次選考

- 圧倒的情報量を圧倒的画力で圧倒的にくだらない最高の漫画。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

- 主人公の鼓田ミナレの喋りと、テンポの良さ、そしてテンションの高さがしっかりかみ合って、読者側もどんどんハイスピードで読まされます。あっという間に作中に引き込まれる感覚がスゴイ！

会社員 / 林礼春

- 今回の候補作すべて読んでみて、やっぱり自分は「楽しいマンガ」が読みたいと思った。スリリングとかダークとかシリアスよりも、楽しいマンガ。それでいうと、迷うことなく本作が1位。ミナレ最高。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 掛け合いの妙とか、愛すべきダメ人間たちの模様とか、ライトサイド(？)沙村マンガの魅力をカレー皿に山盛りに盛り付けたみたいない印象を持ちました。予想外のことが起きまくる展開に、いやコレドーすんの、ドーなんの、と不安になるけれども、キレッキレのセリフの応酬に翻弄されて、気づけばどんどん読み進めているという、不思議な読書体験。材料は不明、されど味付け濃い目でクセになるマンガです。

アニメイト町田 / 岡ノ部亭 真泰

- すごい。世界のことごとくが、悪意とまでは言わないまでも、居心地の悪い感じにはしてやろうぐらいは絶対に思っている感、世界は底意地の悪さに支えられている感がすごい。世界のことごとくは信じるに値しないけど、世界が自分に向けてくる底意地の悪さは掛け値なしに信じられる、という「逆張りの信頼」をもって、僕たちは強く生きていこう的な。そういうマンガ。たぶん。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- 飲み屋で愚痴をこぼした相手がラジオ局員で、あれよあれよという間にラジオの世界へ…。この物語のポイントはなんといっても予想外の脱線。脱線に脱線を重ねて、もういっそ線路なんかいらねえよ！って感じでオフロード走行をしているディーゼル機関車を見ているような気分になります。電柱をなぎ倒し、線路のない荒野を走り続けるディーゼル機関車が浮かびます。それと、これでもかってくらい詰め込まれている小ネタの数々。わたしにはおそらく把握できていないのもあるはずだから相当な数にのぼるんだろうけど、それがまた絶妙なんです。そこもポイントです。

鳥取県立日野高校司書 / 野間勤

- 独自のセンスに貫かれた濃厚な業界コメディ。ギャグとキャラクターは目を惹くが、伏線やプロットの巧さにも留意したい。

レビュアー / 福井健太

- ぶわ〜〜んとジェットコースターのようなノリがたまらないオトナ漫画！キレッキレのミナレさん最高です。テンポのいい会話も最高。面白いからこれぜひ読んでくれっておすすめしたい漫画。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 正直第一話がピークになってしまうんじゃないかと思っていました。杞憂でした。二巻第九話の展開に震え、その後も衰えない勢いにわくわくさせられています。まだまだ先が楽しみだし、もっともっと多くの人に読んでもらいたい作品です。

事務員 / 工藤圭

- とにかくミナレさんはみっともなくてジタバタしててアドリブ効いてて最高だ。今一番清水富美加にすすめてあげたいマンガだ。なんとなく。

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部店舗開発課マネージャー / 大山敏樹

- 全員素人でドラマ化してくれ！

作家 / 海猫沢めろん

- 巻を追うにつれ、ユーモアの威力が増している。次巻は一体どうなってしまうのか。楽しみすぎる。

音楽家 / 谷澤智文

- この漫画は大人向けだと思うのですが、マンガ大賞を参考にする方たちは結構年齢層高いと思っているので投票しづらいです。沙村さんのいつもの軽妙なトークと元ネタが分かるか分かんないかギリギリなギャグが心地いい笑いを誘ってくれます。沙村広明作品の幕の内弁当感ありますよねー。っていうか、大賞とお見かけしたい！！ぶっちゃけその一心

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 今となってはテレビのワイドショーでも普通に持ち上げられるようになった長編アニメーション映画『この世界の片隅に』だけれど、最初のころは劇場に長蛇の列が出来て連日満席とか、クラウドファンディングで3000人が4000万円近くを出資したことでようやく製作が始まったといったトピックをてこに取り上げようとする民放のテレビ局もなく、そしてもちろん主演の声優が誰かを挙げて取り上げる民放のテレビ局は現時点でもなかなかキー局では見受けられない状況にあって、ラジオは最初のうちから積極的に作品を取り上げ、片渕須直監督にも出演してもらってその中で主演の声優が誰でどういった演技を見せて、それがどれだけ素晴らしかったかをしっかりと伝えていた。芸能界とのしがらみがない訳ではないけれど、それでもどこか独立独歩を貫けるのはそうしたゲリラ的マインドが未だに残っているからってことと、そして芸能界がしがらみを押しつけたがるような利権がもはやラジオという媒体には残っていないからってこと、なのかもしれない。番組的には自由で冒険も出来て素晴らしい。けれども経営的には広告収入が減って大物感をもった番組が作れず厳しい。そんな両極に足を乗せているからこそ、ラジオは映画『この世界の片隅に』をどこに憚ることもなく持ち上げられたし、まるで知らないカレー屋の女性店員を起用して深夜早朝にフリーで話させる番組も作れるのかもしれない。そんな番組がどこにある？ というのはだから沙村広明の『波よ聞いてくれ』（講談社）という漫画の中の話。鼓田ミナレという25歳の女性の弁舌に目を付けたか耳を懸けたFMラジオのディレクターがいて、DJとして引っ張り破天荒にも真夜中の番組をまるまる任せることにする。スポンサーなしの番組は何をやるうとも自由だけれど、ただのカレー屋の店員に過ぎなかったミナレは何をしたら良いのか分からない。とはいえカレー屋の方も首になりかかっているラジオDJでも何でもいから稼がなくちゃいけないと、覚悟を決めて始めた番組で男に騙された話をネタに架空の実況を行って世間を驚かせ、そして今度は生でラジオのドラマを流してやっぱり世間を仰天させる。マイナーな地方のFMラジオ局がスポンサーもつかない真夜中に流した番組だから大騒ぎになるといったことはないけれど、聞いた人には何かが残る番組になっていた様子。それがミナレの出たとこ勝負で立て板に水と喋って繋げる才能ゆえか、それとも彼女を見だし課題を与えて追い詰め才能を引っ張り出したラジオディレクターの企みゆえか、まだ分からないけれどもここには何かある、そして絶対に何かやってくれると思わされる。今はもちろん漫画の中のフィクションに過ぎないけれど、これを読んだ意欲のあるパーソナリティなり、状況を浮いているラジオ局なりが真似て破天荒な番組作りに乗り出せば、どこか行き詰まってしまった状況も打破されてラジオの“復権”もあるのかもしれない。ないかもしれない。どっちなんだ。生のドラマで使われる効果音がある中でさまざまな道具を使って出される描写は、話には聞いていても改めて見せられるとなかなか面白い。ベニヤ板をバリバリと引き裂いて雷の音を出すとか、本当にやられていたことなのか。そして本当にそうした音が出るのか。『波よ聞いてくれ』が実写ドラマ化された暁には、是非に再現してもらいたいもの。というよりこの面白さは、いずれ絶対に映像化されてしかるべき。同じ作者の『無限の住人』も良いけれど、コミカルな味の中に人間の深いドラマも滲んだこの漫画を、大勢に読んでもらってそして映像化へと向かって欲しいと願うこうして推薦する。主演は誰が良いかなあ。破天荒で才能もあってだらしないところもある鼓田ミナレを演じられる女優なんているのかなあ。

書評家 / タニグチリウイチ

- 小ネタとテンポが素晴らしい、1巻からの伏線を丁寧に回収しつつまた新たな伏線を仕掛けてくる緻密な構成、今後も面白い展開になっていくのか…とても楽しみです。

Hair Make Lounge tetote 代表 / カ丸 真

- 作者あとがき曰く「無軌道オカルトカレーラジオ漫画」。確かにその通り、闇鍋のようなカオスな漫画です。とにかくハイテンションの勢いのままに、深いんだか行き当たりばったりなんだか分からない物語展開。なのに、非常に面白い。高い画力と非凡なネームセンスによる天才の技としか言いようがない作品です。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 実に面白い！！どう転がるのか、先が気になって仕方ない漫画。キャラがとにかく全員ユニークだし、何より会話のテンポの良さが好きです。

主婦 / 安田ママ

- 特別な設定がなくても、突飛なアクションがなくてもマンガってこんなに面白いんだと目から鱗。相変わらずカッコイイ、カッコ良すぎる絵で笑わせにくるんだもんなぁ…セリフ回しホント好きです。油断してると口まねしてしまうくらいに。

文教堂書店浜松町店コミック担当 / 金田健太郎

- 作者の本領は『ヘアゲルター』の方じゃないの？と一瞬思ったが、考えてみれば、これほど対極的な話を同じ絵で描けるのはスゴイこと。北海道のローカル局、主人公が新人女子でヘンな性格という点では『チャンネルはそのまま！』を連想するが、テレビより絵的に見せ場の少ないラジオ業界を舞台にして、これほど面白くするのだから感心するしかない。沙村作品の魅力が過激アクションだけでなく「セリフ」であり「間」であることを再認識した。この1票を天国の永六輔に捧げたい。

読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員 / 石田 汗太

- 何の漫画なの、って聞かれたら笑顔で「わかりません！」というしかない。説明してもいいんだけど、多分読んだ方が早いよ。めっちゃくちゃ面白いよ。

主婦 / 小田真弓

- 「ブラッドハーレーの馬車」のような作品も描く作者のバイタリティに驚きです。また、色んなネタがちりばめられているので一コマ一コマ注意深く読んでいます。主人公のミナレ姉さんの喋りには中毒性があり、ずっと聞いていたいですし、こんなに不幸な目にあってほしいと思える女性主人公もあまりいない気がします。

バンドマン / TA-SHI

- 沙村さんの女性を描くうまさ凝縮している作品。こういう「よくしゃべる系」の作品は、言葉の使い方のセンスとか時代性がちょっとでもずれているとものすごく気になってしまって、すぐにアウトになると思うのだが、ミナレのセリフにはまったくずれがない…どころか痛快。「男性マンガ家で女性キャラを描くのがうまい人選手権」をやったら、沙村さんは優勝候補だと思う。

漫画ライター / 門倉紫麻

- 「昭和のラジオ」が持っていた親しさといかがわしさと、哀愁みたいなものを全部まとめてギュッと凝縮させたような作品です。登場人物が一筋縄ではいかなさそうな人ばかりなところにも惹かれます。いちばん気になるのは、どう見ても剣客か遊女の「城華マキエ」。脇役とは思えない影の濃さで、主人公に絡んでいくのか案外、そうでもないのか、まったく予想がつかないところも大好きです。

馬場企画 / 島影真奈美

- 相変わらず会話劇が上手い。ニヤリと笑わせてくれます。

COMIC ZIN 商業誌部門責任者 / 塚本浩司

「ハイスコアガール」押切蓮介

選考員コメント・1次選考

- 待っていた・再開を待っていたぞ・！とついに新刊のニュースを拳を突き上げて喜んだ本作。あんなにもゲーム愛にあふれた作者が、いろいろ権利の問題とかいろいろ・の問題を乗り越えて、いつか、問題が解決したときにそれでもゲーム愛をつらぬいた作品を書き続けてくれるのかとても心配していた。が、心配ご無用の面白さにあふれた新刊であった。世間は真田丸ロスやら逃げ恥ロスやら大騒ぎだが、私は去年の5月まで、長い間ハイスコアガールロスであった。日高派なのか、大野派なのか。ハルオ派なのか。むしろハルオの母派なのか。ゲーセンの魅力を伝える本作は、ゲームっ子ムネアツの要素がもりだくさんだけでなく、ちょっと世代がはずれてもゲームファンなら絶対楽しめるこの熱量。スマホゲーやPSPを一度やめて、ゲーセンに行ってみたくなる。そして、ハルオをめぐる大野と日高の恋模様。逃げ恥もムズキュンだったけど、ハルオと大野もかなりのじれったさとキュンに溢れている。応援の強い気持ちをこめて、再度推したい。

会社員 / 西尾 美里

- 時代を彩った往年の名作格闘ゲームにのめりこむ主人公を軸とした青春マンガです。ゲームへの愛が強く表れていて、そのゲームを知っている人が読んだらニヤリとしてしまうような小ネタがたくさんちりばめられています。このマンガの魅力の一つは格闘ゲームであるのは確かなのですが、格闘ゲームと同じかそれ以上に、恋愛要素が素晴らしいのです。なかなか想いを伝えられなかったり、すれ違ったりといった純愛マンガ要素が、格闘ゲームの熱い戦いの中にちりばめられて展開するので、やきもきしながらも、熱く激しい印象がとても新鮮。戦いの純愛マンガとでもいいでしょうか。今までにない感覚のマンガです。かつて格闘ゲームにのめりこんだ大人はもちろん、格闘ゲームを体験したことがない若い世代でも十分に楽しめるマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

- 1990年代のゲームセンターという、一般的にはマニアックでモノセクシャルな印象の世界を舞台としつつ、圧倒的にせつなく、笑ってもらい泣きできる10代男女のラブコメディ、ラブストーリー。気の毒ないきさつで2014年に連載中断となったが、15年に再開。小学生の出会いから中学、高校と過ごしてきた少年少女は、直接交わす言葉は少なくとも、ゲームの世界に仮託して深くコミュニケーションを重ね、相手を大切に大事に思う気持ちを育ててきた。そんな、同じ1年でも大人のそれとは比べ物にならない長い長い時間の流れを丹念に追う本作品の「やさしさ」は、連載再開後も全く変わらない。晶へのハルオの敬意とやさしさ、ハルオへの日高の一途、そしてハルオへの晶のシンパシーとかけがえなさ。16年夏には久々の単行本6巻が発売され、これを書いている翌週には7巻が発売予定。中断・再開の経緯では様々な大人の事情も展開されたのだろうけれど、もう続きは読めないものと思っていたので、まずはめでたや。

会社員 / 天野賢一

- ようやく発売された6巻。期待を裏切ることなく、グッときました。独特の甘酸っぱさが、心に響きます。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- いやもう、戻ってきてくれてありがとう！の気持ちだけです。また続きが読めるようになって本当に嬉しい。カバーの裏が旧デザインだったのもすごく嬉しい。大野は変わらず可愛いし、著者が描き続けることを選んでくれたことに感謝したい。もう、とにかくオススメ！

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

- 復活してよかった。この先も楽しみでしかない。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

選考員コメント・2次選考

- このマンガに入れ込む理由を3つ考えてみた。1つはキャラクターの魅力だ。少年マンガの主人公としてハルオは何しろ「カッコいい」。真っ直ぐ真摯に自分の信じる道に対峙し、そこで頭角を現す実力もセンスもある。自らこれと決めた好きな世界に生きる者の必然として、周囲には分け隔てなく寛容で懐深い。それでいて（当たり前だが）男の子っぽいひたむきさがある。その情熱の向かう先はゲームというマニアックな世界ではあるのだけれど、これは女子がほっとかないでしょう。そう思わせる求心力がある。むしろ暗くてオタクなゲーム少年という先入観があるからこそいっそう、そのギャップに引き込まれるのだ。2つめは絵の力。一見すると好き嫌いが分かれそうな個性的な画風なんだけど、その実、好感度の高いかわいく素直な絵柄なのだ。それはとりわけ女子の描きぶりに顕著で、上気した頬、潤んだ瞳、もの言いたげな唇と、情報量の多い作画の術に期せずして読み手は心をつかまれる。さらに3つめには（意外にも）少年マンガの王道を行く伏線豊かなストーリーを挙げたい。自転車の後ろに大野を乗せて理想のゲーセンを探す小さな冒険の旅に出る小学生の夏休み。途中駅で日高と2人置き去りにされる中学の修学旅行。大野と一緒に居たい一心で一念発起、ゲームを封印して臨む高校受験。日高と夜明かした朝に大野と鉢合わせする渋谷の街頭……。書いてみれば3点とも人気作品に当たり前の条件のようだが、それがスポーツでも音楽でもなく、むしろゲームだからこそ際立つ妙味。それがこのマンガの力なのだろう。付け加えると、ハイスコアガールには現実社会との絶妙なシンクロ具合が醸すリアリティーを感じる。1990年代の（今に比べるとまだ）のんびりのびのびしていた時代の、活気も話題性も社会的関心も今とは比べ物にならないほどに高いゲームの世界が舞台となることで、当時それに何がしかの接点があった人はもちろん、ゲーム業界に特段のかかわりがなかった人でさえ「ああ格ゲーね」とか頷くことができる。いかにもありそうなボーイ・ミーツ・ガールの物語として、その舞台設定を受け止めることができるのだ。実際は憧れのエピソードで綴るファンタジーだとしても。ありそうでなかった「濃い」読み応えのラブコメで、じっくり楽しめます。

会社員 / 天野賢一

- 1次選考とほぼ同じタイミングで、最新刊が発売。まったく魅力は変わらない。面白かった。ワクワク感とはまらなかった。いろいろあって長いことハイスコアガールロスだったけど、ついに復活。私の中ではすでに殿堂入りのこの作品を、今こそ再度推したい。ハイスコアガールの魅力★ゲームが好きじゃなくても、ゲーム好きの男の姿を見て、きっと共感すること間違いなし！主人公ハルオの魅力。それはつきぬけたゲーム愛。母性本能をくすぐられる、不器用さ。そしてツッコミ力。読めばハルオと友達になりたいくなり、ハルオのディープなゲームの世界を教えてほしいくなる。★ムズキュン？ワラキュン！逃げ恥のブームでムズキュンという言葉がはやっていたが、ハイスコアガールのキュン力も負けてはいない。ハルオの不器用な気持ちもキュンだし、ヒロイン大野さんのハルオへの一途さもキュンだし、日高のかわいくて意地っ張りだけど意外に大胆なところも大いにキュンである。これはやばい。キュンのてんこもり。そしてちょっと笑える。ワラワラキュンキュンである。★癒し力昨今流行のただの血みどろ理不尽殺人エンタテインメントや、ドロドロ展開てんこもりとは違う、この癒し力！疲れた大人を童心に戻し、疲れていない若者は、純粋な恋心を思い出し、スマホゲームに興味がない、据え置きゲーム愛の強い大人には、共感をもたらす。このマンガを本棚において、疲れるたびに手に取っている。一度、長い期間おやすみをしていて、心配していたけど、新刊もやっぱり面白かった、ハイスコアガールが私の1位です。

会社員 / 西尾 美里

- 年齢だろね。あの頃燃えたものを思い出してしまいますよ。そして、買っちゃったよファミコン。いけないよ。余計な出費および無駄な時間をつかってるよ。それが幸せだよ。

スタジオフーズ プロデューサー / 小林智之

- 一巻の終わりのシーンで、心は決まった！押切作品のセリフ回しも画風も読むほどに魅力的。ハルオがめっちゃくちゃカッコよく感じてしまう。

鍼灸師、理学療法士 / 碓氷麻里子

- 大きなトラブルによる長期休載があったにもかかわらず、バリバリ読めてしまう作品のパワーは見事。面白い一言。

まんたんウェブ副編集長 / 河村成浩

- また再び読めることになった幸福、感謝、安堵、その他もろもろ、全て引くくるめて一票！

医師 / 岸本倫太郎

- ゲームセンターで小銭を筐体に積んでいた思い出のある方、恋愛に無頓着な学生時代を過ごしていた方には是非読んでいただきたい作品。恋愛よりもゲームのことしか頭にない男子が、いつしか恋に気づいていく過程の描き方は秀逸。恋を後押しするゲーム上のキャラクター達がめっちゃめっちゃ懐かしい。90年代にタイムスリップした感覚を得られる漫画、ゲーマーにとってはノスタルジー溢れる作品である。作者にいろいろな事情があって作品発表が中断していたが、トラブルを乗り越えて中断後に発行された新巻には、待ちに待ったハルオと小春の三連戦が描かれる！小春の想いを乗せた右京、ルガール、フォボス！気持を込めた小春の攻撃に対して、純粋にゲームを楽しむハルオ。対戦結果は……、過去最高の盛り上がりを見せる展開は見逃せない！

弁護士 / 長島・大野・常松法律事務所 / 三村量一

- ノスタルジックな小学生ライフを描くギャグかと思いきや、真正面からラブコメに突っ込む怒涛の展開に呆然！いつもの押切先生らしいオフビートな笑いが、いつのまにか読者を悶え死にさせるラブストーリーになっちゃうなんて！エッセイマンガ『ピコピコ少年』（これまた大傑作！）で描かれるように、ゲーム少年のぐだぐだなリアルを知り尽くした作者が、照れることなくそれを極上のエンタメに仕上げる手腕と気概に心底しびれます。ハイスコアガール・大野さんもすごく魅力的なキャラクターですが、私としては主人公ハルオに健気な恋心を寄せる日高さんの勝ち目なき戦いを応援せずにいられません。親友の宮尾くん、ハルオ母ちゃん、大野姉など、脇役がまたいい味を出しまくっていて、おかげでこの切ない話を余裕をもって楽しめるのが救い。それにしてもゲームのことばかり考えてたあの頃は、確かに世界の端々からゲームキャラが勇気をくれたもの。ゲーム少年の脳内世界を誠実に描写するリリカルでリアリスティックなこの演出が本当に大好きです。なんてマンガらしい表現！

会社員 / 末永龍介

- とにかく連載が再開できてよかったなーという思いです。

COMIC ZIN 商業誌部門責任者 / 塚本浩司

- 危険だよなあ…。素直に 1990 年代格ゲー回顧マンガにしときゃいいのに、ラブコメを絡めることで同時代、同年代のボンクラに「ゲームと彼女、ふたつが共にあった青春時代」を幻視させうるのが超危険。悪質なファンタジーだと思う。不幸としか言いようのない著作権侵害・刑事告訴から絶版、糞袋中年への流れも今となっては笑い話なのでこれを機になんか賞でも取ったり、流行ったりしたら良いんじゃないでしょうか。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- これはもう好きなので…なんといっても、各キャラクターの愛嬌がたまりません。一時期の困難を乗り越え続きを描いてくれたことに拍手、そして展開としてもアツイ。ヒリヒリする、あの表情。男性にも女性にも勧めたい！

WEB デザイナー / 河本智芳

- ギャグ中心でテンポの良い展開に次々ページを進めていると不意にキュンとさせられる恋愛要素が散りばめられているのがとてもニクい。そしてレトロゲームの中の印象的なセリフと主人公の心情をリンクさせて読み手に焦燥感煽ってくるのはほんとズルい。

醤油製造業 / 小野塚博之

- ゲームにしか興味がないハルオが、ゲーセンで孤高の美少女大野さんに会って…、といった感じで始まるゲーセン・ボーイ・ミーツ・ガール。いや、ボーイ・ミーツ・ガール in ゲーセンかな…。「今は違うかもしれないけど、'90年代にはゲーマーのまわりに女の子なんかいないよ。ガール抜きのハイスコアガール状態だったよ！ハイスコアだよ、いや、ハイスコアも出したことねえよ！」という声にするのははばかりられるようなルサンチマンが湧き出てきます。そんなことを思いながらも最新刊が出るたびに読んでいましたが、今回まとめて読み返してみると印象が薄かった部分が蘇って繋がって、小春の恋心がなんだか甘酸っぱく心に迫ってきました。まとめ読みの衝撃はこちらの予想以上でした。

鳥取県立日野高校司書 / 野間勤

- 連載再開しても話の面白さは衰えず。こちらも僕ら 30 代前後にドンピシャのマンガです。青春を、懐かしいゲームを通じて追体験。不思議な魅力を持った作品です。

メガマソ / Migimimi sleep tight / 仙洞田涼平

- 打ち切りになるのか・・・と諦めていた作品の続き。ゲーマーの日常や感情をゲーマーにしかわからないのではと思う表現（またはゲーマーならついついニヤリとしてしまう表現）で楽しめる作品です。でも、今巻は作品としての一歩も踏み出した、という印象。兎にも角にも30代後半以上の（元含む）ゲーマーなら読むべきです。

会社員 / 金子幸恵

- 今年、この作品が二次選考に進むと聞いて、脳裏に浮かんだのは「困ったなあ」だった。「あの騒動」に干渉されての票は投じたくないが、ノミネートされたら、騒動の影響から逃れて票を投じられる自信もなかった。だが最新刊を読んで、「ああ、どちらでもいいや」と思えた。だってあらためてしみじみいい作品なのだ。偶然なのか必然なのか、今回の選考対象の最新刊である6巻のモチーフはさしづめ「再会物語」。作者がどこまで「自分が読者に作品を届けられない」という状況と作品を重ね合わせたのかはわからないが、少なくとも読み手にとっては一定の符号を見出したくなる場面はそこかしこにあった。それが意図的であるにしろ偶然にしろ、どうでもいい。一連の流れを知っていたら、2016年の最新刊に泣かない人はいないと思う。帰ってきてくださって、本当にありがとうございます！

(有) 馬場企画 ライター／編集者 / 松浦達也

- コミュニケーションが苦手で、すれ違いばかりのマンガは数あれど、これほどコミュニケーションが下手で不器用な二人のマンガはあまり見ないような気がします。そして、その不器用すぎる様が、じれったいとか、やきもきするを通り越して、純粋に応援したくなるのです。なんせ二人のコミュニケーションはほぼ格闘ゲームのみ。闘ううちに心を通わせ、戦いで思いのたけをぶつける。戦う青春純愛ストーリーといった感じのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

マンガ大賞2017 ノミネート作品

少年ジャンプ+ / 集英社

「ファイアパンチ」藤本タツキ

選考員コメント・1次選考

- ファイアパンチ読んでない！？マジすかー！！燃えます。とにかく燃える。しかも全裸。もうなにがなんだかわからない！でもいい！

作家 / 海猫沢めろん

- 苦しみや哀しみを超えた想像すら恐ろしい感情や痛みを抱き続けている主人公を見てるだけで辛い。でも凄まじくカッコイイと思ってしまう。

PENICILLIN / HAKUEI

- 先が読めない作品は沢山ありますが、ゾクゾクしてむしろ心地いい作品だと思います。作者の読み切り作品を以前紙面で読んだのですが、連載でまさかここまでぶっ飛んだ話を書くと思わなかったです。じれったさもあまり感じず毎週ネットで最新話がアップされるのを楽しみにしています。いったい何処へ連れて行かれるのか…。待つだけの身を存分に堪能しています!! 読み切り作品も面白いので是非に単行本化して欲しいです。

バンドマン / TA-SHI

- エグい表現はあれども、昨今流行のただの血みどろ理不尽殺人エンタテインメントとは違う、「正義」と「何かわからないけど底知れぬパワー」を感じる作品だった。ネットや、友人の口コミで知った作品で、1巻からすでに「これは何か今までと違うかも」と期待させる設定である。そして何より、奇妙な「力」を感じる。ストーリーも結構変化が多くて、たまにアグニのキャラがつかみづらい時があるけど、それがまた魅力。ちょっと中盤息切れしちゃうかな・・・と心配したこともあったけど、常に読者を一歩先へ「もしかして、これからさらにおもしろくなるのでは・・・」と思わせてくれる!! そうして次の巻も買うし、まったく想像できない世界に没入する楽しさを味わえる。

会社員 / 西尾 美里

- 衝撃の1話目からのこの展開。天才となんとかは紙一重感がものすごい。めっちゃ好き。がんがん好きなようにやって、私たちを裏切りつつけてほしい。めっちゃ好き。

オリオン書房ノルテ店 / 池本 美和

- 進撃の巨人以来の絶望感！今期最もインパクトの強い作品です。というのも、閉塞感の高い世界観の作品は数多くあるので何となく雰囲気でも終わり方が予想できるモノのように思うのです・・・が。この作品は、とにもかくにも主人公の設定がスゴ過ぎるので全く分かりません！

デザイナー / 佐藤ユウ

選考員コメント・2次選考

- まるっきり先の読めない展開で、果てしない可能性を秘めた作品。燃え続ける主人公は復讐も果たせず、何のために生きているのかすらもう分からなくなってきた。にも関わらず物語は先へ先へと進むことを止めない。読めば誰もが奇妙なロードムービーの着地点を知りたくなる、そんな魅力に包まれた特異な話。参った、わけもわからず面白い！

株式会社マーズ・シックスティーン取締役社長 / 北山友之

- 死ぬまで自らを燃やし続ける焔に包まれながら無限に再生する主人公、というだけでも凄いののに、2巻からは映画バカが出てきて最高に面白くなった。チートキャラによるメタ構造の意図的な導入。作中の台詞にあるよう「映画は面白ければ何をしてもいい」を地で行く。目が離せない。

ブロガー / サイトウマサトク

- これしかないでしょ！

作家 / 海猫沢めろん

- 最初のインパクトが3巻刊行されている現在も消える事が無く、今もずっと驚掴みされ続けています。トガタやユダなど、再生祝福者達の感情が消えてしまった瞳の描写が凄くゾクゾクします。アグニの辿る人生に一体何が見えるのか... この先どんなトンデモ展開でもついていきたいです！最近のオススメ漫画は？と聞かれて即答で紹介する作品です。

バンドマン / TA-SHI

- 雪に覆われた世界。炎で焼き殺された妹。自らも生きながら燃え続ける、再生の祝福者である兄。その復讐譚、と思いきや、予想もしない方向へ転がり続ける。「良い意味で裏切られた」という表現があるけれど、「良い」も「悪い」も無い。ただ裏切られる。是か非か。二択を迫られる作品だと思う。しかしながら、どこへ、どこまで転がっていくのか、非常に気になる。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 進撃の巨人以来の絶望感！今期最もインパクトの強い作品です。というのも、閉塞感の高い世界観の作品は数多くあるので何となく雰囲気でも終わり方が予想できるモノのように思うのです・・・が。この作品は、とにもかくにもまづ、主人公の設定がスゴ過ぎるので全く分かりません！一話すら先が見えないこの漫画には好奇心が刺激されまくります！

デザイナー / 佐藤ユウ

- 展開次第で、進撃の巨人レベルまで盛り上がりそうなヤバさを感じる。

PENICILLIN / HAKUEI

- 今、面白いマンガならコレ！50年後も支持されている作品かどうかは分かりません。なので今読んで欲しいです。

公務員 / 東くるみ

- 無軌道で展開が読めず、読者は、毎回「どうなっちゃうんだろう」という想いを抱き続ける、そんな過去に類がないマンガだと思います。連載も毎回、どうなっちゃうんだろう、と僕自身思いながら読んでます。これってなかなかすごいな、と。正直、表現のことも考えると万人にオススメとは言えないけど読む価値はある！そう思います。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川元良

- 正直話題になった1・2話しか読んでいませんでしたが（そして設定だけがユニークな感じね…などと思っていましたが！）、ユニークな設定のその先の物語がなんと面白いことか！爽快なアクションシーンがあったかと思えば、背筋がヒヤッとするホラーシーン、思わずフフツとなるギャグシーンが次から次へと展開していて、怒涛の勢いに飲まれました。

ホビー会社勤務 / 畑中 瀬路奈

- 「変態だ！」この作品を読み進めていくうちに、作者に抱いた感情。違う次元に飛ばされる感覚アリ。

音楽家 / 谷澤智文

- なんだなんだこのジャンプマンガは（「+」とはいえ）？ 数ページに1回驚くことが飛び出してきて、ドキドキどきどきしてしまう。2巻でいびつなキャラ（トガタ）が登場したことでがぜんおもしろくなった。かと思えば3巻でド王道の方向に引き戻されて…急ブレーキをかけてガッと違う方向へ思いっきりハンドルをきることを繰り返しているような、作品自体もいい意味でいびつな、予測不可能な作品。新しいことが起こっている、というワクワク感がある。自分がマンガに何を求めているのかが、よくわかりました。

漫画ライター / 門倉紫麻

- あまりにもぶっとんでいて、読みながら「なんだ、これ！！！」と興奮してしまった。ハチャメチャで残酷でなのに笑わせてくれるという。ピンタどころかグーで顔面を殴られたようなショックを受けた作品。早く！続きを！！読みたい！！

三省堂書店営業企画室 係長 / 内野 智未

- 全編からたちのぼる冷めた怒りに、ただならぬ気配を感じてそわそわします。ここから私は勝手に、生まれる前から膨大なエンタメに囲まれた世代の「面白いことはとっくにやり尽くされてるんだろ？」って苛立ちや、「何をやっても名作達の焼き直しなんだ」って開き直りを、そしてそれを突破しようとする決意を感じてます。とにもかくにも、そこに「今」の空気をひしひしと感じて心が震えます。いつの時代も誰かが描かなきゃいけない、「この世界に殺されないための物語」の最新形がここにあると思います。

会社員 / 末永龍介

- どこで着地するのかわからないところがとてもいい。なんでもありでめちゃくちゃなところがとてもいい。主人公がどうなろうとも応援してます。がんばってください！！

オリオン書房ノルテ店 / 池本 美和

- 氷に閉ざされた世界で、燃え続ける男。寓話のような設定と陰惨な描写は「こんなの読んだことない」と久々に思える世界観でした。このクオリティと独自性のある漫画が、Web 連載から出てくるところに漫画の未来を感じました。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 切ない。怒りが切ない。でもだから読み進めてしまう。買ってしまう。しょうがないだって先をやっぱり知りたいもの。知りたいから思わず続きを手取るよね。そんなのがマンガ大賞にはとっても良いと思う。だから今回はゴールデンゴールドとも悩んだけどこっちを選びました。

スタジオフーズ プロデューサー / 小林智之

「約束のネバーランド」出水ぽすか・白井カイウ

選考員コメント・1次選考

- 畜舎の豚や、牛や、鶏が自分たちはいずれ喰われる身だと知って日々を生きている、とうことはないだろう。そう思ったことを思考し、自覚するだけの知能を豚も、牛も、鶏も持っていない、ということにとりあえずはなっている。けれどももしも豚や、牛や、鶏と意思疎通が可能だったら、喰わないでと人間に訴えるだろうか。そんな訴えを聞いて人間は、分かった喰わないと言ってあげることができるのだろうか。それが家畜というものと理解して、長く豚も、牛も、鶏も喰ってきた人間が今さら、コミュニケーションが可能になったからといって、もう喰わないといってあげられるとは思いつらい。いや、そこは同じ知性のある者と認めて喰わないという判断をする可能性もある。喰おうとしていた相手への優しさというよりも、喰われる相手から放たれる哀しや怒りの感情に苛まれることを良しとしないという、そんな逃げの感情を理由に。宇宙人は、あるいは異星人はどうだろう。人間よりも遥かに高次の存在が、人間の知性を認めながらもそれを家畜と認識していて、叫ぼうとも怒ろうともひるまず逃げもしないで喰らう可能性はあるのか否か。あるとしたらそれはどういった心理によるものなのか。所詮は低次の家畜であるという認識。叫ぼうとも哀しもうとも認めるに値しない感情だという理解。そして相手の叫びがたとえ気持ちを揺さぶったとしても、それを超える美味への欲望が上回っている状況。いろいろと考えられるけれど、実際に彼らがどう考えているかは分からない。だから逃げるしかない。その孤児院から。白井カイウ原作で出水ぽすか作画による『約束のネバーランド 1』（集英社）。ママと慕う優しい女性の下で少年や少女たちは毎日を明るく、そして楽しく暮らしている。毎日のように試験が課せられている厳しさはあるけれど、それで良い点をとれば大好きなママに褒めてもらえると、少女も少年も頑張って試験に臨んでいる。そしていつか外に出る日を夢見ている。そう、12歳になるまでに子供たちは里親にもられるという形で外へと出て行く。孤児院に置いてある本などから外の知識を得て、そこには幸せがあると信じて、孤児院に暮らす子供たちは外に出る日を待っている。そしてその日もコニーという少女が里親にもられることが決まって、仲間たちに見送られて出て行った。でも、大切なぬいぐるみを忘れていってしまい、届けようとしたノーマンとエマの2人は、閉められていた裏口の鍵を開け、夜の門へと近づいてそこで見てしまう。トラックの荷台に横たわったコニーと、周囲を蠢く化け物を。そして知ってしまう。自分たちの立場を。食物連鎖の最上位にあると思いついて混んでいる人間が、実はそうではなかったという設定の物語には幾つもの類例はあるけれど、そうしたシチュエーションを孤児院に閉じ込められ、養われた子供たちに当てはめているというところがひとつ衝撃的。どうしてそんな状況が生まれたのか。出られない柵の外、塀の向こう側はいったいどうなっているのか。そもそもそこは一般的に言われている地球なのか。世界観への興味を煽られる。奴隷なり臓器移植のための人身売買という、現実の社会でも起こりえる状況にも通じる設定ながらも、それだったら逃げ出せば官憲なり正義の味方がいて、解放される可能性を信じられるだろう。『約束のネバーランド』の場合、外に出たところで逃げ切れるものなのかがまるで見えない。豚舎や牛舎や鶏舎を逃げ出し野生に帰って家畜たちが生きられる可能性よりも引くような生存の可能性に、ひとつのデッドエンドを見てしまう。だからといって止まり続ければ運命は同じ。いったいどうする。ギリギリの時間までを孤児院にあって自分の能力を高めながら、虎視眈々と反撃の準備を進めるべきなのか。それで解消され得る問題なのか。天才とはいいいながらも子供に過ぎないノーマンとエマ、そしてレイの3人による葛藤と模索の日々に同情を向けてしまう。子供たちにとって異常なまでに能力が高い3人も、果たしてコニーのような運命を辿る予定だったのか、違う道があったのか。そんな可能性も浮かんて物語における子供たちの位置づけを、いろいろと想像してみたくなる。少年向け漫画誌にありながらも衝撃的で残酷な状況を持ち込み、圧倒的な画力で日々を楽しく遊びつつ、けれども迫る危機に怯えつつ勇気を出して挑もうとする子供たちの様々な表情を描いた漫画として今、屈指の作品と言えるだろう。そしてまだ始まったばかりの世界で、見えない未来がいったいどこに通じているかを追っていける楽しみもある。それは悲劇か。それとも新たな希望か。続きを見守りたい。

書評家 / タニグチリウイチ

- とんでもないファンタジー設定を極力抑えながら、心理戦が楽しめる。少年ジャンプの底力を感じさせられます。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 楽しい孤児院での生活・・・なんてあり得ないだろうが、それどころではなかった!!そこは、人間を食らう鬼たちの商品を育てるための農園だった!!!! そんな残酷な現実を知った子供たちの今後の運命やいかに……。独創の世界設定、ストーリー展開のテンポのよさ、未知の点の残る人間関係など、今後の展開に期待させる 1 冊。

弁護士 / 長島・大野・常松法律事務所 / 三村 量一

- 可愛らしく和やかな始まりから、一転して一気にシリアスに。いったい、誰が誰の裏をかいているのでしょうか? テンポよく展開される頭脳戦にドキドキします。

教師 / 持丸 宏司

- 徐々に明かされる世界観と謎に引き込まれる。

医師 / 岸本倫太郎

- 本来は来年投票すべき作品かと思いますが、週刊作品は刊行ペースが早く、旬も短いので先物買いで。

ライター / 芝田隆広

選考員コメント・2次選考

- 「こんな作品がまだ世に出てくるだなんて、これだから漫画を読み渡る事はやめられないのだ」と臆面もなく言います！美麗でファンシー、それでいてどことなく哀愁を感じさせる絵柄からは想像もつかない、幼い子供達が立ち向かう重厚で鼓動が早まるようなダークサスペンスストーリー。一度このギャップに引き込まれてしまったら、もう後戻りする事は出来ません。現実とおとぎ話の隙間を練り歩くような絶妙な世界観の下、絶望からの脱却を図る主人公達が希望を見付けれるのか、一瞬たりとも目が離せません。

Books アイ苺荷谷店 / 野口忠義

- まだ2巻と浅いのと、もっと機が熟してからと内心想っていましたが、やはりこの面白さには負けてしまいました。大人一人の監視下に置かれた子供達。そんな世界には謎と裏があり、子供達はその今いる“施設”から脱走を試みるという展開。この大人と子供の緻密な計算された、やり取り、駆け引きが面白い。良質な物語。一筋縄ではいかない展開。果たして子供達が脱走し、世界を見るのか、それともこのまま終わってしまうのか、続きがたまらなく楽しみ。さらに加えて、たまに見せる鋭い目線や表情など、また引きやアップなどがとても巧い。惹きつけられる。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 施設からの脱出劇の設定はオーソドックスだが、複数の駒を配した頭脳戦に転じることで化けた。『週刊少年ジャンプ』では『デスノート』以来の感触。

レビュアー / 福井健太

- 予想ができない展開にハラハラどきどき面白い！ああ~~~~次が読みたい！待ちきれないって気持ちにさせてくれる漫画です。単なるダーク系漫画ではない奥の深い原作と作画にも満足。おすすめです。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

- 第1巻で判断するのは早すぎると思ったが、選考中に出た第2巻、そして最近のジャンプで追っているうち、傑作との確信が揺るがなくなったので1票投じます。先が読めない神経戦サスペンスという意味では『DEATH NOTE』の再来みたいですが、そこに出水さんのダークでメルヘンなアートワークが絶妙にマッチして、ちょっと類例のないすごい破壊力を生み出していると思う。恥ずかしながら作者2人とも今回初めて知りましたが、すげえ才能はまだまだいるんだなあと感嘆しました。今年話題を集めること必至の逸品。

読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員 / 石田 汗太

- 脱出もの(?)って、好きです。一緒に考えて「ほら」とか「やっぱり」とか「なるほど」とか、そういうのができるのも、自分のペースで読み進められるからこそだと思います。

鉄ばいぶレーベル・代表 / 杉本善徳

- まだ巻数が若いですが、最初からずっと面白い。内容が内容だけに、嫌悪感をもつ人も多いかもしれないが、登場人物たちの心理戦、時折見える別の顔に"ゾクッ"とする。今後が楽しみ。

主婦 / 赤坂真実

- 孤児院で幸せな毎日を血の繋がらなっていない「家族」のみんなと過ごしていた3人の天才少女と少年。11歳の彼らが、ある日「とんでもない事実」を突きつけられて、その孤児院を脱走する計画を立てる。然も、0歳児〜11歳までの38名全員で。寮母の「ママ」と3人の頭脳戦が兎に角、面白い。いったいどうやったら、脱走できるのか。その後、生きていけるのか。自分には考えが及ばず読み進めていくしかなく私自信も11歳の頭脳に身を委ねている状況というのが、新感覚で面白いです。

アニメイト 販促課 / 鈴木寛子

- 今いちばん続きが気になる漫画といえばこれを挙げる方も多いのではないのでしょうか。次から次へとハラハラドキドキの要素を出し惜しみしないスピーディな展開に、原作者の先生の引き出しの多さを感じます。作画も魅力的でグイグイとページをめくらされました。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- 「箱庭」からの脱出という、よくある設定なのに、大人と子供たちの駆け引きから目が離せない。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 緻密に設計されたストーリー、キャラクターと配置、世界観。無駄のなさが作品に緊迫感をもたらしていると感じます。怖いシーンが繰り返されるわけでもないのに切迫した状況が伝わってきます。それにしてもキャラクターが長々説明的なセリフを続けるわけでもないのに、ちゃんと状況がわかるのは素晴らしい。

会社員 / 林礼春

- 親がなくても楽しい孤児院での生活・・・を過ごしていたつもりの孤児達だったが、それは虚構の上に築かれた世界だった!! 真実は、鬼たちのための食料を育てるための牧場だった!!!! 食われるために育てられている。そんな残酷な現実を知った子供たちは、孤児院からの脱出を決意する。大脱走を想わせる緻密な脱出計画。舞台設定の独創性、ストーリー展開のテンポのよさについつい引き込まれてしまう。絵もうまいが、人間心理を踏まえた登場人物相互の関係の描き方も秀逸。今後の展開が期待される。

弁護士 / 長島・大野・常松法律事務所 / 三村量一

- つくづく、ジャンプの漫画の面白さの瞬発力は凄いです! 閉塞感と力強さにもものすごいエネルギーを持っている漫画です。まだ話数も少ないながらどこまでの深さと高さを持つのか非常に楽しみでポテンシャル抜群な作品です。

デザイナー / 佐藤ユウ

- 平和に暮らしている世界が、実はそうではない。外の世界がまったくまだ見えていない分、今後の展開が気になってしょうがないです。この施設から子どもたちが協力して「ママ」の魔の手から逃げれるのかワクワクします。そして、逃げた先は本当に良い世界があるのか。謎の多い話ですが、それが少しずつわかっていくのが面白いです。

デザイナー / 平沼寛史

- 「1日で一気に購入してしまう作品」というのに出会えるのは本当にまれだ。読み終わってすぐに、公式サイトを探して、次巻の情報を探す。待てないほどの興味。なるほど次は4/4発売なんだ・・・! 名作小説「わたしを離さないで」を彷彿とさせる世界観と、その中で生き抜こうとする子どもたち。すでに2巻出ているけれど、あっという間に読んでしまった。約束のネバーランドは、続きが気になってしょうがなくなる作品だった。「わたしを離さないで」は似たような世界観でありながら、そこに既存のルールにはむかう子どもたちの様子は描かれず、当然脱出も出来ない。たんとと、ただ搾取されていく子どもが描かれていた。でも、本作の子どもたちは優秀で、そしてエネルギーに溢れている。希望が見える。主人公エマいいやつ。裏切り者探しのシーンはドキドキしたし、意外性に驚き、ワクワクした。そして読み進めるごとに深まる謎・・・とりこだ。とりこになった。絵も見やすく、たまに見せるキャラクターたちのドキッとさせるような表情も独特で、面白い。いろいろな伏線と思われる描写も多いので、よくある悲壮感しかない展開とエンディングで終わらないことを心から祈って読み続けていきたい。

会社員 / 西尾 美里

- ジャンプだとおもって逆にあなどっていた!

作家 / 海猫沢めろん

- こんなにヒヤヒヤするジャンプマンガは『デスノート』以来なんじゃあないかと思う、サスペンスフルな作品です。毎回訪れるとんでん返しに肝が冷えるのにくわえて、エマたちが何と対峙しているのかが未だに不透明なもの、不気味さを際立たせます。週刊少年誌の限界突破な絶望脱出ゲーム。いま、ジャンプを買ったら毎週真っ先に探して読むマンガです。

アニメイト町田 / 岡ノ部亭 真泰

- ストーリーの運び方、人物の描き方、紙越しに伝わる雰囲気、全てにおいてジャンプらしくない、だがそれが良い。という作品。まるでミステリー小説か海外ドラマかのような、次が気になって堪らない仕立てになっている。

元書店員 / 齋藤隼

- 「少年向け漫画誌にありながらも衝撃的で残酷な状況を持ち込み、圧倒的な画力で日々を楽しく遊びつつ、けれども迫る危機に怯えつつ勇気を出して挑もうとする子供たちの様々な表情を描いた漫画として今、屈指の作品と言えるだろう。そしてまだ始まったばかりの世界で、見えない未来がいったいどこに通じているかを追っていきける楽しみもある。それは悲劇か。それとも新たな希望か。続きを見守りたい」 マンガ大賞2017の候補作として、白井カイウ原作、出水ぽすか漫画の『約束のネバーランド』（集英社）を推薦した文の最後には書き添えた言葉は、自分ひとりの所感ではなかったようで、最終候補作の1冊としてノミネートされてさらなる読み手を得て、その身にひしひしと迫る最後の火への恐怖と、それを乗り越え進もうとするこどもたちの勇気を同時に感じていることだろう。「そう、12歳になるまでに子供たちは里親にもられるという形で外へと出て行く。孤児院に置いてある本などから外の知識を得て、そこには幸せがあると信じて、孤児院に暮らす子供たちは外に出る日を待っている。そしてその日もコニーという少女が里親にもられることが決まって、仲間たちに見送られて出て行った。でも、大切なぬいぐるみを忘れていってしまい、届けようとしたノーマンとエマの2人は、閉められていた裏口の鍵を開け、夜の門へと近づいてそこで見てしまう。トラックの荷台に横たわったコニーと、周囲を蠢く化け物を。そして知ってしまう。自分たちの立場を」「食物連鎖の最上位にあると思い混んでいる人間が、実はそうではなかったという設定の物語には幾つも類例はあるけれど、そうしたシチュエーションを孤児院に閉じ込められ、養われた子供たちに当てはめているというところがひとつ衝撃的。どうしてそんな状況が生まれたのか。出られない柵の外、塀の向こう側はいったいどうなっているのか。そもそもそこは一般的に言われている地球なのか。世界観への興味を煽られる」人間のこどもたちが家畜として飼われ養われている施設。そのことを知ったこどもたちが起こそうとする反乱と逃走が本当に成功するかは分からない。そもそも世界はどうしてそんなこどもたちへの残酷を赦し、協力する人間を認めているかもまだ見えない。施設の外に自由な世界が広がっているのかも分からない中で、絶望の未来を未だ感じないではいられない。けれどもそんな閉塞感だけの物語を「友情・努力・勝利」をモットーとする週刊少年漫画誌で連載させるとも思えない。どこかに出口はある。そして救いはある。勝利もある。そう信じて今は1巻を読み、刊行されたばかりの2巻を読んでそして「週刊少年ジャンプ」誌上での連載を追うしかない。人類のある種の未来を描いたSFとしてだけでなく、絶体絶命の状況、雁字搦めの状態からどうやって逃げ出すのかといった頭脳戦もあって、ミステリとしても楽しめる作品。どこまでも強さがエスカレーションして続く果てしないバトルとも違って、いつか終わりが来ることもきまっている。その時をいたいどう迎えるのか。何が起こるのか。期して待とう。決して少なくない不安も抱きつつ。

書評家 / タニグチリウイチ

- 子供を食料として育てている孤児院のような施設中のお話なんて、すごい切り口に脱帽したのが最初でした。アナログな世界かと思いきや、子供たちのスコアをテストする環境はハイテクだったり。外の鬼の世界があるという今後の展開があれど、まずは施設内の攻防。頭脳戦、裏切り、伏線がどこまで繋がって行くのか。久しぶりに連載で続きが待ち遠しいです。

舞台女優 / 大倉照結

- 投票した作品の中では現在一番楽しんではいますが、2016年に1巻しか出ておらず、本来は投票するならあと1年待ちたいかなという感じだったので3位票に。とはいえ、週刊連載は足が速いのでホットなうちに投票しておきます。雰囲気のある作画と、ミステリアスな物語展開で興味深く読めます。

ライター / 芝田隆広

- この候補作になる前から、我が家の小学生男子に「これ面白いんだよ」と教えてもらっていた漫画（息子は毎週少年ジャンプの連載を読んでいるのです）。設定がミステリタッチで、いつも次回が待ち遠しくてハラハラしながら読んでいます。

主婦 / 安田ママ

- 第一話でガッチリ掴まれました。こんな作品がまさか週刊少年ジャンプで連載されているとは…！孤児院で暮らす子どもたち、でも本当は孤児院ではなくはなく別のある目的で子どもが集められた場所で…設定はありがちですが、ストーリーのテンポがよく、久しぶりにサスペンスものでハラハラワクワクできる漫画ができたな、という感じです。

会社員 / 宇田川 結衣子

マンガ大賞2017 ノミネート作品

月刊アクション / 双葉社

「私の少年」高野ひと深

選考員コメント・1次選考

- この人、本当に新人作家??と驚いた。絵の完成度も高い。読み始めの第1話からグイグイ惹き込まれる。静かに静かに進んでいくストーリー。核心は見えないけど確実に少年と主人公の周りに不幸の臭いがする。ゾクゾクしながらページをめくる手がとまらず、久しぶりに続の巻が発売されるのが待ち遠しいと思いました。これからどんな真実が見えてくるのか、どれほど2人が互いの絆を深めていくのか。目が離せません。

三省堂書店営業企画室 係長 / 内野 智未

- 周りのマンガ読みからの推しがすごくて読んでみたら「確かに!」と納得しました。心に傷を負う者の静かな交流…じわじわと沁みます。

ライター・大学講師 / トミヤマユキコ

- 中性的な少年の表情に惹きつけられる。誰かに必要とされたいというお互いの気持ちが痛いほど伝わってくる。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- この作品を推すということは、ショ○コンを公言することになるのだろうか…。主人公の三十代 OL が、夜の公園で1人サッカーの練習に励む、どうやら家庭環境が複雑そうな小学生男子と、出会う。見過ごすことが出来ずに、サッカーを教える名目で度々会うこととなる二人。周囲の目もあり、つかず離れずなのだけど…。二人の関係は、どうなるのか。少年があまりに良い子すぎるので、癒されられつつも心配になる。幸せになってほしいな、と祈りつつ、続きを待ってます。

主婦 / 赤坂真実

- ショタはいい!と臆面もなく言うのもどうかと思うけどいいもんはいい。「ショタ」って設定はそもそも「二人が結ばれるハッピーエンド」というものに限りなく無理がある設定なので、エピソードが幸せそうであればあるほど切なくなる、という構造を持ってるんですよ…(異論はあると思いますが…)2巻でこの切なさ。この後どんだけ…

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部店舗開発課マネージャー / 大山敏樹

- 30歳と12歳の危うい関係。普通であれば、そういう感じの漫画かなあという感じでしたが違いました。これは画力のおかげが高いように感じました。また2人に関わってくるキャラクターがしっかりとたっており、今後の関わり方が楽しみです。

ブックエクスプレス / 中村 哲彰

- いまのところ作中世界で少年の容姿の美しさをハッキリ認識しているのが主人公の主観だけで、ふたりの曖昧な関係性から漂う緊張感とエロスから目が離せません。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

選考員コメント・2次選考

- いけないこと（恋愛としては）なのか良いこと（サッカーを教える）なのか微妙な心情を読み手にも惑わせる。画風も見合っていて良い。
コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏
- ちょっと大人な女性向けかな？とも思いますが、まんが王では男性の読者も多くいて、他のオネショタ（お姉さんと少年）ものとは一線を駕している漫画です。ヒロインである、聡子さんのある日出会った真修（気になる男の子）への気持ちは、母性本能なのかそれとも愛なのか？この心の葛藤が非常に上手く描かれている作品だと思います。
TORICO まんが王 通販部 / 日吉 雄
- 性別を超えたところにある美しさが眩しい。ストーリー上、避けられないであろう暗雲すら忘れてしまうほど。
往來堂書店 / 三木雄太
- 純粋にこれは読んでしびれました。真修くん良いわー。
ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝
- 繊細なタッチと絶妙な雰囲気には、ついつい少年の行く末を案じてしまう。ショタコンでない人にもオススメ！幸せになって！
鍼灸師、理学療法士 / 碓氷麻里子
- 他の追従を許さない圧倒的透明感と繊細な心理描写がこの作品が持つ唯一無二の美しさだと思います。何かに深くのめりこむ事が出来なくなった 30 歳 OL と、複雑な家庭事情を垣間見せながらも年相応のあどけなさを見せる 12 歳の少年。支えているつもりで支えられていた、支えられているつもりで支えていた。血の繋がりが無ければ年齢もかけ離れる、そんな「男女」の二人がかけがえのない存在に徐々になっていく様子が、二人の吐息が聞こえてきそうな程に透き通る画力で丁寧に紡がれます。少し不思議で愛しい二人の関係を長く見守っていききたい、そんな気持ちにさせられます。
Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義
- 「凄い。」2 巻まで読み終えて、頭の中に出てきた言葉がこれでした。小さな少年をこんなにも美しく、繊細に描いた作品を、私は今まで出会った事はなかった。聡子と真修、二人の関係がどうなっていくのか、とても気になる。
LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛
- 二人には幸せになってほしいけど、そうもいかないんだろうなって思うから切ない。幸せになってほしい。二人の間にある気持ちを守りたい。誰にも否定してほしくない。勝手に名前をつけてほしくない。二人の周りに壁を建設したい。私は壁職人になる…。
金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子
- 30 歳 OL と近くに住む訳ありな 12 歳のサッカー少年。母性とも違った感情が渦巻く不思議な縁。バランスもいびつ、周りの環境も 2 人が一緒に居ることをそれほど歓迎はしていない。いつかこんな関係は崩れてしまうのだろうけど、その崩れ具合ですら読ませてしまう奥深さをこの作品は持っている。
株式会社マーズ・シックスティーン取締役社長 / 北山友之
- 俺のスレ切ったアンハッピーエンド予想を覆してまさかの大団円とか信じて読み続けたいと思う。
ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部店舗開発課マネージャー / 大山敏樹
- 恋愛というような感情ではないのかもしれませんが、美しいものを愛でたい、自分が失ってしまったもの、持っていないものを持っている存在への憧れのような気持ちなのか…言葉で表すには難しい感情がわく作品でした。絵が綺麗で少年の美しさがうまく表現されている作品だと思いました。好きな作品です。
株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳
- 30 歳 OL と 12 歳小学生。ああショタ漫画か、と考えている男性にこそ読んで欲しい。この二人が近づいていくのは、身近にいる「正しい大人の男」のせいかもしれないから。
八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- うちの選考部隊は女性が多かったので、3位にランクインしました

明文堂書店 TSUTAYA 金沢野々市店 / 木村 俊介

- 絵もストーリーも圧倒的な上手さ。本当に（ほぼ）新人作家？？と思うほど。売れる作品や人気の出る作品で、映画にしろアニメにしろ「動いた」状態が想像しやすいと思う。これもまさに映像化でも観てみたい！作品。少年の着ている服、家の様子、小物のひとつひとつ、、それらが無言で読者に彼の置かれている境遇がどんなものなのかを伝えてくる。そして聡子からも感じるほの暗さみたいなものが2人をシンクロさせていく様子に胸が苦しくなる。この先の展開から目が離せません。

三省堂書店営業企画室 係長 / 内野 智未

マンガ大賞 1次選考作品

全作品名・選考員コメント掲載

「AIの遺電子」山田胡瓜

- 2016年で一番出会えてよかったと思う新人さん。短編が面白いってありがたい。

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 設定がゾゾっと。でも科学の進歩を考えると、数十年後、ありえるかもしれない、と思ってしまった。うーむ。読んでみていただきたい1冊。

アナウンサー / 松尾 翠

- 未来に登場するテクノロジーの産物・ヒューマノイド。モチーフとしても、各話のエピソードとしても、正直なところ目新しさは感じられない。しかし、そんな題材を、淡々と、でも、すんなり読ませてしまうというのは並大抵のことではないと思う。これを連載させてる少年チャンピオンは、いいですね。子供も大人も違う形で楽しめます。子供のころに読んだら、大人になっても読み返したくなる作品だろうなあと、いい年したおじさんはうらやむのでした。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 近未来を舞台にした連作短編。人間って、もしくは人間であるって、どういうことなんだろう？と、正解のない答えを、共にそっと探してくれるような物語たち。本と向かい合ってひとりで読むことの楽しさを、思い出させてくれるマンガだと思う。

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

「阿・吽」おかざき真里

- 現在の日本仏教の基礎を作った二人の僧、最澄と空海の物語。「宗教」の持つ、ものすごい密度と力を感じさせる作品。

ブロガー / サイトウマサトク

- 空海が好きなので読み始めたが、精神修行の表現力に圧倒される。どうなっていくのか楽しみな漫画。

自営業 / 小野ゆうこ

- 平安時代を扱ったマンガっていうと十二単衣か陰陽師が多いって先入観があったけど、最近『応天の門』が菅原道真の少年時代を取り上げてくれるてと思ったら、これはそれよりも前の最澄と空海の時代。桓武天皇とか出てきます。最澄も空海も、それぞれが伝承や宗教的奇蹟に包まれた人たちなのでそこをどうやって取舍選択していくか。今後が楽しみで仕方ない。それにしても、絵が絢爛豪華。表紙の色使いが印象的。なにとぞ原画展などを開いてもらえないだろうか。

鳥取県立日野高校司書 / 野間勤

- 空海と最澄を主人公としたマンガです。単なる伝記ではなく、主人公の二人が、自分の真理を見つけるため、深く内面と向き合い思索する描写が圧倒的です。その内面の描写は、動物的だったり、神々しかったり、悪魔的だったりして、様々な形で読む人の心に入り込んできます。仏教の話なので難しく説教くさかったりするのかなと思いきや、人間として自然体で教えというものと向き合っているの腑に落ちる話になっています。空海、最澄がそれぞれ違ったアプローチで読んでいる人を思索の旅に連れて行ってくれます。人の内面をこんなに深く描いた漫画ってあまりないのではないのでしょうか。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

「悪魔のメムメムちゃん」四谷啓太郎

- 淫魔の概念を覆す幼児体型の主人公・メムメム。雰囲気は終始ゆるいが、とにかくテンポがよい。日常に突如乱入し動き回る（しかし、ほとんど震えながら泣いている）メムメム、というストーリーのまま、この面白さをどこまで続けられるのか。

弁護士 / 長島・大野・常松法律事務所 / 三村 量一

「あげくの果てのカノン」米代恭

- 究極の片思いがこじらせてストーカー的に彼を想う主人公の痛すぎる恋の物語。共感を感じるところもあれば、引いてしまう部分もあるけれど、なんだか目が離せません。SF要素もあり、世界観やキャラクターも個性溢れます。どうしてこんな世界になってしまったのか気になりますが、やはり物語の核心はこの恋が実るのか？でしょうか。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- セカイ系ミーツ不倫。2016年と言えば不倫！ってのは置いといて。自尊感情の低さと恋愛が成就することのアンバランスさ、とか変わり続ける人間はどこまでが同じ人間だと言えるのか、とか、考え出すと結構ミもフタもなく大変なテーマを問いかけてきます。

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部店舗開発課マネージャー / 大山敏樹

- 好きってなんだ？恋とはなんぞや？？そういうのがもうね、これを読んでいるとどうとでもなれっていう気持ちになる。私が好きなのが「私の好きな人」っていう、一途すぎる主人公の、恐怖すら感じる乙女っぷり。この終末世界の設定にこんな概念をぶっこんできたことがすごい。先が読めそうで読めない、破壊力抜群のSFラブロマンス。

オリオン書房ノルテ店 / 池本 美和

「あせびと空世界の冒険者」梅木泰祐

- ドキドキが詰まった正統派ボーイミーツガール。毎月の続きが楽しみな作品です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「あそびあそばせ」涼川りん

- 個人的に、複数の女の子がアホなことをしている作品に弱いのですが、この漫画は特に「笑わせにきているコマ」以外のコマも地味に面白かったり、伏兵が多い上に其れがツボで、とてもいいです。

鉄ばいぶレーベル・代表 / 杉本善徳

- 前作もよかったのですが、それを超えてきた！絵もギャグも秀逸！主人公3人もいろいろアレなんですけど脇を固める先生や家族もいろいろヒドイ！未永く彼女たちを読みたい。ふたりエッチやベルセルクより長く続きますように。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川元良

「ACCA13 区監察課」オノ・ナツメ

- わ？おいしそう！の山。主人公のジーンは、13に別れた地区を監察して巡回するのが任務なので、それぞれの土地のご当地フードがものすごい筆圧で設定してあって素敵。読むと「まんがの中のフードがこの世の中で一番食べたい！」熱が沸騰。しかも物語の牽引役はミステリアスな煙草にまつわる謎、というフードネタもおもしろい。6巻で完結なので読み時ですよ？あと、制服万歳！どの服もめっちゃくちゃかっこいい。動く制服姿が観られるなんて、祝アニメ化。

お菓子研究家 / 福田里香

- オープニングのヒップでスタイリッシュなサウンドと、背景に流れるオノ・ナツメならではのシンプルな線でありながら、性格も属性もしっかりとにじみ出るキャラクターに惹かれて見始めて、これは面白い上に奥深そうだと思ったのが運の尽き。1週間に1話では先が長いと原作漫画を手にとって読み始めたらもう面白くって、完結の第6巻まで一気に読んでしまった『A C C A 13区監察課』（スクウェア・エニックス）。そして漫画でありアニメーションの冒頭からの2話分で、ふっと感じたこの舞台となっている世界における、平和のようで実は生じ始めているきしみのようなものと、それをどうにかしようとする動き、そして主人公でA C C Aという組織の監察課副課長を務めるジーン・オータスにありそうな裏事情のようなものが、だんだんと濃さを増して物語を転がしていく展開に、作者の構想力の確かさと、そして愛すべきこの世界を作った想像力の豊かさを感じて脱帽する。13の自治区に分かれたドーワー王国という舞台。それぞれの自治区に経済的社会的な事情があって、そんな自治区に生きる人たちの、毎日をしっかりと過ごしながらか、明日を夢見ている姿が読んでいてどこか心地良い。食べ物が豊かな自治区もあれば、資源に乏しい自治区もあって、格差に不満を抱かない訳ではないものの、だからといって嫉まず勘ねずに自分たちの自治区に誇りを持って生きている。現実の世界の現実の人たちはなかなかそんな風にはいかない。なぜならそうした格差を埋めて誰もが生きられるようにする仕組みが存在しないから。あってもなかなか機能しないから。『A C C A 13区監察課』の世界は違う。資源がなくてもちゃんと配分はあって生きるだけの糧は得られ、その上で自分たちで出来ることをやろうと毎日を過ごしている。押しつけの中での平穩ではなく、自立した心が望む平和。そんなマインドに誰もが浸っている世界がどうして成り立っているのか？ そういったところで浮かぶのがA C C Aという民間でありながらも権限があって尊敬もされている組織の存在。真っ当に統治をしさえすれば真っ当な世界が作られる可能性を示唆してくれている。そんなA C C Aを適正な組織に保っていた監察課に迫る廃止の危機。そしてA C C A自体が解体されるかもしれないという可能性。どうしよう。そして世界はどうなっていく。といったところで巡らされる謀略は、一重ではなく幾重にも重なって主人公のジーン・オータスを巻き込んでいく。でも流されない。揺れ動かない。淡淡として日々の仕事をこなしながら、その実直さで多くを納得させる。下であって仰ぎ見て良いとすら思わせる。権力への執着とは対称的な存在。自分を崇めることで誰かが得をしようとか考えない潔癖さ。理想としたくなる人間性がそこにいて、倣いたくなる世界がそこにある。現実にした世界観と言っても良い。そんな世界を自らの手で差配できる立場に迫りながらも、大きな変革がもたらす不安や恐れを回避して、スムーズな移行を成し遂げつつ、異端を排除してのける謀略の冴えにも触れられる。そんな謀略をしっかりと認識しつつ、そこで自分を主張しないで淡淡と、今の世界の安寧を守ろうと立ち回るジーン・オータスが格好いい。世界の縮図であり、政治の縮図でもある物語。そして様々な人々が様々な場所でそれぞれの日々を生きていることを感じさせてくれる物語が、スタイリッシュなオノ・ナツメの絵に寄って紡がれる。時にコミカルな表情もあって楽しめる上に、シリアスな場面、スリリングな展開もあって引きつけられる。男の格好良さも良いけれど、女の可愛らしさも読んで目に嬉しい。A C C A本部長のモーヴはどこまでも格好いいけれど。だから惹かれたのだろう、年下だとか部下だとか関係無しに。叶わなかったけれど。全6巻でしっかりと完結して、世界は平穩なままかという火種は残って不穩の芽は摘まれていない。ただそれも含めての平和が保たれているのなら、ひとまずは正解だったということだろう。そんな世界を今も走り回っているジーン・オータスが、各区の優しくて前向きな人々の姿に安心していられる日々が続くことを願い、ページを閉じてシリーズを読み終えよう。

書評家 / タニグチリウイチ

「アトム ザ・ビギニング」手塚治虫・ゆうきまさみ・カサハラテツロー

- アニメ化も決まってはいるが、アニメ化されずとも作品の魅力は素晴らしいものだと思う。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

「あなたのことはそれほど」いくえみ綾

- なんとというか、とってもとってもこわい漫画です。昔好きだった男に一心不乱に迫っていく女も、チャラチャラ受け止める男も、浮気を知ってて見守る小熊ちゃんみたいな夫も、冷静に怒りをみなぎらせていく妻も、ぜんぶこわい。単純に「不倫なんかしちゃダメ」とか「浮気すんなバカ」では終わらなくて、いちいち登場人物のリアクションが想像から外れてるところもまたこわい。なんとというか、修羅場にでくわしたときの「その手があったか」の宝庫でもある作品です。

馬場企画 / 島影真奈美

「アニメタ！」花村ヤソ

- どんなふう to 成長するのかしら。

大日本印刷 / 佐々木愛

「天野めぐみはスキだらけ！」ねこぐち

- 軟弱な少年と魅力的な美少女 2 人によるラブコメ。これぞサンデー！ヒロイン、天野めぐみはそのタイトル通り主人公の前ではスキだらけ！その無防備な、健康的なエロスを前にすると 40 代である自分も 10 代のココロに戻ります。あああ、こんな幼なじみが欲しかった…！ 少年に戻りたくなる一冊です！

COMIC ZIN 商業誌部門責任者 / 塚本浩司

- お色気描写が目立つ作品ですが、直球ラブコメとしてもよくできていると思います。嫌みがなくて素直に楽しめる。年取ってきたのでこういうストレートさに好感を持ちます。

ライター / 芝田隆広

- 新しいかと言われれば？だし、友達に勧めるかと言われればやや恥ずかしいし、だけど、とても好きな作品です。毎週雑誌で読みたくなります。

会社員 / 林礼春

「アリスと蔵六」今井哲也

- 何なんでしょうか、この感じは。毎巻、言葉に表せない感情が心に宿るのです。上手く伝えられず申し訳ないのですが、好きです。

鉄ばいぶレーベル・代表 / 杉本善徳

「アルテ」大久保圭

- フィレンツェからヴェネツィアへ舞台が広がってますます面白くなってきました。新キャラクターも魅力的で、これからの展開に期待大です。

文教堂書店浜松町店コミック担当 / 金田健太郎

- ルネサンス期のイタリアで画家を目指す貴族階級の女性、アルテの話。当時の街の様子や文化などもちゃんと調べて描かれており、興味深く、勉強にもなる。身分や性で人生が制限されていた時代の中、それでも強い意志をもって頑張るアルテを応援したくなります。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

「あれよ星屑」山田参助

- こうの史代『この世界の片隅に』や佐藤秀峰『特攻の島』、おざわゆき『あとかたの街』など、戦後 70 年を迎えて「あの時代」を描く傑作が最近目白押しですが、本作もそれに連なるすばらしい作品だと思います。かつて辰巳ヨシヒロやつげ忠男が描いた世界に通底し、タッチもそれを意識していると推測しますが、やっぱり「今ならではの」作品。斬新なのに懐かしく、悲惨なのに温かい。実は相当下世話でエロティックな場面（3P とか堂々と！）も多いのに品を失わないのは、やっぱりこの絵がすばらしいから。掛け値なく世界レベルだと思います。私はこの人の描く「眉」（特に菊ちゃんの）が好きだなあ……。最初死にそうだった徳さんも、門松のパディ愛（？）でだんだん元気が出てきたようで、菊ちゃんや兄嫁との関係も気になるし、また物語が大きく動きそうな予感がします。

読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員 / 石田 汗太

「アンゴルモア 元寇合戦記」たかぎ七彦

- 細かい部分まで描かれていてそれが漫画のスケールをより大きく感じさせてくれます。戦いの描写も緻密でリアリティがあり、ストーリーも痛快でこの先も楽しみです。

株式会社スマイルアックス・営業大臣 / 岡村光徳

- 歴史に覚えた元寇ってこんな熱くなる話なのナ。神風のことしか知らなかったけどこんななんな。

スタジオフーズ プロデューサー / 小林智之

「いい百鬼夜行」川西ノブヒロ

- 「泣く子はいねがー」と泣いている人に寄り添うなまはげさん、猫カフェで働くねこまた様、好かれ過ぎて困っているカップたち、幸運を呼んでるんだかいけないんだかのザッシー（座敷わらし）、みんないい人、じゃなくて、いい妖怪です。町の人たちもいい人で、この百鬼夜行は、人間と妖怪によって形作られています。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「異世界居酒屋「のぶ」」ヴァージニア二等兵・蟬川夏哉・転

- 毎年食マンは新しいものを入れたい派なのですが、今回は日常のものを非日常にもちこんだことで身近な大好きな食べ物を再確認、そして、日本文化が外国人に最初に受け入れられるには居酒屋っていいなあとおもってしまう。「トリアエズナマ」いいね。ナイス記号なセリフと中身。

スタジオフーズ プロデューサー / 小林智之

「IPPO」えすとえむ

- 若いけど、自分の信念をもつ職人の心意気にダンディーなおじさまに、ちょっと嫌なやつ感のあるライバルにと、カレーに温泉卵と唐揚げをのつけたようなスペシャル感。ストーリーは王道ながらも、靴職人という新しい切り口と魅力的な殿方にととても引き込まれてしまいました。

鳥取県 美術教員 / 佐川由加理

「インヘルノ」マツモトトモ

- ハイスペックスパダリが出来ていく過程…。私たちは今それを見ているのだ…。そんな気持ちになる最新3巻。(昨年投票しているので最新刊の話を。) 激しい恋が、彼を良くも悪くも前へ進ませる。一方の更(ヒロイン)は、彼と恋を守ろうとして、間違えながら進む。3巻ラストのページで、「地獄かよ」って思いました。このまんがのタイトルでした。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「上野さんは不器用」tugeneko

- 上野さん、天才なのにばかとかどんだだけ。さすが有能な科学部部长ということだけあって、発明品が非中学生レベルにもかかわらず、それを使って後輩男子(ばか)にアタックし続けるという乙女思考がたまらんくらい。ギャップ最高。めげずにがんばってほしい。

オリオン書房ノルテ店 / 池本 美和

「兎が二匹」山うた

- 2巻完結と短い作品ですが、素晴らしくまとめられた物語で、究極の“愛”を感じる作品。不老不死で、常に死にたいと願う自殺を図り続ける女と、それでも常に一緒に生きたいと願う青年とのすれ違いの物語。現在から過去、過去から現在そして未来へと紡がれていくストーリー。切なく、涙が溢れます。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 表紙の彼女の表情にドキッとし、ページをめくるたびその表情に心を刺されます。この世界にふたりだけ、という哀しさと甘さ。オトナの正論で割り切ろうとせず、幼いままにその哀しみに向き合おうともがくふたりの姿を、すごく純粋だなあと思いました。

会社員 / 末永龍介

- 誰かを喪うことの悲しみから人は、自らが喪われることでしか逃れられない。そして、自らを喪って誰かを喪った哀しみから逃れられたとしても、違う誰かが同じような哀しみを抱いて涙する。人間の歴史はそんな離別の哀しみによって紡がれてきた。そしてこれからも紡がれ続けていくだろう。それでも人なら、自らを喪うことで、自らが生涯において得た哀しみは捨てられる。もしも自らを喪えなければ、人は繰り返される誰かを喪う哀しみを心に積み上げて、やがてその重みに耐えきれなくなってしまうだろう。不老不死。寿命ある人間なら、誰だって憧れる存在だけれど、なってみて永遠に繰り返される離別に、心を折らないで生き続けられるのかと問われ、大丈夫だと答えられる人はきっと多くはない。永遠に生き続けられるのなら、誰かと出逢う喜びも永遠に繰り返されると言えるだろう。けれども、そんなたくさんの出逢いは、いずれすべてがたくさんの離別へと変わり、新たな哀しみの種へと転じて、心を苛んでいく。不老不死。その牢獄にとらえられた人に幸福への扉は開かれぬのか。そもそも不老不死にとって幸福とは何なのか。そんな問いへの答えを、もしかしたら与えてくれているかもしれない物語が、山うたによる漫画作品『兎が二匹』だ。冒頭、骨董店の2階で19歳の宇佐見咲朗という青年が、女性を泣きながら絞め殺している場面が描かれる。涙と血を流して息絶えた女性に向かって、咲朗は泣き叫ぶ。そこで女性ががばっと起き上がる。稲葉すず。39歳。不老不死の彼女は、まだ子供だったこと、飢饉に襲われた村で口減らしのために殺されて埋められながらも生き返った。以来、江戸時代を経て明治期を過ぎ大正期も超えて現代までずっと生きてきた。日課にしているのが自殺。同居している咲朗に1日1回、殺してもらっていたけれど、何しろ不老不死だからすぐに生き返る。首を絞められても、首を切り離されても生き返ってしまう自分の命にイケリを着けようと、すずは国際的なテロの犯人だと名乗り出て死刑にしろと、それでも生き返ってしまうことから焼かれ灰になったところをコンクリートで固められ、バラバラにされて空から海へと流されることになった。そして1年後、蘇って海岸へと流れ着いたすずは、前に暮らしていた街へと戻って咲朗がその後、どうなったのかを知る。知って涙を流す。突きつけられたのは誰かにとって自分が喪われることの哀しみ。永劫とも言える時間の中で、自分の心を幾度となく苛んできたその感情を、自分から誰かに与えてしまったことにすずは、初めてに近い驚きと、憤りと、そして哀しみを覚えたに違いない。誰かから哀しみを与え続けられることに疲れ、誰かに喜びを与え続ける喜びを忘れてしまった悲劇。不老不死の女性を通してそのことを思い知らされ、人はだからどう生きれば良いのだろうかと思えてくれた物語は、そして過去へと遡って、すずが喪い続けてきた哀しみが描かれ、理不尽な事態によって人の命が散っていったことへの慟哭に溢れる。けれども、そんな慟哭に寄り添ってすずを支え、包み込もうとする大きな体があったことも、改めて示される。ネグレクトされた少年を拾い、食事を与えて世話をしているうちに芽生えた情が、母親のような慈しみから姉のような親しみへと変わり、そして恋人のような関係へと育っていく。すずにとって、かけがえのない存在になっていく。そこで逃げようとしたすずの振る舞いが、1日1回の咲朗による“他殺”という名目の自殺となり、そして冤罪を被っての死刑へとつながり、彼女に激しい後悔をもたらす。400年近く生きていて、もしかしたら初めて感じたかもしれない自分を喪わせる哀しみを噛みしめながら、すずはそこからの生を歩み始める。すずを長く観察して来た科学者の言を受けて抱いた、一縷の望みもこれからのすずの生にとって、大きな糧となるだろう。もしも本当だったら。そして得られたら。不老不死にとって最高の幸福が、そこには待っているとさえ言えそう。もしそうでなくても、自らを喪わせる哀しみを、誰かに抱かせる残酷さを知ったことで、すずのこれからの生には、離別という哀しみに苛まれ、すべてから逃げていたこれまでとは違った、強い力が宿ることになるだろう。出逢いという喜びを多くに与え続け、そして

与えられ続けるために歩いていく。そんな力が。 限りある生を生きる多くの者たちは、読んで離別の哀しみを超えた出逢いの喜びを繋げ続けることが、人間の歴史なのだと思え。永遠の生を生きている者がいたら、読んで今の出逢いを極限の幸福と感じ、それが理不尽に喪われることのない世界を目指して生き続ける。

書評家 / タニグチリウイチ

- 重い内容なのに、思わずクスリと笑ってしまうところもあります。それが少し救われる気がします。大切なものは、大事にしないと、見過ごして時を逃すと、取り返しのつかないことになる、と身につまされます。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

「嘘解きレトリック」都戸利津

- 昭和初期の私立探偵譚にして、特殊能力を持つ少女の成長譚。巻数的にもここで挙げておきたい。

レビュアー / 福井健太

「恨み来、恋、恨み恋。」秋タカ

- 干支がモチーフのキャラ達が織りなすバトルは動きもあり、勢いがあり必見です。魅力的なキャラクターが多いので、読めば必ず誰か好きなキャラができるはずです。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

「A 子さんの恋人」近藤聡乃

- 圧倒的な画力。線がきれいで読んで心地いい。内容も、優柔不断な A 子がふたりの男性の間で揺れる。それが、天然過ぎて ふたりの男性も翻弄される。 という、なんか何もなくて何かあって…こっちも心地いい。

アニメイト 販促課 / 鈴木寛子

「エスケープジャーニー」おげれつたなか

- 高校の時に付き合っていて口喧嘩で衝動的に別れた二人が大学で偶然再会する。友達としては非常に居心地が良いからと遊んでいるうちに元さやに戻るのだけれど、言葉が足りないことや些細なことの積み重ねでまたしても喧嘩してしまうのだが、最終的にはみたび結ばれるのが 1 巻。この 1 巻を読んだとき、ありふれたテーマとは思えないくらい面白いけれど、その反面、ほんとうに二人が和解したように思えなかった。若いからなのか性格なのか、ふたりは決定的に会話が足りない。なぜ相手が暴走したのか、なぜ相手が怒ったのかをお互いに理解しないままなんとなく結ばれたようで、いまひとつ消化不良だと思っていた。けれど最新 2 巻で、その消化不良が効いてくる。真面目な話をしてこなかったことがじわじわボディーブローのようにきいてきて、どんどん追いつめられていく。好きなのにすれ違ったり、お互いのことを思ってるのに傷つけたりして距離が開いていくこの重苦しいどろどろ感がたまらない。

主婦 / 小田真弓

「衛府の七忍」山口貴由

- 七忍が一人ずつ出揃う度、続きが楽しみになる。この先、この主人公達が集まった時、どんな物語が展開されるのか。だから七忍揃うまで、なんとしても続いて欲しいのです。

医師 / 岸本倫太郎

「エリと青葉子 白エリと青エリ 2/ 育む茶室」関根美有

- 関根先生という天才を世間はずっと知るべきだと思います。こんなに短くてこんなにかわいい＆面白い「育む茶室」って何なんだっていう…！

ライター・大学講師 / トミヤマユキコ

「炎炎ノ消防隊」大久保篤

- 少年漫画としては鉄板な感じかな、と思ったのですが、なんと消防士が主役。でもそこは大久保篤ならではのすみません。火を司る能力を持ったキャラがそれを使って消火とか新鮮！しかも、「ラッキースケベられ」最高！キャラがとにかく生き生きしていて、かつサスペンス要素があって伏線たっぷり早く次が読みたいわけです！

舞台女優 / 大倉照結

「応天の門」灰原葉

- チャーミングで、暗さがあって、毎回楽しみ。

大日本印刷 / 佐々木愛

「狼少年は今日も嘘を重ねる」namo

- 最初はサブキャラかと思っていた牡丹がどんどんかわいくなっていて、先の展開がすごく気になる状態に。良いラブコメだと思います。

ライター / 芝田隆広

「お母さんの扉」伊藤理佐

- 伊藤理佐節が効いたパンチある子育て本。

主婦 / 柴 架衣

「岡崎に捧ぐ」山本さほ

- この人の「ノスタルジー」の描き方が最高です。どんなペースでも良いので一生、のんびり読み続けたいようなかわいい作品です。

メガマソ / Migimimi sleep tight / 仙洞田涼平

「オキテネムル」連打一人

- 考えずに見れる読める。そして最近はデジタルでも買ってしまい、知らない間にすごい金額に、、、というわけで今年は買ってはいけないのにポイント買ってしまったマンガを中心にいきますよ。最近では1巻呼んで思わず買ってしまえばもう、面白ってことにしてしまってますが、オキテネムルが2016年の一番最初のそれ

スタジオフーズ プロデューサー / 小林智之

「推しが武道館いってくれたら死ぬ」平尾アウリ

- ドルオタたちがとにかく楽しそうなのがいい。愛情たっぷり夢いっぱい。細かな部分までネタが詰め込んであってとてもいいです。

ライター / 芝田隆広

- アイドル好きにはマスト。そうで無い方にもオススメしたい作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- タイトルが最高に好きです。作者の漫画はシリアス的な短編集しか読んでことがなかったので、こんな素敵なギャグ漫画描くとは思いませんでした。随所にアイドルやそのファンの人達への愛を感じます。アイドルファンの人達の共感がスゴそうだなと思いました。偏見を持っている人達に是非読んで欲しいです。

バンドマン / TA-SHI

- この可愛い絵柄で女子アイドル、そして百合って、最強。笑いとゆるさと、せつなさのほどよい分量が魅力です。ドルヲタあるあるも楽しく、共感ポイントも多数で男子にも女子にもオススメです。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- 岡山県の地下ドルと、その地下ドルを推すヲタたちの物語。基本的には「あるある」に満ちたコミカルな物語なのだが、その中にヲタの悲しいほどに愚かなで真摯で空回る熱狂的な愛情、ほのかな百合、SNS や接触イベントなどのリアルな描写が詰め込まれている。面白いのに笑えない、笑いたいけれど笑ってはいけない、だけど笑うしかない、人を好きになる気持ちは（たとえ一方的でも）（伝わってなくても）（お金や体力や時間と引き換えでも）（いつ会えなくなるかわからない相手でも）（そもそも「会う」わけじゃないんだけど）、人を好きになる気持ちは尊い！！！！

主婦 / 小田真弓

「弟の夫」田亀源五郎

- 「北風と太陽」の太陽のように、マイクは自分（たち）に向けられている好奇の目や素朴な疑問に、笑顔で、けれど真摯に答え続けている。焦点がセクシャルマイノリティにとどまらず、主婦（主夫）や外国人など、多岐にわたっているとこもいい。自分が意識していなかった固定観念や偏見に自発的に気づかせてくれる。何より物語として、人間関係の変化やオチのつけ方など、先の展開が楽しみなのもいい。芸能人も一般学生もアウティング被害で人生を台無しにされている昨今、そろそろ教科書に載せて子供に読ませた方がいい。

主婦 / 小田真弓

「おとなりコンプレックス」野々村朔

- 一見イケメンなあきらちゃん（女）と女装すると美少女にみえる真琴くん（男）の、幼なじみで恋人未満のじれったい恋愛話。あきらちゃんは昔からその外見のせいで女と扱われたのがなく、恋愛にもちょっと奥手。そんなあきらちゃんのがひっそりと好きな真琴くんがいじらしい。早く真琴くんの真意にきづいてあげてくれ～あきらちゃん～!!!

敬文堂書店 商品担当 / 山川美香

「おとむらいさん」大谷紀子

- ある売れない女優が葬儀社の仕事に触れ、そこに関わるうちに人生の最後の最大イベントとどう向かうかを、様々なクライアントとともに物語る作品。一つ一つの葬儀とのあり方が、時に心にしみ、時にほっこりします。人生の終末期に向け、自分の納得するフィナーレを考えたいと思います。ぜひ読んでほしいです！

舞台女優 / 大倉照結

「お前は俺を殺す気か」シギサワカヤ

- タイトル通り、作者が全力で読者を殺しに来ている恐ろしい作品です。こんな環境で死んでみたい。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「思い、思われ、ふり、ふられ」咲坂伊緒

- 少女漫画となめることなかれですね～こんな心理戦（と言っているのかわからないけれど）を高校生がする？！ってくらい、いろいろ思いを巡らせていて感心すらする。由奈ちゃんがかわいい

bar 図書室 店主 / 岡部愛

「海王ダンテ」皆川亮二・泉福朗

- まるで、映画をみているような錯覚に陥りそうな描写とワクワクさせるストーリーが圧巻です。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- 過去の遺産的な、オーパーツのような物が沢山出てきてとても楽しめる作品。スプリガン・KYO と言った過去の作品を彷彿とさせてくれて、これぞ皆川亮二作品！でてるライバルや敵も憎めなさがあるのはよいですね。まだ序盤ですので、これからくるであろう大きな展開に期待が持てます。

デザイナー / 平沼寛史

「ガイコツ書店員本田さん」本田

- もう慣れてしまうほどに、「書店は厳しい」という声の真ん中で仕事をしております。この漫画は表紙を見た時から気になってました。カバーデザインと帯がとても好きです。読み始めたら 2 ページ目で膝が粉碎しました (膝が粉碎 = 共感)。全国のコミック担当が絶望したキンダム事変…。割と最近のネタが多い。これも、これも、……ワカル！！！！そう、書店エッセイの中でも、コミック担当を中心に描かれていることが、同じコミック担当としてとても膝が粉碎なのであります (共感)。ただ、書店のエッセイというのは都会の大きな書店さんの話が多く、地方の小さい書店で働く私は、読んでいるうちにめちゃくちゃ地方の書店について話したくなったのです。井戸端会議でも酒飲みながらでもいいから本田さんに地方書店員について叫びたい…。うちシュリンカーないから！！！！見たこともないから！！！！無くて割と利点あります！！！！あと雑誌コミックの新刊が発売日前に入荷するとか永遠にないから！！！！個人的には取次さんの話が最高に面白かったです (号泣)。1 巻の最後に感動もぶち込んでくれててずいなと思いました。泣きました。大きな書店さんはコミック担当が出版社別に何人かいたりしますが、私は一人です。他のお店のコミック担当さんと話をするようなこともありません。なので、この漫画を読むと、たった今も、本田さんや全国のコミック担当が頑張ってるんだなと思って、たぶん一人じゃないんだなって気がしてきます。書店というおもしろコンテンツをこのままオワコンにしていいいのか！？そんな訳ないだろ！？ホンヤに本買いに行こ！？全国の書店がお待ちしてます！！！！！！！！

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「かくしごと」久米田康治

- 「かくしごと」が、平仮名表記の意味を知り なるほど〜っと。久米田先生の怒涛の如くの台詞回しも、気持ちいい程入っているのですが今回は、なんか素敵な父子のお話。そして、ちょっと謎もある…何度も何度も読み返してしまう漫画です。

アニメイト 販促課 / 鈴木寛子

「かぐや様は告らせたい」赤坂アカ

- 類型化したラブコメ界に新機軸を持ち込み、頭脳戦に根差した洒落なコメディを展開するセンスが素晴らしい。

レビュアー / 福井健太

- 「告白した方が負け」というルールのもとに展開される頭脳戦？のアイデアがすばらしい。

まんたんウェブ副編集長 / 河村成浩

- 頭がよすぎるのも大変だなあと毎回思ってしまう。2 人の妄想かけ引きがたまらなく癖になる。周りのキャラクターも個性的すぎて、主人公たちに負けていない感じがまた良い。ギャグ要素が強いが、時にはシリアスになったりと読んでいて飽きない。最初は、絵が嫌いでふーんって感じでしたが、話が重なるにつれて中毒的に読みたくなりヤキモキします。今後の 2 人の展開を温かく見守りたいです。

ブックエクスプレス / 中村 哲彰

- 最初から両想いという設定の恋愛漫画は多々あるが、関係性を拗らせるだけで、ここまで極上のコメディになるとは。

元書店員 / 齋藤隼

「かげきしょうじょ！！」 齊木久美子

- 宝塚音楽学校がモデルで、神戸にあるという設定の「紅華歌劇音楽学校」に合格・入学した“ジェンヌ予備軍”の少女たちの成長を、照れなく正面から描く群像劇。身長178センチ、強い体幹とダイヤの原石のような天賦の才、かつ周囲からウザがられるほどの天然ぶりが持ち味の主人公・渡辺さらさ（15）が物語をぐいぐい引っ張るが、そのほかの予科（1年生）の女子たち一人ひとりのキャラ立ちもくっきりしていて、分かりやすく深みのあるエピソードの数々が繰り出される。そのハラハラ、ドキドキのストーリー運びが楽しいし、何よりまぶしい。続きが気になって次々とページをめくりたくなる吸引力があります。「ジャンプ改」連載分が単行本2冊にまとまったあと、連載を「メロディ」に移して既刊3巻の現在計5冊。ふだん少女マンガを読まない人にもおすすめの安定・正統派のおもしろさ。

会社員 / 天野賢一

「かなたかける」 高橋しん

- 駅伝というスポーツには全く興味がない私なんですが、読み終わると毎巻爽やかな気持ちと同時に「がんばろう」と思えます。イノセンスを取り戻せるというか。

鉄ばいぶレーベル・代表 / 杉本善徳

「彼女と彼女の猫」 山口つばさ・新海誠

- 基本的に部屋の中にいる作品ながら時間の動き、留まりの豊かさに贅沢さを感じられる画面。

往来堂書店 / 三木雄太

「かりん歩」 柳原望

- 名古屋の喫茶店をめぐる日常話にして『高杉さん家のお弁当』の姉妹篇。プロットと見せ方の巧さが印象に残る。

レビュアー / 福井健太

「 GIVEN 」 キヅナツキ

- すごい。繊細で残酷で、読んだ後叫びたくなるようなざわざわもやもやした気持ちが止まらない。登場人物がみんな癒えていない傷を抱えながら、前に進んだりうつむいて立ち止まったりして生きている。言うべきことが全部物語の中に入っていて、それ以外のことを口にしたら、口にした先からだめになりそうな、壊れやすいぎりぎりのところで成立している美しい物語。それなのにコミカルなところもあるし、何でもない日常もある。完璧。

主婦 / 小田真弓

「吉祥寺だけが住みたい街ですか？」 マキヒロチ

- 一話読み切りの感情移入が難しいところを、街案内する双子のポッチャリ不動産屋が、インパクトありでひきこまれる！ストーリーもゆったりしていて、色々な街も紹介されてるところがよい塩梅。ストーリー

鍼灸師、理学療法士 / 碓氷麻里子

「機動戦士ガンダムサンダーボルト」 太田垣康男・矢立肇・富野由悠季

- スター・ウォーズのローグワンの的な名も無き戦士たちのサイドスト？リーが熱い。ガンダムがマイブームです。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

「機動戦士クロスボーン・ガンダム DUST」長谷川裕一・矢立肇・富野由悠季・宮崎真一

- こういう、世界観の基になる大ネタがある作品をマンガ大賞に推挙するのは正直迷ったのですが、故あって推します。『機動戦士クロスボーン・ガンダム DUST』。『ガンダム』もので、しかも続編です。「ガンダムを知らない人には分からない」というめっちゃくちゃ高いハードルがあるので、こういうマンガは作品としての純度というか、クリエイティブな部分を元ネタに少なからず依拠せざるを得ないのは確かです。——普通は!! しかし今作は普通ではなかったのです。『ガンダム』作品(しかも宇宙世紀です。正史です)としても、SFマンガとしても、男の子をワクワクさせてくれるエネルギーに満ち満ちた作品だったのです。ちょっと『ガンダム』に寄ったところから説明すると、一番最初の『機動戦士ガンダム』から脈々と続く「宇宙世紀」という世界観があります。初代『機動戦士ガンダム』が宇宙世紀〈0079年〉のお話。それから世界が広がって広がって、いま公式の2Dアニメ作品で描かれている「宇宙世紀」という暦で一番先の時代のお話が『機動戦士Vガンダム』の〈0153年〉。(海外製の実写のアレとか小説とドラマCDしか出ていないソレとかは除きました……怒らないで!)そして今作『クロスボーン・ガンダム DUST』の舞台は宇宙世紀〈0168年〉。公式で語られたもっとも未来の話から、さらに15年。だれも見た事のない『ガンダム』の最果ての物語なのです。地球圏を統べていた政府の権威は失墜し、技術は衰退し、ひとびとは貧しい暮らしを強いられる、そんな「俺たちの知っているガンダムの宇宙が、壊れ始めている世界」。そこで生きて、闘う者たちの物語なのです。ガンダム知らない人からするとポカーンかもしれないのですが何が言いたいのかと言いますと、この時代設定だからこそ、深く時代情勢が考えられつつも、自由なイマジネーションで物語が描かれている＝ガンダムというクビキから解き放たれた作品である!これが今作を賞に推挙した大きな理由です。「ガンダム」ではなく、様々なモビルスーツ(おおきなロボットのことです。念のため)の使える部品を寄せ集めて作ったツギハギ機体・通称「アンカー」。そのアンカーを駆る、闘う運送業者の主人公・アッシュが、強い意志をもった少女・レオを助けるところから物語が始まります。どうやらアッシュの人柄や腕っぶりを見込んだ人々の思惑に巻き込まれていきそうな雰囲気漂っているのですが、この壊れていく世界で、誰が何をしようとしているのか。レオとの出会いで、アッシュの生き方がどう変わっていくのか。しるべを外された世界での、ボーイミーツガール的な巨大ロボット冒険活劇。どうですコレ、ワクワクしません?余談ではありますが、今作では「ガンダム」というのは都市伝説のようなものになっていて、ロボットに「ガンダム」みたいな顔を付けるのが強そうだから流行ってる、くらいのものという扱いです。「ガンダム」という名前なんぞ、大した問題ではないという長谷川裕一先生の、この作品における意思表示のように思ってしまうのは考え過ぎですかね?ガンダムを知らなかったって、面白いもんは面白いはず!さあ、このマンガでワクワクしよう!!

アニメイト町田 / 岡ノ部亭 真泰

「リバーズエッジ 大川端探偵社」ひじかた憂峰・たなか亜希夫

- 迷走王ボーダーコンビのアップデート。人の優しさ、距離を置く優しさ、優しさがマイブームです。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

「鬼滅の刃」吾峠呼世晴

- 週刊少年ジャンプ枠……というわけでもないのですが、年にいくつかはめっちゃくちゃ印象に残る新連載が絶対にあります。流石ジャンプといいますか、伊達に日本の少年マンガを背負ってないといいますか。今年もいい感じの新連載が多く始まっていましたが特にヤバいと思ったのがこの作品です。舞台は大正、制服に日本刀、鬼と戦う秘密の部隊……とか、割とよくやられている感じのモチーフであるにはあるのですが、世界観とガチッと噛み合った唯一無二の絵柄もあって、今現在でも週刊少年ジャンプ誌面でどぎつい（誉め言葉）存在感を放っています。マンガの魅力って、主人公に対して「目が離せない」と如何に思わせるかという部分が大分担っていると勝手に思っているのですが、ここの主人公の炭治郎くんは近年まれにみる目が離せなさなのです。まず、このマンガ、敵がかなり強いんですが、炭次郎くん序盤はそんなに強くない。めっちゃくちゃ根性があるって優しくていい子なんですが、経験がないから強くないし、そんなに主人公主人公したスーパーパワーもない。⇒この子大丈夫なの？？となります。必然的に。次に、炭次郎くんは妹の禰豆子ちゃんと一緒に旅をしているのですが、この禰豆子ちゃんがちょいと困り者で、鬼です。正確には鬼になりかけというポジションなのですが、鬼は人間に仇なす不倶戴天の仇敵。そんな世界にあって妹が鬼です。炭次郎がピンチのときはキックで戦ったりするのですが、鬼をやっつける組織にいる炭次郎くんが、身内に鬼がいるなんてことがバレたら一大事です。普段はすこし小さくなって箱にしまわれて炭次郎くんが背負って歩いている（事実です）から見つかりづらいのですが、そんなタブーを隠しながら行動しているということが、またお話をスリリングにしています。敵は強くてグロいし、主人公たちが歩いてるだけでドキドキするし、けっこう心臓に負担掛ける系マンガではあるのですが「ここでやる!？」みたいなタイミングでたまに入るギャグとか、愚直すぎてむしろ面白い炭次郎の性格とかでほっこり成分が補給できるので楽しく読める作品です。異能系バトルマンガでない、キャラクターとドラマで魅せるどこか懐かしくもニューエイジなジャンプ漫画でございます。

アニメイト町田 / 岡ノ部亭 真泰

「休日ジャンクション 真造圭伍短編集」真造圭伍

- 日常の何でもない一場面を切り取るのがとても巧みな作家さんだと思います。楽しいことばかりじゃないけれど、楽しくないわけじゃない。美しいことばかりじゃないけれど、美しくないわけじゃない。後から思い出してもとてもくだらないことなのに、なぜか忘れられない。それらはとてもリアルで、漫画を通して別の人の人生を追体験しているようです。

図書館司書 / 堀江千秋

「虚構推理」片瀬茶柴・城平京

- もともと小説のコミカライズだが、新人にしては画力がすごく、話に引き込まれる。昨年も投票したが、今年も投票する。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

- 鉄骨を持った顔なし巨乳アイドル“鋼人七瀬”とは？鵜と人魚の能力を持つ主人公と知恵の神であるロリータヒロインという多すぎる要素を詰め込んだにもかかわらず淡々と進む序章。「虚構推理」というタイトルが当てはまる5巻以降の怒濤の展開は、ミステリーの漫画化作品としては稀に見る秀逸さ。

弁護士 / 長島・大野・常松法律事務所 / 三村 量一

「桐谷さんちょっそれ食うんすか！？」ぽんとごたんだ

- 食マンガ数あれど、最初からゲテモノ、しかもJKところどころの勘違いギャグもテンポよく楽しい。

コミコミスタジオ町田 店長 / 天野能宏

「銀平飯科帳」河合単

- ラーメンをしない河合単。いやいやいいでしょう。酒粕カルボナーラつくったよ。コショウ飯つくったよ。うまかったよ。おもしろいよ。

スタジオフーズ プロデューサー / 小林智之

「銀狼ブラッドボーン」長田竜和・雪山しめじ

- 主人公が70歳のじじいです。とにかく強くてカッコイイじじいです！強すぎるじじいの戦いを見て欲しい！！

主婦 / 紺野 泉

- 蘇った吸血鬼に対抗すべく、かつての英雄が再び戦いの場に?? かつての英雄＝すでに70歳のジジイですが。この手のジジイキャラってのは、ジジイのくせに化け物じみた人間だったりします。ハンスも体力的には化け物というか、若いもののほうが頼りないくらいです。でも老眼だし腰痛いし筋肉痛だしで、立派なジジイです。で、一体何が言いたいかということ……男は70過ぎてから！

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「空母いぶき」かわぐちかいじ

- 拡大する一方のお隣の国の軍事力。フィクションを通して考えてみるのもいいかもしれません。作品の中では軍人の技量に差があるということになっていますが、現実ではそれもいつまで続くやら。正直言うと、個人的にはかわぐちかいじ作品は、歴史ものよりはこっちのほうが安心して読めたりします。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 沈黙の艦隊→ジパング→空母いぶき。しっかりとした考証をふまえたミリオタにはたまらない熱さ。この流れを一晚で読むのがマイブームです。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

「クジラの子らは砂上に歌う」梅田阿比

- 梅田阿比が2013年が描き継いでいる漫画『クジラの子らは砂上に歌う』が2016年4月に舞台化された。原作を知っているなら、あのどこまでも続く砂の海が広がる世界が舞台となっているファンタジーであり、人類の進歩と進化を問うようなSF的な雰囲気も持った作品を、どうやれば舞台化できるんだろう？ といった訝りが浮かんだ。砂の海が広がる世界で、泥クジラという巨大な船、というよりもはやひとつの島といえるくらいの広大な地に、何百人かの人間が住んでいて日々を淡々と生きている。一部に情念動（サイミア）と呼ばれる一種の超能力を操れる印持ちがいて、一方にそうした印を持たない普通の人間もいるという構成。そしてサイミア持ちは強いけれども短命で、印のない普通の人間から出た首長が全体を統括する形で運営されていた。周囲に人が暮らしている形跡はなく、誰かが尋ねてくることもない中で、自給自足で生きていた泥クジラの住人たち。そのひとりで、チャクロという名の少年は記録係を仰せつかって、泥クジラで起こることを日々、書きためることに全力を傾けていた。そんな平穏で、別の意味では停滞の中を衰退に向かっていた泥クジラに異変が起こる。久々に見つかった島にいくと、そこにひとりの少女が倒れていた。泥クジラへと連れ帰って名を聞いても分からず、とりあえずリコスとつけたその少女を追うようにして、泥クジラに未曾有の危機が訪れる。見渡す限りが砂の海という物語の舞台、そして山のように森のようにもなりなかつて生きているような雰囲気すらある泥クジラという生活の場所を、固定されたステージでどういう装置を組んで再現するのか、どういう見せ方をするのか。そんなステージ上にあったのは、奥にやや盛り上がった斜面で、そこを砂のような土地に見せかけつつ、ある時はそこを泥クジラの上であり、ある時は船で渡る砂の海であり、ある時は泥クジラの中であり敵の船の中でありといったさまざまな場所に見立て、そこにさまざまな登場人物たちを的確に出し入れして、そのシーンが繰り広げられているんだと感じさせた。原作を知っている人には、ここはあの場面をその登場人物たちによってそこで描いているんだなあと分かっただろう。そうでない人も、この巧みな場面の繋ぎ方によってしっかりと、ストーリーを追いながら物語について全身に

感じていただろう。それは、日常が変貌する驚きであり、最愛が奪われる悲痛であり、未来を閉ざされる絶望といったもの。けれども、自分たちの運命を自分たちで掴み、自分たちが生きた証を残そうとあがく姿にああそうだ、立ち止まっていたはダメなんだと教えられた、そんな舞台になっていた。漫画に描かれたそんな流れが、しっかりと舞台上で演じられていた。伝わってきた。 そんな舞台上で描かれたのは、原作漫画では第4巻の帝国を相手に泥クジラの人々が、生き延びるために戦いを挑んで、運命を自分たちの手に取りもどすまで。そして漫画は第5巻、第6巻と積み重ねらるなかで、泥クジラが新しい出会いを経て、スィデラシア連合王国にあるアモンロギア領をめざすことになった、その旅程を描くシリーズへと進んでいる。2016年春に出た『クジラの子らは砂上に歌う 7』（秋田書店）では、泥クジラの上では凄絶な争いはなく、人の命も失われない平穏な日々が描かれる。けれども、その成り立ちに何があったのか、そして未だ明らかにされていない泥クジラの深部に眠る秘密が浮かび上がり、その強力すぎるサイミアのせいで「悪霊（デモナス）」と呼ばれるオウニの力の謎にも話が及んで、ちょっとした波乱を予感させる。 第7巻には別に1編、過去に描かれた「もうひとつの記録 光の隣 壁の空」が収録されている。父王が死に、後を継いだ新王の不興をかって長身の女の道化が牢獄に押し込められる。そこには、父王に道化として仕えながらもやはり、無実の罪を着せられ獄に押し込められて病死した道化女に王が産ませた少年がひとり、父王殺しの容疑をかけられ、捕らえられていた。長身では横になるのも難しく、膝を立て背中を壁につけた姿で、道化女は少年を抱えるようにして獄中での生活を始めた。狭い窓から空を身ながら少年と語り合い、何年もの日々を過ごした果てに訪れるものは？ 人の猜疑心が招く悲劇を描きながらも、出会いが心の浄化をもたらす可能性も示される。掌編ながらも深くて重たい物語だ。 続く2016年冬に出た『クジラの子らは砂上に歌う8』で、泥クジラの住人たちは大切な仲間をまたひとり失いながらも、目指すアンモロギア領へと近づいていく。そこでの反発、さらには執念を見せるように追ってくる帝国の陰もあって、今までにない激しい展開も予想されるけれど、そんなクライマックスへと向かうに当たって改めて、かつてない世界を描き、そこに生きる苦しみと喜びを背負って生きる者たちの姿を描いた物語を読み込んでおこう。アニメーション化もあってブーム化必至の作品を、先取りできるのも今のうちだ。

書評家 / タニグチリウイチ

「クダンノゴトシ」渡辺潤

- 今年は少年漫画を全く選んでない、、気持ち悪いのばかりね。と言われても仕方がない。食べ物と気持ち悪いモノばかり選んでるこの人生観をまず変えたい。ただ。おもしろいねー。この手のジャンルは怖いもの見たさどころでないね。みよう。

スタジオフーズ プロデューサー / 小林智之

「グランドステーション」池田邦彦

- 職業人の心を描く名手が"鉄道公安員"のハードな物語を紡いだ快作。時代ミステリとしても秀逸だ。

レビュアー / 福井健太

「ぐらんぶる」吉岡公威・井上堅二

- ギャグマンガ不遇の時代に、下ネタ含めるギャグ全開で戦っているのが見事。

まんたんウェブ副編集長 / 河村成浩

- 「もう一度大学生活をしたい！」そう思わずにはいられない作品です。 バカ騒ぎな場面ばかりですが、ダイビングへの姿勢はしっかりと芯を持っていて、グッとくるところもあったり。もう、本当に羨ましい男達だ……！

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

「クロエの流儀」今井大輔

- 日常見かける言ってしまいたいシチュエーションをバッサバッサと切り倒していくクロエの時代劇口調にスツキリ。現実にこんなことがあったらたいへんかもしれないけど、クロエみたいに言える自分になりたいなあなんて思いつきながら読んでます。クロエが絶対正しいわけではないけれど、いろいろ考えることができる漫画です。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

「決してマネしないでください。」蛇蔵

- 「今あなたが誰かに薦めたいマンガは？」というのがマンガ大賞の主旨なわけですが、2016 年、最も何度も読み返し、最も人に薦め、最も「もうこれ好きだわぁ・・・」とため息ついたマンガがコレなので、ぜひぜひ読んでみてほしいのです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

「ゲレクシス」古谷実

- 「新境地」。と、言って差し支えないのではないだろうか。いや、毎作新境地なんだけど。毎作毎作、驚きを与える古谷実さん。僕は「漫画作品は完結して初めて評価めいたことをできる」と思っているクチだけど、これだけ毎回、裏切りと驚きと安堵を与える漫画家さんは稀有だと思う。「一体この先どうなるのだろう」、と思わせるだけのマンガは数多い。しかし、古谷実さんはそれだけではない。読者に対しての「挑戦」を感じる。企みの深みにもっとはまりたい。

音楽家 / 谷澤智文

「こいいじ」志村貴子

- 登場人物のほとんどが一方通行の想いを抱えているというストーリーですが、中でも主人公まめちゃんの一途さ・いじらしさに「がんばれ～！！あきらめるな～！！」と思わず声援を送りたくなります。男って勝手よね、まめちゃん…早く幸せになってくれ！

ホビー会社勤務 / 畑中 瀬路奈

- 大人になったら、いい年になったら、結婚したら、離婚したら、子供ができたら。もう恋なんて縁がないものだと思ってた。そんなことないんだなあ。大人だから、長く生きてきたからこそ、複雑にいろんな思いが、関係が交差する。幾つになっても、切ないことに変わりはない。大人のための恋愛漫画。

主婦 / 安田ママ

「恋は雨上がりのように」眉月じゅん

- 相変わらず面白いです。今年も一押しです。ちょっとマンガ的に理想的すぎて甘すぎる気もしてきたのに、それが心地よいんです。高校生、眩しい！！

メガマソ / Migimimi sleep tight / 仙洞田涼平

- ケガで短距離ランナーを諦めて鬱々としていた女子高生と、うだつが上がらないファミレス店長 45 歳との淡い恋。雨の描写が暗いだけでなく、ときに楽しみにも思えそうな、ときに切なくなりそうな、そんな降り方になったりもします。ちょっとだけ進んできた最新刊。「店長はいつも、雨の日の私を助けてくれるんですね。」というセリフはときめきます。恋を忘れたおじさんにも安心して読めます。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

「高台家の人々」森本梢子

- 主人公の木絵ちゃんのストレートなかわいさに笑ったり、ジワっとしたり。家族揃って楽しめてしまう漫画です。みんなで読んでみんなで笑って読んだ感想でまた笑う。みんなにすすめてできる漫画だと思います。読んだ後に笑顔になれる漫画。大好きです。

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

「鴻池剛と猫のぼんたニャアアアン！」 鴻池剛

- この“ゆるさ”でこの存在感はすごい！超絶日記ネタなので事実と感想を綴っただけのものと侮る無かれ、読み応えがあります。多分、自分が猫飼ったらと思うと、人事ではない感情が何処かにあるからでしょうか。また2巻では、また毛色の違う猫も出てくるので空きません。最近猫がはやっているみたいなのでお気に入りの方も多いかと思います。

デザイナー / 佐藤ユウ

「コオリオニ」 梶本レイカ

- 渾身の上下巻！これを読まずして2016年は終われない。

作家 / 海猫沢めろん

- 鬼ハードボイルド、激ノワール。これ、北野武監督で映画化してくんないか。

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部店舗開発課マネージャー / 大山敏樹

「木陰くんは魔女。」 小森羊仔

- ちょっと強気でちゃっかりした女の子と、植物っぽい穏やかな男の子のラブストーリー。とにかく絵がかわいいんです。男の子なだけで魔女という設定もおもしろい。3巻で完結なのもちょうどいい。ほんわかした話と思いきや、読み進むうちに、次第に驚愕の事実が明かされるストーリー展開に唸られます。

お菓子研究家 / 福田里香

「こころ オブ・ザ・デッド」 夏目漱石・架神恭介・目黒三吉

- 何と言っても「夏目漱石・著」である。「こころ」から始まる漱石の各作品をまぜこぜにしてゾンビマンガにしてしまうとは、翻案にしても程がある。最高です。奇作。

ブロガー / サイトウマサトク

「孤食ロボット」 岩岡ヒサエ

- 飲食店でポイントが貯まるともらえる「孤食ロボット」。あれを食べろ、これを食べると、世話をやく。“おかん”みたいなロボットをもらっちゃった人の日常がオムニバスで描かれている作品です。だいたい外食ばかりになっているのは何かしら理由があって、寂しさやトラブルやつまづきや、何かしらある。ロボットも必ずしも歓迎されなくて、冷たく当たられたりもするわけですが、少しずつ人間関係ができていく様子もグッとくる。くすくす笑いとホロリのバランスも抜群。ひとりぐらしを始めたばかりの友だちにプレゼントしたい一冊。

馬場企画 / 島影真奈美

- 小さなロボットが食生活へのアドバイスをする姿がかいがかいしくて癖になるマンガ。岩岡ヒサエ先生は、個人的には全部「当たり」なマンガ家だけど、これはそのなかでも大当たり。今までの一番だった『土星マンション』に勝るとも劣らない感じ。

鳥取県立日野高校司書 / 野間勤

「ご注文はうさぎですか？」 Koi

- いつかはこんな素敵な萌え四コマがマンガ大賞を取る日が…。趣味全開の一冊ですが、まんが王的には実績も申し分無し！アニメ第二期も終わり、若干落ち着いた部数になるかと思いきや前巻販売数を予約段階で越えてしまう快挙！年間販売数もトータルでは一位を獲得し、多くのファンに支えられています。ギャグと可愛さの融合…、これが萌え四コマ漫画だ！

TORICO まんが王 通販部 / 日吉 雄

「ごほうびごはん」こもとも子

- ごはん系の中でもキャラクターの世界観がしっかりしていて面白く読めます。主人公が出てこなくても話が回るのは凄いです。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「こみっくがーるず」はんざわかおり

- マンガ家を目指すかおす先生の奮闘記。ともかくダメダメドジッ娘のかおす先生のいっぱいいっぱいところがオモロ可愛く、その喜怒哀楽豊かな表情は見ているだけで応援したくなります。かおす先生と同じ寮に住むマンガ仲間も個性豊かですが、特にTL作家のるっきーの艶やかな見た目と裏腹に恥ずかしがりやなところがまたモエです。個性派ヒロインが揃うきららの中でも暖かく見守りたくなる、応援したくなる本作、ぜひ読んでみてください。楽しい気分になること間違いなしです！

COMIC ZIN 商業誌部門責任者 / 塚本浩司

「紺田照の合法レシピ」馬田イスケ

- 登場するキャラクターの魅力と、キャラクターに沿った丁寧で意外にも細やかなお話作り、そして絶妙すぎるギャグシーンのコンボが素晴らしいです。言葉少なで凶悪顔の主人公・紺田照の表情筋は毎回ピクリとも動かないのに、彼の人となりを知るにつれ、だんだん表情豊かに見えてくるのがとても不思議。これまでのグルメ漫画には見られなかった斬新さで、純粋に驚きました。単なる「グルメ漫画」として括ってしまうには、勿体無い漫画だと感じます。もちろん、ちゃんとグルメ漫画としての「料理が美味しそうに描かれている」「レシピに工夫がある」などと言った部分も十二分にクリア。本当に真似したいと思える料理の美味しうさに、毎回お腹を鳴らしてしまう！馬田先生のネーミングセンスも意外な見どころです。紺田照（"こんだて"）を始めとする登場人物はもちろんのこと、組の名前や街角の店名、調味料などの商品名に至るまで、ありとあらゆるヤクザっぽいネーミングの物体がちりばめられており、不意打ちで笑わせてきます。人生における本当の幸せ、生きることの喜びとは何か……合間にチラつくヒューマンドラマが良いアクセントとなり、紺田照の作る料理を通して、つついそんなことまで考えてしまいます。飽きることの無い、味わい深さのある漫画です。

明正堂書店アトレ上野店 / 荒木和美

「囀る鳥は羽ばたかない」ヨネダコウ

- BL 作品。読者の9割以上を女子が占める（であろうと容易に推察される）ジャンル・BL の作品もやっぱりおもしろいです。ヤクザもので変態で純愛という切なくも美しい、これは奇跡の物語。

お菓子研究家 / 福田里香

「悟りパパ」澤江ポンプ

- 夫婦と息子3人の、どこにでもある家庭の日常漫画。ただひとつ違うのは、パパが悟りを開いた仏様だということ。「仏滅はR指定」「生かされている」などの名言や、つついすつと笑ってしまうエピソードあり、疲れた心に染み入るありがたーい作品。ああ、「ピカー！」して欲しい。

主婦 / 赤坂真実

- 脱サラして専業主夫、とてもやさしくて、悟っているパパと、そんなパパが大好きな一人息子の梵くんと、働き者で二人を見守るママ。家族の日常をほのぼのと描いたコメディです。内容はコメディですが、私にとっては癒されるとともに、出会えたことに両手を合わせてお礼が言いたくなるような作品です。「仏滅は悟りの力が落ちる」とか「仏の顔と無料のピカーは三度まで」など、笑える話もありますが、慈悲深い振る舞いと、煩惱だらけの私の核心を突いてくるようなパパの言葉に、惚れてしまいますよ。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

「淋しいのはアンタだけじゃない」吉本浩二

- 一番魅かれたルポタージュ漫画。「難聴」という表現が難しい課題にあえて立ち向かう吉本先生の姿勢に感服。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

「さびしすぎてレズ風俗に行きましたレポ」永田カビ

- こういう心を剥き出しにしたマンガの読んでてヒリヒリする感覚が本当に大好き。「こう生きることしかできないからこう生きてるんだ！」って姿に勇気をもらってます。突き詰めた自己分析がこうして芸に昇華されるのを見ると、ああマンガって凄い表現だなあとしみじみ感じます。

会社員 / 末永龍介

- タイトルから受ける印象に反し（？）実に真摯な一種の闘病記。生きづらく、心を開けず、自分を大事にできず、これだけの葛藤と混乱を抱えながらも、自分のこじれた心と泥沼のあがきをクッキリ面白く描き出してみせる技量とセンスに感服。ラストに希望は見えるが、続刊「一人交換日記」（小学館）を読むと、まだまだ道半ば。それでも痛い自分と向き合う作者を応援したい。

朝日新聞記者 / 小原篤

「ザ・ファブル」南勝久

- 本当に本当に面白いです！ヤンキーとかヤクザとか殺し屋とかそういうのを読まない漫画読みの方にも本当に読んでもらいたい作品です。とにかく主人公がかっこいいし、声出して笑っちゃうくらい面白い！！

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 主人公のキャラクター造詣がすばらしすぎる！誰よりも強いので焦る必要がない、そして社会性が著しく欠如している、という理由から、死ぬか生きるかの場面でも妙にのんびりムードなのがたまらない。そして圧倒的な強さで敵を倒す、というカタルシスも毎回ある。8巻なので最後にぜひ！

漫画ライター / 門倉紫麻

「さよなら私のクラマー」新川直司

- 女子サッカーに未来はあるか。重い問いを最初からぶつけられて私は少し動揺した。なぜならそれは、私も作品を読みながらうっすら考えていたことだったからだ。前作、『四月は君の嘘』とは全く違った作風の本作は、才能ある女子のサッカー選手が才能のあるがゆえに仲間から孤立し、その才能ゆえに新しい仲間をみつけて未来を切り開こうとしていくマンガだ。女子サッカーに未来はあるか。私はあると信じたいし、その可能性をこのマンガで見てみたいと心から思う。

敬文堂書店 商品担当 / 山川美香

「さらば、佳き日」茜田千

- 絵が綺麗で、引き込まれるストーリー。家の本棚に置いておきたい！

漫画全巻ドットコム代表 / 安藤拓郎

「さわらせてっ！あみかさん」トフ子

- ページをめくるたびに自分の性癖を暴かれるような気がしました。とにかくあみかさんに“絡む”キャラのその肉に対するこだわりが、まるで自分を見ているようで、わかるわかると共感しながら、声を出して笑っていました。たぶたぶしたくなる肉へのこだわり、同志ならわかっていただけるハズです！

COMIC ZIN 商業誌部門責任者 / 塚本浩司

「さんかく窓の外側は夜」ヤマシタトモコ

- 理解出来ないものを見せられる怖さがあるゾッとします。こわいもの好きな人にはぜひ読んで欲しい。

主婦 / 紺野 泉

「残響」高橋ツトム

- 久しぶりに暗い話！

大日本印刷 / 佐々木愛

「34 歳無職さん」いけだたかし

- 立ち止まる時間、ゆっくりする時間、考える時間。それがいつでどれぐらいかはわからないけれど、人それぞれに必要な時間というのがあるのだろうなあと。そんなように思います。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「傘寿まり子」おざわゆき

- 80 歳のおばあちゃんの物語なのに、とっても青春してます。高齢化社会の問題を真っ正面に描いている部分もあり、正直読んでいてしんどいシーンもありますが、まりこさんのかわいらしさ（おばあちゃんなのに！）に救われます。この年齢だからこそ、こんなに魅力的。まりこさんの冒険から目が離せません。是非、是非！まりこさんより年下の人みんなに読んでもらいたいです！かなしいことはたくさんあるかもしれないけど、でもがんばれるかも、なんて思わせてくれる優しい作品です。

会社員 / 宇田川 結衣子

- 三世代同居しつつも孤独な老後、次々といなくなってゆく同世代など、高齢者特有の実態や社会問題が背景に見えつつも、弱ることなく新たに人生を切り開こうとするまり子さんの姿が印象的で勇気づけられました。傘寿ということで漫画の主人公の枠や、漫画そのものの可能性もまた広がったように感じられます。まだ一巻、物語は始まったばかりですが、いまから注目したい作品です。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

- ヒロインが 80 歳。それだけでもう、どんなマンガか気になって読んでみたいと思いませんか？だれもが避けては通れない「老い」という道に待っている絶望と希望。家出、ネカフェ生活、続けてきた仕事と向き合うこと、捨て猫との暮らし、手に入れた恋・・・80 歳のまり子先生が選んでいく道。その道に待っている大冒険から目が離せません。読んでいて、とにかくドキドキするマンガです。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

「G のサムライ」田中圭一

- あまりにもバカバカしく下衆で下衆で笑うしかない。おなじ男としていてえ！？とうっかり股間を守りそうになる部分もあるところもなんだか男としていい、そんな 1 冊。男子はみんな本棚に並べていただきたい。

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川元良

「SHIORI EXPERIENCE ジミなわたしとヘンなおじさん」長田悠幸・町田一八

- 音、音楽の表現がカッコ良く、創作の苦しみと楽しみの物語を丁寧に進めている感じが素敵な作品ですが、色々と展開が盛り上がっています！このタイミングで是非推したいです。

文教堂書店浜松町店コミック担当 / 金田健太郎

- いわゆる少年漫画“らしい”王道のマンガです。学園モノに寄ったファンタジーとしては週刊の少年誌で乗っっているような読み心地ですが、そうではない、ならではの自由な設定が多い作品です。と言うのも、主人公は青年以上の女先生だし、相方で出てくるのはモジャモジャのジミヘンだしで、よい意味で設定に自由があるのです（というか単純にモチーフの対象年齢が高い）。少年漫画好きの30年代層以上の方達に一度呼んでいただきたい作品です。

デザイナー / 佐藤ユウ

- 楽器の描写がカッコイイです。

鉄ばいぶレーベル・代表 / 杉本善徳

「地獄のガールフレンド」鳥飼茜

- ネームの面白さが抜群！家族でも恋人でもない単なる「同居人」だからこそ話せることがある、その距離感がリアルだし、心地いい。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

「疾風の勇人」大和田秀樹

- 戦後の総理大臣としては吉田茂、田中角栄は小説やドラマでもよく描かれてきたが、まさか「所得倍増論」を説いた池田勇人元総理大臣の話が半世紀経って描かれるとは。作中では総理大臣までの道のりには、まだ距離がありそうだが、現時点でも疾風怒涛の人生が描かれている。切れ者で愛情深く、豪放磊落。我々の知らなかった魅力的な池田勇人がそこにいる。

(有) 馬場企画 ライター／編集者 / 松浦達也

「しまなみ誰そ彼」鎌谷悠希

- 夏の尾道を舞台に描かれる生と性と青春の物語。主人公の男子高校生たすくくんが密かに想いを寄せるのは、男子バレーボールの椿くん。とあるきっかけで、自分の性志向がクラスメイトに知られたのでは、と怯え、自殺を考える彼の前に「誰かさん」と呼ばれる謎めいた女性が現れて…。画面構成のマンガ的な楽しさだけでなく、時折挟み込まれる装飾的なイラストが、見た目も美しく、読み方にリズムを与えてくれます。また、心理描写もケレン味が利いていて、登場人物の心情を不足なく伝えてくれます。片想ってこんな感じだったな、と誰もがきっと間違いなく共感します。連載開始は、セクシュアルマイノリティの諸問題に大きな注目が集まった2015年。今こそ多くの人に読まれて欲しいし、また読まれ得るだけの力を持った作品だと思います。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

「灼熱カバディ」武蔵野創

- 「カバディ漫画」って響きだけで反則。カバディと言われるとよくギャグ漫画でネタにされたりはしますが、ガチでカバディをやる作品って今までに見たことがなく、鮮烈でした！意外さと共に展開は王道スポ根。読んだその日に今年はこれだ！と思いました。

事務員 / 工藤圭

- カバディなんてネタだろう。そんなことを考えて本書を手にとると、火傷する。カバディ自体の魅力もさることながら、マイナースポーツで頂点を目指す個性的なキャラクター達の熱さが魅力的。細部にまでこだわった試合中の表現が素晴らしい。カバディの魅力を余すことなく伝えようという作者の愛を感じる。カバディを題材にした漫画の中でも1、2を争う出色の出来。

弁護士 / 長島・大野・常松法律事務所 / 三村 量一

「社畜と幽霊」 日日ねるこ

- 日々残業に追われる主人公と、その主人公にイタズラをしてかまってもらおうとするが相手にされない見た目はホラーだが、何故かかわいく感じる幽霊の話。内容は完全にギャグ。2016年のほっこり大賞をあげたい。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

「銃座のウルナ」 伊図透

- 作家推しです（キッパリ）。作り込まれた世界観、設定の中での人間劇。この方の描く表情が好きですが、この作品は設定がキャッチーなのか、とても派手なかんじがする。引き込まれます。主人公の真面目さが今後どう作用していくのか、ハラハラして次巻を待ってます。

WEB デザイナー / 河本 智芳

- がっつりした実力派。骨太で読みごたえがあってカッコいい。

ライター / 芝田隆広

「終電ちゃん」 藤本正二

- 私も何度かぎゅうぎゅう詰め終電に乗ったことがあるけれど、そうか、あれは終電ちゃんが詰め込んでたのか。でも私の乗ってた終電には、ちょっといい話もなかったし、ましてやラブロマンス的な話もなかった。終電に乗ったことのある人は「うん、うん」と頷き、乗ったことのない人は一度乗ってみたいと思う……かもしれませんが、乗らないに越したことはないですよ。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 1巻の表紙は、いつも通勤に使っている中央線高尾行き！終電には、「終電ちゃん」という女の子の妖精(?)がいて、ときに厳しく（「オラ急げ急げ！早く乗るんだ！！」）、でもちょっと優しく、乗客に接してくれます。残業の帰りの中央線で読み始めたのも何かの縁。思わずぐっと来てしまいました。運転士にも駅員にも、終電を巡るドラマがある、ということを再認識。毎日の通勤・通学、終電間際までの残業の癒しとして、手に取ってもらいたい作品です。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

「重版出来！」 松田奈緒子

- とにかく熱い！！マンガ好きならば手に汗握って読まずにはいられない！ハズ！

ホビー会社勤務 / 畑中 瀬路奈

「重版未定」 川崎昌平

- おそらく企画書や台割の余白に退屈しのぎに書かれた落書きから生まれたのだろう。シンプル過ぎる線で描かれたキャラたちが、生々しい弱小出版社の本音をダダ漏れし、日々営々と編集作業に精を出す。何かをしているような、何もしていないような、編集者という職業の持つ本質的な空虚さを表出しているような気がしないでもない。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「取水塔」粟岳高弘

■ これは凄い。とても凄い。とてつもなく凄い。 粟岳高弘の『取水塔』（駒草出版）は、いつもの如くにぬぼぼんとした顔立ちやスタイルを持った女の子たちが登場しては、セーラー服だったりスクール水着だったり裸だったりになって、歩いたり走ったり泳いだりする姿を存分に味わえる漫画になっている。けれども、そこに描かれているのは、とてつもなく遠大な時間を経て実現した、異星人と地球人との関係。つまりはコンタクトの物語。SFとして古今の東西で描かれたテーマを、ぬぼぼんとした画風の中にきっちりと表現してみせた、粟岳高弘ならではの作品になっている。冒頭、海岸縁に広がる地帯に散在する、謎めいた物体が登場する。グニグニとしてアメフラシのような生物にも見えるそれらだけれど、女の子たちが容器に集めると集まって大きくなってぬめぬめと動く。本当に生物なのか。別の何かか。そんなエピソードをプロローグにして紡がれていく物語の中で、それらの正体がだんだんと見えて来て、女の子たちの血筋的に受け継がれた力と、与えられた使命のようなものも分かって来る。そして、異種生命体との交流があり企みが暴かれ、グッと宇宙が近づいて来るストーリーが繰り広げられるけれど、ここで面白いのは、そうした人類史にも残るようなプロセスに、大人たちとか政治家とか、軍隊とか正義の味方といったものを表向きには関わらせないこと。近隣に暮らしている女子高生たちをメインに、というよりほとんどの彼女たちに全面的に頼らせ、関連する一族の大人たちは、女の子たちがやろうとしていること、起こしてしまったことのバックアップに回らせて、あまり表に出さない。舞台となっている場所も、静岡県は菊川とか掛川とか牧ノ原地あたりを一体とした東遠地域を中心にした地域。そして背景も、遠州灘が広がる海岸と、茶畑が続く平地とそして小高い山くらいに絞ってあって、住宅街とか商店街とか、駅とか役所とかショッピングモールといったものは描かれない。だから読んでいて、どこことなく箱庭的な雰囲気を感じられる。ぬぼぼんとした絵柄と相まって、のほほんとした日常がつづられる。けれども、そうやって淡々と紡がれていく展開には、とてつもなく壮大にして深淵な接触の物語が込められている。海岸からちょっとだけ離れた海の中に立つ取水塔があり、そこから伸びるように字面の下を通して続く通路があり、くぐって入り込むと得体の知れない土塊があって、だんだんと集まりやがて動き出してそして言葉も解するようになっていく。謎めく物体との接触から、それらの目覚めを経てクライマックスへと向かっていく展開には、とてつもなく壮大にして深淵な接触の物語が込められている。それは文字通りに宇宙的なスケールを持ったのだけれど、ハリウッド映画にあるようなスペクタクルなシーンはほとんど描かれない。臨む高草山からのビームのような攻撃も散発的で、苛烈なサバイバルといった雰囲気はない。日常にちょっとだけ不思議が混じった光景の中を、淡々と進んでいくストーリーの上で、少女たちや少年たちが自分の力で謎に迫り、秘密を解き、問題を乗り越えていく姿を眺めつつ、いったい何が起こっているんだろう？ といったことをじわじわと感じ、噛みしめるようにしていって読んでいける。背後で社会がどう動いているかも含めて想像する楽しみもある。広がりというよりも、奥行きを持った作品だと言える。同じ作者の単行本『いない時に来る列車』の表題作は、滅び去ったような世界で切り取られた断片から、追い詰められた今を確認しつつ、そこから未来へと可能性を探っていくような話になっていた。単行本の大半を占めていた「斥力構体」のシリーズは、「取水塔」と同じ東遠あたりを思わせる地域を舞台にしながら、現実が異次元と背中合わせになって、不思議が日常となった世界に生きる少女や少年たちが描かれていた。『取水塔』の場合は、もっと現実に近い近づけつつ、そこに重なった非日常を描いて少女たちに難題を突きつけ、それを乗り越えていく楽しみを感じさせる物語になっている。噛みしめるように味わいながら、だんだんと進んでいくコンタクトと、その先に起こるかもしれない事態にワクワクできる。やがて訪れた結末で、自分なら何を選ぶのか？ といった思いにとらわれるはずだ。これだけの構想を物語にして描き、同人誌で淡々と描き続けて、これだけのボリュームをもった作品にした作者の努力と根性に、惜しみない喝采を。何よりもその才能に賞賛を。

「症年症女」西尾維新・暁月あきら

- 「戯言シリーズ」から分かりやすく西尾維新にどハマリした身としては、初の漫画オリジナル作品『めだかボックス』は「もしも西尾維新が【ジャンプ漫画】をやったとしたら」というパロディというかオマージュというか、古式ゆかしき所謂ジャンプ漫画のお作法をお題として作劇した、縛りのある作品として眼に映っていました。毎週必ずページブチ抜きが見開きがあって、とか、友情・努力・勝利で、とか、序盤は日常系だったのにいつの間にかバトルものになってる、とか、いきなり武道会じみた大会が始まる、とか。そういう「ジャンプあるある」を物語の骨子にした、おいしい西尾維新どれだけジャンプ好きなんだよ面白いなあもうという感じの漫画でした。そんな『めだかボックス』完結(大団円。すばらしかった……)から何年かたって、ふたたび暁月あきら先生とタッグを組んでジャンプブランドの雑誌に帰ってきたのがこの『症年症女』なわけですが、これはある意味『めだかボックス』と真逆を行く作品だったのです。マジで自分のことしか考えていない、信用できない語り部「少年くん」が語るサスペンス。その「少年くん」から見た世界——人間の顔、固有名詞などあらゆる「個性」が塗りつぶされて見える——それ自体が視覚化された叙述トリック(誰が敵なのか、この発言は誰のものなのかは一切隠されている!)。言葉を弄し、息をするようにミスリードし、大事なところで土台からひっくり返される。という、まじりっけなしの西尾維新。『めだかボックス』で漫画のお作法に慣れてしまったから、次回作はもうちょっとマイルドになるのかなァ、なんて思っていたのですがとんでもなかった。『ジョジョ』SBRの名台詞「だがクセなんて直さなくていい もっとクセを出して走れ」じゃありませんが、「っぽさ」全開の、小説まで含めてここ数年の作品の中でも屈指の「西尾維新らしい」作品なんじゃあないかと思っております。上でもチラッと触れましたが、主人公「少年くん」「少女ちゃん」の罹患している謎の奇病は、知覚できるさまざまな「個性」が塗りつぶされて見えるという症状。このタッグで作った漫画でしか見られないビジュアルというか世界というか、表現の巧みさでも、2016年に読んだマンガの中でも特に印象に残っています。みんなで読もう!!

アニメイト町田 / 岡ノ部亭 真泰

「少年ラケット」掛丸翔

- ど直球の少年卓球マンガ! ワクワクしながら読んでます。必殺技みたいなのがいっぱい出てきますが基本的に卓球の理屈に乗っ取ってるので無理がなく、卓球が好きな人に一番にオススメしたいマンガです。そして卓球を知らない人にも勧めたい。少年マンガとして楽しく読めます。今更とおもう方もいるかもしれませんが、私は去年やっと知りました。もっと評価されてほしい! 本屋さんでもあまり目立つ位置にみかけない気がする…。今まで知らなかった自分をタコ殴りしたい。

WEB デザイナー / 河本 智芳

- スポーツ(こちらは卓球マンガです)を題材にした作品は、その競技を知らないと置いてきぼりになることがあるのですが、こちらは丁寧に分かりやすく展開されます。記憶を失った主人公、昔また試合することを約束したライバル等々、少年マンガの王道の要素満載ですが、全く飽きることなく新鮮な気持ちで読み進めました。普段スポーツマンガは苦手…と敬遠してる人にも絶対に楽しんでもらえる作品です。

会社員 / 宇田川 結衣子

「知らない魔法」山田さぶろう

- 大きく分けて2つの不思議な物語が収録されているが、それぞれがちょっとクロスオーバーすることで、合わせて作者の世界観描かれている。次の単行本も読みたくなりました。

医師 / 岸本倫太郎

「新・血潜り林檎と金魚蜂男」阿部洋一

- 諸般の事情で休載していた同タイトル作品の続編。可愛さとおどろおどろしさが同居する独特なタッチの絵柄のインパクトもさることながら、ぶっ飛んだ設定と展開がなんともたまりません。わりと物騒な事件が次々と起こっているにもかかわらず、基本のんびりしたスタンスの天然キャラクター達の発想や行動がおかしくて随所で笑えます。昭和感のあるちょっと懐かしい世界観が、静かな町に巻き起こる奇怪な事件の異質感と絶妙にマッチしていて素晴らしい！

醤油製造業 / 小野塚博之

「神軍のカデット」川端新

- 226事件を、ファンタジーと眷属と絡めたという好きな人には好きな設定ということで、もちろん私も飛びついてしまった。将校生徒が眷属に従える・・・これは女神転生を愛好する者にとっては、決して無視できない設定ではないか。とても「いいやつ」そんな主人公有賀とイケメンかつ強そうな 橘 英治がどのように歴史的事件に絡んでいくのか、そして二人はどう対峙していくのかと、壮大なテーマに期待してしまう。クライマックスの展開についてすでに冒頭で語られているのだけど、この状態になるまで、二人がどのような過程をたどるのか、若き将校生徒たちの過去を読みながら、ワクワクしている。美麗で安定の絵が読みやすいし、何度か繰り返し読んでも胃もたれせず、重過ぎない。

会社員 / 西尾 美里

「深夜のダメ恋図鑑」尾崎衣良

- 女子には顔けて、男子にはぜひ読んでいただきたい(笑)

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 男性が読むにはかなーりツライ作品。女性が日頃思っているであろう事が、これでもかと詰め込まれていて、読んでいる途中でお腹が痛くなる。でも、怖いもの見たさで読んでしまう楽しさ。やはり、他人の不幸は蜜の味。あまり近くの女性には読んで欲しくないけど、漫画としてオススメしたい作品。作品内の中で思い当たる男性がいたら優しく見守ってあげてください。

ブックエキスプレス / 中村 哲彰

「スティーブ・ジョブズ」ヤマザキマリ ウォルター・アイザックソン

- 現代に最も近い“偉人”のお話として様々なメディアで作品化されているもののひとつです。ほかで取り上げられた映画や小説などはある程度尺やページ数が決まっている中で表現されていますが、マンガではその制約が無いとも言えるのが一つの特徴だと思います。しかし内容は決して冗長ではなく、要所要所を端的にそして丁寧に表現されています。是非、映画作品や本などと併せて楽しむのがお勧めです。

デザイナー / 佐藤ユウ

「スティーブズ」うめ（小沢高広・妹尾朝子）・松永肇一

- 完結してしまった。

大日本印刷 / 佐々木愛

「素敵な彼氏」河原和音

- 一途に迷走するとしか形容のしようがない主人公が可愛くて可笑的。そして、「俺物語！！」の超マッチョ男子に続き少女マンガに新たな男子像を投入、薄目薄笑い男子。クールでスマート、気遣いもこまやかだがべたつかない、毒舌家かと思えば率直で正直、と絶妙のブレンド感がたまらない。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 河原先生得意のストーリーなんだけど…。かなりベタなんだけど…。むしろそれが落ち着くというか、やっぱり好き。ピュアでまっすぐな主人公に、忘れてた気持ちを思い出させていただきました。

アナウンサー / 松尾 翠

「すみれファンファーレ」松島直子

- 小学4年生の堇（すみれ）ちゃんが主人公。彼女と家族、そして友達や街の人たちとの交流が描かれている。辛く、悲しいことがあっても健気に現実と向き合う姿は、何度も泣かされる。家族全員で読める漫画。

自営業 / 小野ゆうこ

- こんなに瑞々しい作品に出会うことができ嬉しいです！！主人公の小学4年生すみれちゃんがまっすぐで素直で、本当にいい。どこにでもいそうでいない、でもなんともいえない求心力のあるキャラクターに惹きつけられてしまいました。学校に行ったり、友達と遊んだり、そんなすみれちゃんの日常を見守っていると、読んでこちらが励まされるような、そんなパワーのある作品です。完結してしまったのですが、正直なところもっとすみれちゃんの毎日を見ていたかった。でも彼女にとってひとつの大きな我慢を乗り越えたところで終わりました。最終話、彼女の門出に鳴り響くのがきっとファンファーレ。未来のことは何も描かれていないけど、いつまでも応援しています！登場人物みんなの幸せを願いたくなるような優しい気持ちになれる作品です。

会社員 / 宇田川 結衣子

- 今まで何度かマンガ大賞にあげてきた作品が、堂々完結。5巻で盛り上がった後どうするのかあ？とぼんやり思っていたら、「大人」とは、「子供」とは、というより、主人公の堇とは、ということを最終的によく掘り下げたいいいラストだったと思います。当たり前なんだけど、人格形成は育てられた環境のつながりで作られるんだなあ、優しく実感しました。もっと評価されてほしい！

WEB デザイナー / 河本 智芳

「スローモーションをもう一度」加納梨衣

- 今、ファッションも80年代リバイバルがメインストリーム。そんな80年代が大好きなリア充風主人公と、そして同じく80年代大好きなヒロイン。髪型やファッション、今の時代の絵柄とうれしいクロスオーバーをしています。マイノリティな趣味を持つ人もきっと共感できます！ただ、同じ趣味を持つ素敵な異性と出会いたくなります。おすすめ。

メガマソ / Migimimi sleep tight / 仙洞田涼平

「セトウツミ」此元和津也

- 去年も推しましたが今年も！ただただ、暇をもてあました関西の高校生が放課後の川辺でしゃべくり倒す漫画。くだらなくて無駄な時間かもしれない。でもこれができるのって人生のごくごく限られた時だけ。大人になったら無駄な時間って最高の贅沢じゃないですか？チラッと小出しの、瀬戸と内海の男の友情にもぐっときます。どっちも面と向かっては言わないけれど。そういうところがリアルに男子だなあ。

三省堂書店営業企画室 係長 / 内野 智未

「1518！ イチゴイチハチ！」相田裕

- 肘の故障で野球を諦めた男の子と、今までのめりこむことがなにも見つからなかった女の子が、高校の生徒会でくりひろげる青春物語。高校生になったばかりの彼らが、自分を回復・再発見・新発見していく物語です。アニメやラノベではたまに絶対的な権力を持つ生徒会がありますが、このマンガではそんなことはありません。かといって、青春モノにときおりある過度な熱さもなく、じんわりじわじわと物語の流れに身を委ねていられます。

鳥取県立日野高校司書 / 野間勤

「先生の白い嘘」鳥飼茜

- 最も怖いものは、おばけやなんかじゃなく、人なんだとヒシヒシ感じます…おそろしいけど読むのが辞められない

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「双亡亭壊すべし」藤田和日郎

- マンガ界随一の豪腕が描くモダンホラー！少年マンガのワクワク感と、本格ホラーの怖さを両立できるとは、さすが藤田先生！！

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 読めばわかる無限の迫力。目に宿る強い光。双亡亭を壊さんとする人々を追いかけていくだけで、自分も胸が熱くなります。

教師 / 持丸 宏司

- あんな双亡亭、本当に壊せるのだろうか？藤田ワールド炸裂！

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 今度の敵は館！つまりは建物。ホラーに幽霊屋敷モノは数々あれど、ここまで奇妙かつ攻撃的な館があったろうか。物理攻撃効かないし、科学の力も霊能力も超能力もあまり役に立たなそう。双亡亭の内と外、二つに分かれた視点が一つになる時、一体何が起こるのか!? ドキドキしつつも今から楽しみです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「その女、ジルバ」有間しのぶ

- 男に捨てられ職場では窓際に迫いやられと良い事なしのアラフォーが切なく、可愛く元気に生きていくホンワカ、胸に刺さるストーリーがたまりません。

主婦 / 柴 架衣

「たーたん」西炯子

- 突如父親になった主人公が子供を預かることで真人間になってしまうのが面白い。この後、でてくるであろう本当の父親が現れた時、どうになってしまうのか。実際の父親であることを打ち明けられるのか。ほんのりとした作風で、とても好きなマンガです。

デザイナー / 平沼寛史

「第3のギデオン」乃木坂太郎

- 今まで面白かったのですが、歴史上の有名人が続々と登場し、時代も煮詰まってきて、この先への期待がすごいです。物語の進め方とキャラクターがとても魅力的なので、フランス革命の知識がなくても退屈しないと思います！

文教堂書店浜松町店コミック担当 / 金田健太郎

「大正処女御伽話」桐丘さな

- 夕月さんがとても可愛い！ほんわかしか空気がとても心地よく、ずっと二人の生活を見ていたくなりました。今後の展開にも期待大です。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

「タクマとハナコ」はるな檸檬

- 趣味を同じくする者同志の夫婦の走り出したら止まらない感が、なんとも幸せな気分になる。微笑み通り越して爆笑せざるを得ない！そして宝塚ファンの熱心さ。最高です。

医師 / 岸本倫太郎

- ただただ、好きなのです。宝塚も、はるな先生も！他にもいくつかあるツカ漫画の中でもはるな先生が優れているのは「別に宝塚興味ない」層にも十分読み応えある構成の上手さ。何のことだかわからないけど、楽しそう。と思ったらそこが花園の入り口。気づいたら調べたくなっているはず！こんな夫婦、理想です。

三省堂書店営業企画室 係長 / 内野 智未

「ダムマンガ」井上よしひさ

- 読むと嵌る超マニアックな一冊！これを読めばダムが好きになる事間違い無し。ダムカードって知っていますか！？可愛い女子高生がダムを訪問しまくります。

TORICO まんが王 通販部 / 日吉 雄

「ダンス・ダンス・ダンスール」ジョージ朝倉

- 野猿系男子が、素人同然で飛び込んだバレエ界で、秘めた才能を開花させる…！？と言うと、使い古された感じがしてしまうよね。うん、わかるわかる。しかし、そこはジョージ朝倉作品。青さと青さと青さが交差して、青春コンプレックスが刺激されます。周囲と切磋琢磨して成長していく今後は、楽しみで仕方ありません。実際にバレエを始めるまでが少し長いのですが、とりあえず2巻までは読んでみて欲しいです。バレエ(やったことない)、青春(なかった)、スポ根(根性ない)、心に傷を負った美少年(出会わなかった)と、好きが詰まった作品！

主婦 / 赤坂真実

- バレエマンガの主役は(私の知る限り)ことごとく女の子だったと思いますが、ついに「少年」が主役に。しかも「マリンスキーの頂点」を目指すだと！これだけでも画期的なのに、熱い！面白い！美しい！日本では80年代から熊川哲也が出ているのに、こういうマンガがなかったことがかえて不思議に思えます。踊りのシーンや体の繊細なラインから作者の「本気度」がピンピン伝わってきて、ただ事ではない高揚感と酩酊感。今一番勢いのある「熱血マンガ」だと思います。

読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員 / 石田 汗太

- 一巻まではまあまあかな？、と思いきやどんどん面白くノってきている感じ。バレエ男子もイイ！

鍼灸師、理学療法士 / 碓氷麻里子

- まず題材に惹かれた。男子バレエ。確かに。提案されて初めて気づいた。うん、確かに興味ある。女性のバレエについては映画も本もマンガにおいても繰り返しピックアップされてきた。でも、男子バレエの世界はあまり見聞きしたことがなかった。創作作品なんてなおさら。タイトルと題材だけで、手に取った。読み始めたら一気にハマってしまった。キャラクターそれぞれの背景や性格について深堀りする青春パートの中に、「バレエ」が絡んできて一層面白い。1巻ではとてもバレエをやらなそうな人物主人公潤平は、確かに男にも女にも好かれる人間性で、一途なだけでなく少し臆病なところや、情けないところもあったりして、愛しい。そしてなによりヒロイン都の、突然見せるビックリするほどセクシーな表情がやばい。胸をギュギュっとつかまれる。そしてライバルるおう。彼の天才っぽさと闇っぽさの融合は、マンガ好きなら大好物に違いない。潤平、都、そして謎多きイケメンるおうの今後の展開から目が話せない。

会社員 / 西尾 美里

「ダンベル何キロ持てる？」サンドロビッチヤバ子・MAAM

- 「筋トレは鬱に効く・筋肉は裏切らない！」等のフレーズは昨年辺りから Twitter 界隈で散見するようになり、筋トレ書籍の動向を見るに、楽しく痩せる系の流れから人類の友である炭水化物や穀物を敵視する風潮に対して真っ向から「適度な食事と運動だろうが！」と喝破する至極まっとうな流れが来つつあるので、筋トレ界に期待を込めてこの一作を。

住職兼ライター / 蟬丸 P

「ちひろさん」安田弘之

- 人生を諦め、サボっている人の話かと思ったら、とんでもありませんでした。つかみどころなくフラフラしている様に見えて、ちゃんと自分の信念を持って生きている。自分と、他人と、独特のやり方で精一杯向き合うちひろさんの姿に、ただただ憧れを抱き、心を打たれました。平凡な日常を綴っている風でありながら、そこにはいつでも激情に溢れたドラマが存在し、続き、続き！と一気に読んでしまう面白さがあります。漫画の中のちひろさんを通じて常に自分自身と向き合う感覚があり、決して楽な気持ちでは読めません。けれど、読んでいてどこか心が楽になっていく瞬間も確かに存在し、相反する感情がなんだか心地いい不思議。読み手によって捉え方が様々で、人それぞれに違った面白さが見出せそうな、いい意味で「変」な漫画です。また、(この様なことをベテランである安田先生に言うのは非常に失礼なのですが) 一見、最近流行りの楽に描かれたゆる？い絵に見えますが、全くそんなことはありません。書き込みが非常に丁寧であり、構図の取り方が美しく考え抜かれ、かつシンプルで見やすく、漫画という表現媒体として最高峰であると感じます。コマ割と構図で魅せる！これぞ本当に面白く、人におすすめしたい「漫画」と言える作品です。

明正堂書店アトレ上野店 / 荒木和美

「中学聖日記」かわかみじゅんこ

- 「ぼく 先生の顔みると イライラするんです」。新任教員の末永聖と中3男子の黒岩晶が、教師と教え子の一線を図らずも踏み出してしまうさまを丁寧に(時にねちっこく)描くオトナ向けの作品。冒頭から横溢する不穏な「暗さ」が妙に癖になる。中学生男子らしい「黒岩くん」の性急さと背伸び、はっとするような大人っぽさもさることながら、流されやすく主体性が薄く年齢の割に幼く、つまりはたいへん色っぽい「聖ちゃん」の造形がとてモリアル(2巻の登場人物紹介に「おっとりしたスキが異性を惹きつけ」とある。さもありなん)。海辺の花火大会の夜の聖と黒岩の運命的なやり取りは「よろめきもの」すれすれのあわいを縫うようにじっくり展開され、刹那だが介在するもののないファンタジーから、無神経な大人の事情に翻弄される予期された現実へと帰還する。そして夏休み明け……。すべてにおいてバランスが悪く未熟な十代と、社会人と言ってもまだフワフワな20代が押し込められた「学校」という特殊な空間の息苦しさ、それゆえの隠微さを、映画で言えば劇伴のない感じの静謐な筆致で描く。事後談かと思わせつつ、次なる展開に踏み込む2巻後半もよい(「2年で男の子は変わる」は名言では)。エロい描写があるわけではないが、とてもわいせつ。たまにはこんなマンガでドキドキするのもいい。

会社員 / 天野賢一

「中間管理録トネガワ」福本伸行・萩原天晴・橋本智広・三好智樹

- 「カイジ」スピンオフです。原作ファンからすると…まず、絵が一緒に笑います。次に、いちいちツッコミ方も一緒に笑います。そして、そもそもトネガワが主人公ということに一番笑ってしまいます。原作未読の方でもネットで見たことあるようなネタを中間管理職の悲哀も絡ませつつ、攻めるギャグにやられてしまうこと間違いなしの素敵な作品です。

メガマソ / Migimimi sleep tight / 仙洞田涼平

- 人気のはずの本編マンガを食うぐらいの存在感のあるスピンオフ。

まんたんウェブ副編集長 / 河村成浩

- どこか一部分本気で「カイジエピソードゼロ」をやろうとしてる感。もし受賞したとしたら、誰がメインになるんでしょう？

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部店舗開発課マネージャー / 大山敏樹

- 中間管理職の哀しみが熱い。こういうスピンアウト系がマイブームです。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

「超人間要塞ヒロシ戦記」まつだこうた・大間九郎

- この設定は斬新！まだこの手があったとは・・・。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- まさかギャグマンガで泣くとは思わなかった。2巻を読んでも時なんて脳内にアルマゲドンのエアロスミスの歌が流れたほど。餃子のくだりは笑いながら、泣きながらページをめくった。「ヒロシ」の中と外で繰り広げられるやり取りのギャップがくせになる！「しずか」の猛アタックを乗り越えて、スカベリア国民に平穏が訪れる日は来るのか・・・？

三省堂書店営業企画室 係長 / 内野 智未

「月影ベイベ」小玉ユキ

- おわら“風の盆”を見に、富山に旅したくなる一冊。東京からやってきた転校生・蛍子はワケありの風情で周囲ともなじめない。その理由が巻を進めるごとに明かされていき、蛍子の周囲との関係も変わっていく。幼い初恋かと思いきや、その背景には親子の思いも秘められていて……と、幾重にも重なる伏線が丁寧にすくいあげられていく展開もお見事。きれいで懐かしくて、恥ずかしくて、読んでも鼻の奥がツンとしてくる作品です。

馬場企画 / 島影真奈美

「月に吠えらんねえ」清家雪子

- 巻をすすめるごとに深くなっていく作品。1巻のノリが懐かしくなるくらい今は刺さります。手をとめて考え込んでしまうこともしばしば。途中で止まってる方はぜひ読んでください！

文教堂書店浜松町店コミック担当 / 金田健太郎

「九十九の満月」小雨大豆

- 笑いあり涙ありの妖怪珍道中がたまりません。盛り込まれた内容がたっぷりだけに、広げた風呂敷も実に大きい。

教師 / 持丸 宏司

「椿町ロンリープラネット」やまもり三香

- 自分がいま女子高生だったとしてもゼッタイにこんなことは起こらないんですけど、それでも「もう一回あの頃に戻ってこんな経験ができたなら…」と思ってしまうような、どうにかして体感したい胸キュンが詰まっています！最高！

ライター・大学講師 / トミヤマユキコ

- 主人公の表情から香る切ない情感とみずみずしい色気にうっとり。心地よい癒やし系のマンガ。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 女子高生と年上小説家の不器用な恋。ゆっくり暖かく育んでいく関係にほんわかします。

主婦 / 紺野 泉

「ディザインズ」五十嵐大介

- もうものすごいエンターテインメント。圧倒的な画力でこれをやられてしまうと圧巻の2文字しかない。人間と動物のキメラは、どれほど高い能力を持ち聡明であるのか。それを扱う人間の様々な思惑。科学はもうここまできているし、そもそも既にこういうビジネスって存在しているんじゃないかと信じて疑わないほどにのめりこんでおります。やばみ。映像化大希望。

オリオン書房ノルテ店 / 池本 美和

「鉄腕アダム」吾嬬竜孝

- SFだ。SFだなぁ。今年一番正統派なSFを感じられたマンガだったと思う。宇宙から謎の存在が攻めて来て迎え撃つのが人工知能（つつうか人口実在）で、それが「計算戦」っていうんだから痺れるでしょうや。しかも多田由美を彷彿とさせるようなセクシーで流麗な線で描かれる。いかす。それと作者の吾嬬竜孝さんの手によるものなのか編集部の手によるものなのかは不明だけど、単行本のコラム「鉄腕アダム科学講座」がこれまた優秀で、ものすごく趣味がいいブックガイドになってる。至れり尽くせりだと思います。あと作者、吾嬬竜孝さんはドアノブを舐める少女をフェティッシュに描く「ドアノブ少女」とかでその筋の人たちには有名だよね。彼の「膣内射精」という身も蓋もないサイトではたいへんいやらしいイラストが拝めるのでぜひ見に行こう。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

「てのひらの熱を」北野詠一

- 絵も自分好みで久しぶりに薦めたい少年漫画出てきた！と思ったら残念ながら3巻で完結してしまいました…しかしながら北野先生の次回作に超期待してます！空手漫画としても少年の絆や成長を描いた作品としてもおススメです！

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

「亜人ちゃんは語りたい」ペトス

- 2017年1月よりアニメ化となり放送されているこの作品。“人間”とはちょっと違うけれど人とはあまり変わらない“亜人”が共存する世界での、思春期真っ盛り女子高校生たちと先生の物語。亜人ちゃんたちがとても可愛くてニヤニヤしてしまいますが、物語はこの亜人ちゃんたちと先生が語らいながら展開していきます。人と変わらない悩み+亜人として持つ悩みや問題。そのひとつひとつを先生が受け止めてくれていて、ああこんな先生が自分の学生時代にいてくれてたら学生生活がもっと楽しかっただろうなぁと遠い目をしてしまいました。素敵なマンガです。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 亜人の高校生たちのお話ですが、彼女たちの悩みが妙に人間臭いというか、「他人と違う」高校生がおそらく持つであろう悩みで、なんか親近感を感じてしまってよけいかわいいと思ってしまうです。

会社員 / 林礼春

「同居人はひざ、時々頭のうえ」二ツ家あす・みなつき

- ネコを拾った人嫌いの作家と、そのネコ（ハル）のお話を、人間とネコの視点から交互に描く。双方の視点から描かれた内容は思ってもみなかった展開を見せることがあり、時に意外でときに「えっ、それ!？」とツッコミをいれながらほのぼのと読み進めることができる。ネコのいる暮らし、いいよね・・・。

敬文堂書店 商品担当 / 山川美香

「動物たち」panpanya

- 動物たちが可愛い。読んでいくうちに、ほんわかします。大人になって、バツタに注目するとは思いませんでした。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

- トリップできる漫画といえばこれ。最高！

作家 / 海猫沢めろん

- 日本が誇る最高の漫画家の新作。絶対に楽しませてくれる、という信頼にも似た感情を抱いてしまう作家 panpanya。今作も素晴らしく panpanya 節。作者の類まれなる視点と、まじりっ気のなさ。panpanya の作品を読み続けたいから長生きしたいとすら思う。これまでの三作に比べ、よりハッピーを感じさせてくれる。僕はいつまでも panpanya を追いかけて続けるのだろうか、と確信めいて思う。次作も、心から、楽しみにしています。

音楽家 / 谷澤智文

- あのつけ義春テイストは、マンガ読みにとってはちょっと怖くもあり、なつかしくもあり、かと思います。オムニバス形式で、主人公はたぶん作者らしき女性。そこに不条理な「動物」たちが絡む短編集です。マンガならではの雰囲気、読み手に委ねる解釈、よくわからない動物（「?（まみ）」って結局なにかよくわからず、です）。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

「透明なゆりかご」沖田×華

- 読み手の心に「刺さる」、そんな作品。二児の父親として、改めて家族の幸せを噛みしめています。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 堕胎を扱った作品。生まれてきても親に愛されなかったことの話など、内容がシビアだからこそ、みなさんにも読んで心に留めてほしい作品。

鍼灸師、理学療法士 / 碓氷麻里子

- ひとが生まれてくるってなんだろう。このマンガを読むと、その問いをいつも考えてしまう。重いテーマを淡々とした筆致で描くこのマンガは、それでも、生まれてくるって幸せなことだよと言いつけているような気がする。うまれてくる命が、いつも笑っていますように。そんな祈りを感じるマンガ。おすすめです。

敬文堂書店 商品担当 / 山川美香

「トクサツガガガ」丹羽庭

- ずっと楽しみに読んでいたマンガの一つです。オタクの自分や周りのオタクな女子には共感できる部分がたくさんありとにかく一度は読んでみてほしい漫画です。これから先もオタクあるある、そして我々の心の叫びを発信して欲しいです！

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

「ど根性ガエルの娘」大月悠祐子

- ほのぼのとした絵柄で描く凄まじい才能の枯渇という問題に直面したクリエイターとその家族が熱い。こういうギャップものマイブームです。

ホームパーティー研究家 / 高橋ひでつう

「とつくにの少女」ながべ

- 漫画というより童話や絵本のような雰囲気です。しかし心温まるほのぼのとしたような話ではなく、冷たく静かな水の中で、どこか温かい場所はないだろうかと手探りをしているような不安と寂しさが漂っています。そのうち温かい場所に出られますように、と祈りながら読む気持ち。漫画にはまだまだたくさんの表現方法があるのだと再認識する作品です。

図書館司書 / 堀江千秋

- 単行本をジャケ買いしたのはとても久しぶりでした。頭の中でボヤッと浮かぶ、素朴な中世っぽい田舎の村で、かつ幻想的な絵柄がそのまま出てきたという印象でした。寂しいのと悲しいのが絵やストーリーににじみ出ている感じなのに、それが美しく思えます。

バンドマン / TA-SHI

「トップウ GP」藤島康介

- ずっと待ってました！の藤島先生のバイク漫画！やはり画力がズバ抜けていてな何よりバイク好きが描くバイク漫画という感じがひしひしと伝わってきます…まだ始まったばかりですが期待しかありません！

株式会社スマイルアクス・営業大臣 / 岡村光徳

「ともだちごっこ」山田デイジー

- タイトル通りにしてタイトル以上の圧倒的邪道花園漫画、ここに君臨です！名門女子高を舞台に、可愛い女の子達が学園のトップである「女王様」を目指し、容赦の無い裏切りや精神的攻撃を繰り返します。この作品の最大の魅力にして謎は、ダークヒロインとも呼べる主人公たんぼぼの存在。一見地味でありながら少女達の絆を壊し貶めていく黒さを背負った彼女と、それにより歪んでいく楽園の少女達の物語から目が離せません。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

「ドリフターズ」平野耕太

- 異世界に集められた者達の戦い(ざっくり)。適当な感じで「ヒラコー版魔界転生」と人に説明していたら、そこに「シヴィライゼーションレボリューション」の要素が加わってきて説明に困る……。片方だけに文明が進んで、それはそれで面白いけれど、あまり進みすぎてもつまらないから、個人的にはフリントロック辺りで止まって欲しい。ああ、でも、飛龍&紫電改の出撃も見たいしなー。歴史好きもそうでない人も、あれこれ考え過ぎて悶々と過ごせる楽しい漫画です。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 2012年、2015年と刊行すらされない年があるのに、昨年にはアニメ化までされてしまった。その作風もあって、一般にどの程度認知されているかわからないが、死生観まで含めた圧倒的なスケール感とエンターテインメント感にグイグイ引き込まれるのは相変わらず。どうかコンスタントにコミックスをリリースし続けて頂きたいという気持ちを込めて。

(有)馬場企画 ライター／編集者 / 松浦達也

- 歴史上の傑物同士が仲間になったり争ったり。史実を知るものはその組み合わせを楽しみ、知らなくても魅力ある登場人物たちの活躍はいちいち熱い！しかもそこにドワーフやエルフが居るって、なんでもありかよ、と。人類の進化とファンタジーを混ぜた異色中の異色作。文句を言いたいのは刊行ペースが遅いことだけ(苦笑)。

株式会社マーズ・シックスティーン取締役社長 / 北山友之

「ドロップフレーム」成家慎一郎

- めくるめく謎、惹きこまれる展開、徐々に示される世界のルール。青春サスペンスミステリーの傑作……になれたのではないかな？という作品。打ち切りらしき終わり方をしているのですが、徐々にヒットしようとしていた作品なので、この作品がもっと多くの人に読まれて「トゥルーエンド」が世に出ることを願います。

事務員 / 工藤圭

「風子の話」後藤

- もったいないと思う。BL レーベルで発売されてしまった事が。物語は風子という女性が主人公なのだ。まさに風子の話なのだ。男性にも是非読んでほしい。愛情と友情の微妙な関係と、ほんのちょっとだけの我儘。切ない。個人的には橋口亮輔監督「渚のシンドバッド」、三浦哲郎「忍ぶ川」、吉野朔実「瞳子」といった作品と近い印象を受けました。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

「名づけそむ」志村志保子

- 「名前」にちなんだ 10 のストーリーを収めたこの短編集。これが今世紀最高の短編集だといっても過言ではありません。名前は誰もが持つものですが、その 1 つ 1 つがこれほどまでに特別で大切なものだということを、やさしさと少しの痛みが教えてくれます。志村先生のマンガを読んでいると、人生の苦い部分すらも愛おしく思えてきます。この本があなたの本棚の中で、きっと一生の宝物になることを保障しますよ！

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

「七つ屋志のぶの宝石匣」二ノ宮知子

- 流石のストーリー展開宝石についてはまったく無知ですが、そんな事は関係なく安心して楽しめます

(株) キャンナルエンターテインメントワークス / 阿部 大介

「逃げるは恥だが役に立つ」海野つなみ

- 昨年、一昨年も一次選考にこの作品を推しましたが今年も推します！というより、まさか今年になってこの作品がこんなに世間的に盛り上がることになるとは！！これまでも独自の視点で「暮らし」を見つめてきた海野つなみワールドに、ようやく時代が追いついたと確信しました！ドラマ化された際には『社会派ラブコメディ』と銘打たれたこの作品ですが、マンガの方ではさらに思考をつきつめて描かれているのでお仕事マンガとしても大満足ですし、恋愛パートではもちろん存分に「ムズキュン」を味わえます。ドラマがマンガの要素をすごく大事にしてくれていたのですが、マンガを読むとドラマとは違った発見がいろいろあると思います。ドラマのことはばかり書きましたが、本当に本当に面白いマンガなので、とにかく一人でも多くの方に読んで欲しいという思いでいっぱいです！

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- ああ、流行った。流行ってしまったなあ。で、単行本はいま 8 巻。これは推すしかないよなあ、タイミング的に。と思ったので推します。(賞としての面白みには欠けるかもだけど。でもやっぱり何か寿ぎたいしなあ。) 現代的なテーマがかわやかにキュート。後半は延々ニヤニヤする。良い。キャリアあるマンガ家さんだし他の作品も良いので読んでくれ～とは言いたいな。『回転銀河』とか『tunamix』とか。良いというか、好きなの。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- 「安易に時流に乗りやがって、講談社漫画賞だって取ってるだろう！」すみません、「ここで押すは恥だが役に立つ」と言わせてください。ドラマが人気になるまで読んでませんでした。それが一番恥ずかしい。年末に一気に読みしてハマりにハマリ、私の中で海野つなみブームが再燃して、昔好きだった『回転銀河』を引っ張り出して再読。ああ、この頃から似たようなテーマを扱ってたんだなあとまた感心。風見さんなんて、まさに銀河に出てくるようなキャラではありませんか。 原作をバラして再構成し、プラスαでテーマ性をより強めたドラマ(野木亜紀子脚本が秀逸)も確かに良かったが、原作の面白さには敵いません。フェミニズムとはまた別の視点から「家事労働有償化論争」を復活させたのはすごいと思うし、夫婦関係を会社経営に見立てたのも今風。それでいてラブコメとしても完璧なのだから、長く語り続けられる傑作じゃないかと思います。「Kiss」で追ってなかったのが、8 巻を読んだ後我慢できずに電子版「EKiss」を 4 号分買って最終回まで読みました。KindleGJ！とこれほど思ったのも初めてです。

読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員 / 石田 汗太

「ニュクスの角灯」高浜寛

- 実はすごく少女マンガ的な主人公の心の動きで、ベテランといえる作者の中で新しい境地なのではと心新たに読んでいます。

往来堂書店 / 三木雄太

- 孤独な少女の自立を描く少女小説的なストーリーに、文明開化期の日本の怪しげだけど活気のある文化的状況がうまく掛けあわされていて、本当に読んでいてワクワクします。

ライター・大学講師 / トミヤマユキコ

「人間仮免中つづき」卯月妙子

- ボビーさんとの慟哭の再会シーンは、今年読んだ恋愛シーンのどんな筆致よりも感動的でした。何年後でもいいから、さらに続きが読みたい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「能面女子の花子さん」織田涼

- 能面ってちょっとこわいものでしたが、そんなイメージが花子さんの登場でなんだかとてもかわいらしいものに見えてくるから不思議です。花子さんの余裕さにもあこがれます。シュールな笑いもあって十二分楽しめる漫画です

ブックエース上荒川店 コミック担当 / 倉本かおり

「のみじょし」迂闊

- 最近はずっかり定番となったグルメ系漫画はいかに他の作品との差別化を図るかというテーマに縛られがちですが、そういった気負いも無く仲良し社会人三人娘と周囲の人達が、美味しい飯と酒を楽しむという基本にして原点を丁寧に描き出しており、どこか懐かしさを感じる独特の絵柄と相まって「このキャラ達と飲み食いをしたい」と引き込む地力の強さを感じました。

住職兼ライター / 蟬丸P

「BIRDMEN」田辺イエロウ

- 事故によって人類を超える高位の生命体 BIRDMEN となってしまった日本の少年少女たちの物語。正統派のジュブナイルな漫画。眉村卓・光瀬龍・筒井康隆たちの少年少女 SF 作品群を思い出す。前作「結界師」もそうだったが、丁寧に日常が描かれる為に話の展開はかなりスローペース。面白いんだけどね。BIRDMEN を生み出した組織 EDEN も本格的に動きだし、物語は大きくうねり始めている。果たして世界は覚醒した BIRDMEN によって革新されるのか。それとも人類によって BIRDMEN は滅ぼされてしまうのか。続きが非常に楽しい作品です。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

「はぐちさん」くらっぺ

- Twitter で話題となった作品ですが、単行本でまとめて読むと、TL 上でサラッと読んで「ふふっ」となるのとはまた別の感情が沸き上がってきました。癒されるというか、明日も頑張ろ！と思えるというか…。家にもはぐちさん、来てくれないかな～

ホビー会社勤務 / 畑中 瀬路奈

「ハクメイとミコチ」 檜木祐人

- とんでもなく綿密に描かれたファンタジー。どれだけの想像力、計画性、構築力を持ってすればこれだけの漫画を描き上げられるのだろうか。それぞれの登場人物から透けて見える、これまでの人生。異世界を異世界としてではなく、隣町のように表現する感覚。完結まで、固唾を呑んで注目し続けていたいマンガ。各話ごとに綴られるコラムがまた、作品への没入感をより高めてくれる。

音楽家 / 谷澤智文

- 身長9センチメートルの楽しい生活ゆったりとした時間の流れと、一人一人が日々の暮らしを楽しんでる感じがいいです。料理描写は本当にどれも美味しそう

Hair Make Lounge tetote 代表 / 力丸真

- 全長9cmのこびとたちの世界。温かさや優しさに読むたびに癒されます。家族全員で読める漫画。

自営業 / 小野ゆうこ

- 個性豊かな小人達と言葉をしゃべる小動物達が共存している世界がとても可愛らしくてほっこりします。ほのぼのとした日常を描いたお話があったと思えば感動するお話でウルッときたりと、読みごたえも十分。本を閉じた後ついつい足元が気になっちゃうこと請け合いです。

醤油製造業 / 小野塚博之

「バトルスタディーズ」 なきぼくろ

- 元PL学園出身の作者が「DL学園」なる舞台で繰り広げる野球漫画を描いている、それだけでも野球好きなら興味が湧くことだろう。最強PL学園はいかにして作られたのか、1年は奴隷・2年は人間・3年は神と言われたその徹底した上下関係、甲子園に出場して当たり前というプライドの下地はどうやって出来上がるのか。そんなドキュメント性があつた上で、野球漫画として成り立っているんだから面白くないわけがない。公式戦より練習や寮の風景が実は一番読み応えがあつたりするのは自分も野球少年だったからなのか。

株式会社マーズ・シックスティーン取締役社長 / 北山友之

「花井沢町公民館便り」 ヤマシタトモコ

- いきなり見えない境界線が敷かれ、町から移動できなくなってしまった花井沢町のひとびと。他の町に暮らす人々と同じように楽しいこともあるけれど、絶望的なこともある。そういう町に暮らす人々のオムニバス怪作、最終巻。最後の一人になった少女「希（のぞみ）」の物語で、本作は幕を閉じた。自分の出生についての真実を知ったときも、家族が亡くなったときも、希は平気そうにふるまっていた。そういう彼女が最後に本音を、自分の希望を（のぞみを）口にするところと、その後の展開が鮮烈でとてもよかった。つらい！すき！最近のヤマシタさんは「WHITE NOTE PAD」にせよ、ぐいぐい人の心をえぐってくるので、もしかしたら以前よりも好き嫌いが分かれるのかもしれないが、私はとても好き。

主婦 / 小田真弓

- ほのぼのしたSFかと思いきや突如訪れるディストピア感！楽しいことも苦しいこともただただ受け止めていく住民に人間の逞しさを感じます

鳥取県 美術教員 / 佐川由加理

- ある集落が目に見えない壁で隔離されてしまったら、その後どうなる？ 食料は？ 医療は？ お気楽な回もあれば、これでもかってくらいシリアスなときもあって、雑誌連載の時から毎回楽しみで仕方なかった。3巻といわずもっと読みんでいたかった。スティーブン・キングにも『アンダー・ザ・ドーム』っていう同じような設定の小説があるけれど、それぞれ心に迫ってくるものはぜんぜん違う。それはスティーブン・キングとヤマシタトモコの作家性の違い？ それとも日米の文化の違い？ そんなことで長時間話していられそうな奥行きのある作品でもある。

鳥取県立日野高校司書 / 野間勤

「花に染む」くらもちふさこ

- 8巻で美しく完結。同じ世界観を有する「駅から5分」から続く、約10年間に渡る連載はまさに、くらもちふさこワールドが全開。苦しくて切なくてうっとりする。私が読みたかった少女マンガはこれです。圓城 陽大、この男子はくらもちさんしか描けない。絶妙とはこのキャラだ。8巻で完結しました。一気によめるという至福。いまが読み時ではないのでしょうか？『もうリビングレジェンドなのはあきらか』だからって、オレが『投票しないでいい』って事にはならない」です（3月のライオンの島田さんの台詞より改ざん）。

お菓子研究家 / 福田里香

「HaHa」押切蓮介

- 昨年の年明けに強い印象を残した一冊です。本来は結構説教くさい内容なんじゃないかと思うのですが、キャラクターの愛らしさに引き込まれて楽しく読んでいたら、最終的にはボロ泣きという…。母親の話というのはむず痒いものがありますが、この方の唐突なギャグ描写や独特なセリフ回しとその照れ臭さを追い払ってくれるのです。あとがきに母様からの一筆だけあったのが、1冊の作品として素敵でした。

WEB デザイナー / 河本 智芳

「薔薇監獄の獣たち」蒼木スピカ

- ひょんなことからナゾの監獄島にとらわれた主人公・ニナ。実はその監獄島は、美しい人狼（ルーガ）達が暮らす学園でもあった！ある人狼（イケメン）はニナを守ろうとし、またとある人狼（イケメン）はニナを群れに誘い、またある人狼（イケメン）はニナを舐めたり噛んだり——と、これだけ見ると乙女ゲームかな？みたいに見えるかも知なのですが、超絶美麗で可憐な表紙の印象とも違い、このマンガ、とても骨太で読み応えのある物語を見せてくれます。力や暗躍がモノをいう監獄にはびこる理不尽に、ニナちゃんがタンカを切る。NOを叩き付ける。弱い者は助け、威張り散らす不屈者には挑んでいく。外の世界でもその強すぎる正義感で自分の居場所を狭めて行ったニナちゃんが、誰も味方のいない監獄島でもそれでも自分の正義のために行動していく、その姿にとても気高いものを感じます。また、監獄島に住まう人狼たちも、ニナちゃんの登場によって少しずつ世界が変わっていき、理不尽でゆがんだ監獄学園がどうなっていくのか？そんなところもスリリングでとても目を惹かれるのです。そんな感じで結構ハードでシリアスな世界観なのですが、美しいだけでなく、画的にもキャラクター的にも個性が際立ちまくった人狼たちのたまにコメディタッチなやりとりによって良い感じに中和されていてとても読みやすいのです。あとニナちゃんの顔芸。少女誌ではありますが、画的にも物語的にもしっかりとかきこまれた読み応えのある逸品です。強くて可愛い女の子の好きな男性諸氏にも熱烈オススメです。

アニメイト町田 / 岡ノ部亭 真泰

「春の呪い」小西明日翔

- 悪口ではなく、なんというか、割とテンプレートで過剰で、若い人（10代）向けの漫画なんだろうなと感じているのに、どうしてこんなに響くのだろう。うまく説明ができない。それは「どうしてもなく好きになる」ことの引力ゆえ、だろうか。わからない理由を含めて誰かと話したくなるマンガかもしれない。わからないまま、だからこそ薦めます

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

- 1巻が衝撃的に面白い。感情移入しないのにこんなに面白いってすごい。絵もキャラクターも魅力的だし。本当にこれからに期待が高まる作家さん

bar 図書室 店主 / 岡部愛

- 周囲が反対しても、世間から良く思われなくても、本当に一緒にいたい相手と出会ってしまったら…。とても重いテーマの作品なのに、夏美と冬吾のやりとりはどこかおかしくて笑えます。読み始めたら結末が気になって一気に読んでしまいたくなるはず。

主婦 / 紺野 泉

「晴れ間に三日月」イシデ電

- 女の友情を描くマンガはたくさんありますが、こんな決着もあるのか…！と唸られました。幼い頃から一緒にいると、大きくなるにつれて「一緒」ということすら足枷になっていく、なんとも面倒くさいのが女の友情というもの。くっついては離れ、嫉妬するたびに欲しがり、好きだからこそ嫌ったり、お互いが自分の気持ちに翻弄されて傷つけあったり…ああもう想像しただけで胸焼けがしそうですが(笑)、この作品はそんな女子の感情のるつぼを、14年ぶりに再会した幼馴染みの女性二人を主役に描いてくれています。女ともだちを、ひいては大切なひとを、ちゃんと大切にするって、どういうことなんだっけな、と考えさせられました。男性にはこの作品のもうひとつの軸である「親と子の間にある切なさ」を味わっていただき、そのついでに理解しがたいであろう女の友情ってヤツの複雑さを味見してもらえたらなと思います。

会社員 / 宇田川 結衣子

「美食探偵 明智五郎」東村アキコ

- お腹がいっぱいになるくらいのギャグを織り交ぜた東村節炸裂かと思いきや…こんなサスペンス展開柄待ち受けているなんて堪りません！つぎが読みとうて読みとうて堪らんとです

(株) キャナルエンターテインメントワークス / 阿部 大介

「一人交換日記」永田カビ

- 「さびしすぎてレズ風俗に行きましたレポ」を読み、そこからコチラの作品も読んだのですが、自分としてはこっちのほうが刺さりました。男性目線でも理解できる部分が、こっちのほうが強いのかも。

鉄ばいぶレーベル・代表 / 杉本善徳

「ヒノコ」津田雅美

- 運命というものを信じたくなる作品。また漢字の一文字一文字に込められた意味を読み解く事がこんなにも面白いとは！

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「日の鳥」こうの史代

- 東日本大震災についての新刊を今でも出してくださってることに心から感謝。ニワトリの視点から描くというユーモアが、なんとも優しくて粹だと思う。「この世界の片隅に」がブレイクしてる今、この漫画もぜひ多くの方に読まれてほしいなと思う。

主婦 / 安田ママ

「百姓貴族」荒川弘

- 昨年に続いて票を投じさせて頂く。『銀の匙』でマンガ大賞2012を受賞した荒川弘作品の本命作品！ 爆笑あり、ホロリあり。十勝農家の悲喜こもごもがすべて凝縮された名作。「銀の匙」よりもリアルに胸に迫るコミックエッセイ。モデルとなっている作者の実家がある北海道・十勝地域は、今年の台風で甚大な被害を受けた。十勝の皆様にとって、今年が少しでもよい一年になるようお願いを込めつつ。

(有) 馬場企画 ライター／編集者 / 松浦達也

「100万円の女たち」青野春秋

- ミステリーの雰囲気と作画とがマッチしていて面白い作品。なぜ、四巻で終わりなのか… 疑問というファン多し。

鍼灸師、理学療法士 / 碓氷麻里子

- 作者の新たな一面!! な作品でした。連載は終了しているのですが、悲しい話もあったのに何故かもっと登場人物たちの行く末を読んでいたかった…。このような作品でこのような気持ちになったのは初めてでした。

バンドマン / TA-SHI

- なぜこの女たちが集まったのか。なぜ彼女が。なにが目的なのか。読み応えがありました。読後もいろんなページを読み返しちゃいました。ハーレムミステリーとでも言うべきか、登場する「女たち」の魅力と謎解きのドキドキ感。世の中にある、登場人物が持つ表と裏の描写は岡崎京子先生の作品に通じるかもしれませんね。1巻から引き込まれましたが、途中からの怒涛の展開にはさらにグイグイ引っ張られました。傑作ですね。

COMIC ZIN 商業誌部門責任者 / 塚本浩司

「百貨店ワルツ」マツオヒロミ

- オールカラーで漫画とイラストによる構成の、大正ロマンを思わせる美しい本です。ページを開いただけでスミレの香りが漂い、蓄音機の音が流れてくるよう。漫画によるショートストーリーの合間に広告やカタログのような素敵なイラストが入っていて、読んでいると百年前の女学生になったような気分。漫画という枠を超えた、新しい本のカたちかもしれません。

図書館司書 / 堀江千秋

「HUMANITAS ヒューマニタス」山本亜季

- 世界に対する自分の小ささと同時に、人間の可能性を識るというのは読書ならではの体験。

往来堂書店 / 三木雄太

- 短編集がマンガ大賞を受賞したことは過去10年一度もありませんし、そもそもデビュー作に受賞させるのは、青田買いが過ぎるんじゃないの？なんて批判もあるかもしれませんが、この実力は本物。骨太。壮大。王道。直球。

ヴィレッジヴァンガードコーポレーション営業戦略部店舗開発課マネージャー / 大山敏樹

- 15世紀の中央アメリカ、冷戦下のソビエト連邦、19世紀の北極海沿岸という異なる舞台での3つのエピソードを収録するが、各エピソードに共通して描かれているのは、人間の強さである。3つのエピソードのうち特に秀逸なのは、第1話の中世の中央アメリカで戦闘士として育てられた少年であるオセロットの話と、北極海沿岸で生活するエスキモー女性のエナの話である。第3話の最後で、エナに救われた英国人男性であるウィリアムが語る、「私たち人間が世界に散らばって生きるのは、長い時間をかけて互いを知っていくためなのかもしれない。」という感動的な言葉は、世界中に多くの紛争をかかえた現代世界に暮らす我々の心に深く染み入るものである。これら3つのエピソードからは、「強くあれ人間」、「理解しあえ人間」という、著者の人間に対する暖かい視線、人間に対する期待を強く感じることができる。ストーリー展開に加えて作画もずば抜けた高水準であり、新人の作品とは思えない秀逸さである。

弁護士 / 長島・大野・常松法律事務所 / 三村 量一

「ファイナルリクエスト」日下一郎

- すべてドット絵のフルカラーで描かれていて、新しい表現を目指したファンタジー物かなと思えたのですが、読み進めるとすぐ違和感が襲ってきます。世界が狂ってしまっているのです。夢や魔法で満ちているはずのファンタジー世界が、対極の無機質で得体のしれない不安に覆われてしまっているのです。狂った世界はじわじわと精神に直接染み入ってくるような違和感と、深遠な謎を投げかけてきます。そんな狂った世界でかつての英雄だった登場人物たちが世界がこうなってしまった謎を解くために冒険の旅に出ます。そしてその冒険のエピソードはとても悲しく美しい。ドット絵であることが、その悲しさ美しさをさらに際立たせているように感じます。斬新な世界観と魅力的で美学のあるストーリーに心が揺さぶられるマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

「不思議なゆりこさん」木村享平

- 表面的には百合とか破壊的シュールギャグとかやってるんだけど、その根っこに世の中に対するナイーブな違和感があるところがすごく好き。後日談（単行本未収録）も含めて読むと本当に味わい深く、ゆりこさんとは何だったのか？と自問しちゃいます。なんとか連載再開してください！

会社員 / 末永龍介

「ふしぎの国のバード」佐々大河

- 女性探検家イザベラ・バードが書いた「日本紀行」の漫画化。当時の日本の様子が伺える作品。土地に生きる人々の暮らしや日本人の考え方が伝わってくる。家族全員で読める漫画。

自営業 / 小野ゆうこ

- 100 年前、バードさんと通訳のイトが北の知られていない文化を旅しながら体験、見て聞いていくお話。 私が、旅したことのある場所が多く出てくるのですが、たった、100 年前にこんなに「荒れて」いたなんて。そして、「日本の勤勉スタイル」は、こういう文化から形成されてきたのかとしみじみ思いました。最新刊の「3 巻」に、「100 年先の人々がこの国の滅び去った文明の記録を読んだとき…」という台詞があるのですが、確かに私はこの漫画を通してたくさんの人や風習と交じり合った気がします。

アニメイト 販促課 / 鈴木寛子

- イザベラ・バードの『日本紀行』のマンガ化というだけでも相当やっかいなのに、独自のアレンジや解釈を交えて面白くしていることに心底感心します。その最たるものが通訳のイトこと伊藤鶴吉の造形で、史実では目が細く平凡な風貌なのに、俺様無愛想イケメンにして、バードお姫様（史実では47歳だが20代にしか見えない）と絡ませるなど、まさに「アリ！」な展開に和みます。日光でバードが「ケッコー！」と叫ぶのはオリジナルかと思ったら、何と『日本紀行』にありました。当時の日本の風俗描写も誠実で手抜きなし。これがデビュー作？ 本当にいい仕事だと思います。

読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員 / 石田 汗太

- 明治11年の東京を江戸から北海道まで旅した実在のイギリス人女性、イザベラ・バードの旅行記「日本紀行」を基にした漫画。当時50歳近いバードを若く、好奇心旺盛だがお茶目でちょっとドジな性格に、通訳の伊藤を仏頂面で慇懃無礼だが甘いものに目がない男前にしたりと現代向けにキャラクターを立たせつつ、当時の日本の姿は忠実に再現して描かれている。バードの目から見た世界が描かれているので、日本語は読めない書き文字で表現されている。まさに異国を旅している気分が味わえる。実際東京の周辺は時代劇などでもよく見るような馴染みのある光景だが、旅を進めるにつれて日本人も忘れてしまったかつての日本が現れてくる。日本の景色や風習に対して驚く異国人のバードの反応を見て楽しむのではなく、読者はむしろバードと同じ目線で当時の日本を知って驚くのだ。3巻は新潟に到着した所。この後、さらに東北を進み北海道に渡りアイヌの村を訪れるまで、まだまだ旅は続く。非常に楽しみです。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

「不死の獵犬」八十八良

- 戦闘シーンの迫力は圧巻。過去作でもアクションを描くのが好きなんだろうな、という感じがしましたが、この作品で一気に花開いた感。キャラクターも魅力的で、それがより一層謎の多いこのストーリーに読み手を惹きつける牽引力になっています。とにかく眼鏡っ子ヒロインがかわいい。

事務員 / 工藤圭

「腐女子のつづ井さん」つづ井

- ただただハッピーな腐女子マンガ。まったく自虐がないというのがすばらしい！トレーナーに「HAPPY」って書いてあるし！「楽しく生きる」とはどういうことか、について描かれたマンガだと思う。つづ井さんもオカザキさんも、楽しく生きている人は魅力的だ！

漫画ライター / 門倉紫麻

「ふつつか者の兄ですが」日暮キノコ

- 引きこもりの兄が突然「脱・引きこもり宣言」。兄が自分の人生に関わってくることがどうにも疎ましい主人公。親兄弟ならではのこのむずかゆさ、ああ～わかる。と言いながら不器用ながらも前に進む兄の姿には身内でなくても引き込まれてしまい、出来ればあまり世間擦れなどせず、いい人生を送ってほしいと願ってしまう自分が。でもそうはならないんだろうなあ（笑）。

株式会社マーズ・シックスティーン取締役社長 / 北山友之

「フラジャイル」草水敏・恵三朗

- 普段、我々一般の患者とはあまりお付き合いのないお医者さん・病理医。逆から見れば患者を持たず、どんなモチベーションで職務に向かうのか。直接お客さんの顔を見ないエンジニアとしても身につまされます。それと。同時に描かれる様々な病態の患者達。人間いつかは怪我をし病気にかかり、そして衰え、死んでいく。さて、どう生きて死にましようか。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「プラチナエンド」小畑健・大場つぐみ

- 天使とか神とか、善とか悪とか、あらゆる概念をひっくり返して読者に突き付けてくる、リトマス試験紙のような漫画。あなたにとっての愛とは何か、憎しみとは何か、あなただったらどうするか、どう思うか。いつも作者から問いかけられているような気がする物語。

主婦 / 安田ママ

- デスノートでおなじみのタッグが作った最新作品。モチーフが悪魔から天使にかわることで、デスノートとはまた異なる世界観（のはず）ながらそれでもふと、続編なのではとすら思ってしまうほどに、漂う空気感是非常に似ていて重く重厚です。既存のファンの方は是非、一度手に取っていただきたい作品です。

デザイナー / 佐藤ユウ

- 細かな設定がいろいろありますが、テンポよく話が進み、緊張感ある命がけの駆け引きにドキドキします。流石の画力というか、人物のみならず夜空の星などの背景もやけに綺麗です。

教師 / 持丸 宏司

「プリマックス」蒼木雅彦・柴田ヨクサル

- アイドルマンガのはずが、いきなり「ツチノコをとりにいって1億円稼ぐ」という始まりで、もうそれだけで好きが止まらない。作画が別の方でとても読み心地のいい絵なのだが、それを忘れるほど柴田色が前面に出た、オリジナリティの塊のような作品。「世界中の人がカワイイで平和になる」という思いで描いている、と柴田先生がインタビューでおっしゃっていて、本当にそういう意気込みを感じるエネルギッシュな作品。

漫画ライター / 門倉紫麻

「プリンセスメゾン」池辺葵

- 最新3巻でとうとう沼ちゃんがマンションを…！ほんとうに泣きましたし大好きです！明日を生きる力をいつもありがとございます。わたしも誰の心にも振り回されず、自分の人生をしっかりと生きていきたいです。

ライター・大学講師 / トミヤマユキコ

- ちょうど家を探してたときに、参考になるかしらと手に取った僕の期待をグイッと裏切り、「家」というものが、人の生活に、生き方の中にどのような意味を持っているのか、見せてくれた気がした。主人公の、それを助ける人たちの、そして作者の目線に、静かに、ぎゅーっと、胸が締め付けられるマンガ。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- こちらも不動産を巡るストーリーだが、主人公が買い手側。静かなトーンだが、それぞれのキャラの気持ちがじんわりと伝わってくる。さすが池辺先生。

鍼灸師、理学療法士 / 碓氷麻里子

- 自分のことは自分で決める、というシンプルでいていちばん難しい生き方を、淡々と、着々と進めていく姿に感動。テンション低く見えて、実は本当の意味でポジティブ。

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

- 低収入の居酒屋バイトの女の子が、自分の理想の住処を探す、という物語。池辺葵さんのマンガは、登場人物がみんな、自分にできる分だけ、人にやさしい。だから読んでいて、彼女たちの幸せを祈るような気持ちにさせられる。

ブロガー / サイトウマサトク

「ブルーサーマル」小沢かな

- ヒロイン「つるたま」は大学デビューでゆるーいサークルに入って学園生活を満喫しようとしていましたが、ひょんなことからグライダー（エンジンが無くカタパルトで射出して気流で空を飛ぶ飛行機）を駆るバリバリ体育会系の航空部へ入部。空の青さに惹かれて…持ち前の負けん気と好奇心、そして気流を見る才能も備えた「つるたま」の部活へ掛ける本気具合が見どころです。

TORICO まんが王 通販部 / 日吉 雄

「BUNGO」二宮裕次

- 中学野球の凄さは過去の実績ではなく突然才能が開花することにある。主人公・石浜文吾がそれこそ1球投げただけでネクストレベルに跳ね上がる。その瞬間、コマは躍動し、ドキドキが止まらなくなる。高校スカウトの実態や、練習法、配給など、現在の野球環境がどう成り立っているのかを知ることでもでき、単なる熱血野球に留まらない深さも味わえる。

株式会社マーズ・シックスティーン取締役社長 / 北山友之

「ふんばれ、がんばれ、ギランバレー！」たむらあやこ

- タイトルから中身から、苦しみを笑い飛ばしてしまえとふんばる前向きなパワーが満ちあふれていて元気づけられる闘病記。とりわけ、馬の絵を描いて贈るエピソードはとてつもなく感動的で、作者の言葉が忘れがたい印象を残す。

朝日新聞記者 / 小原篤

「辺獄のシュヴェスタ」竹良実

- 女子修道院で演じられる凄絶な脱出劇。虐げられた少女の強靱な信念が、読者の心に無数の爪痕を刻んでいく。

レビュアー / 福井健太

「放課後バッセン娘！」矢野稔貴

- とっても健全な女子高生漫画です。で、詳しく知らなくてもきっと笑える、細かすぎても伝わってくる野球モノマネコメディです。野球大好きが伝わってくる選手や場面を切り取って、「あー懐かしい！」とか「この選手を持ってくるか！」とか「次は誰を真似るのか」とか、楽しみが沢山です。単行本では、まだ有名なあの選手とか、クセがつよいあの選手とか、まだ出てきてないですから、作者はどれだけネタを持っているのでしょうか。ぜひともまだまだ読んでいきたい作品です。

Books アイ茗荷谷店 / 野口忠義

「放課後バニラ」きい

- 業界再編かというほどの波が押し寄せましたがやはり快樂天は元気。肉体的エロスより精神的なエロスに。

往来堂書店 / 三木雄太

「忘却のサチコ」阿部潤

- 振られた彼氏を忘れるための「食」が巻を追うごとに「食」をめぐる人間関係へと発展。ライバル会社の人間、作家、同僚、そして元彼氏。複雑になるも食べ物への興味はさらにエスカレートしている。食漫画の王道を押さえつつのドラマの多彩さ、そして1話～数話完結の歯切れ良いエピソード。今後への期待も含め最強かと。

株式会社マーズ・シックスティーン取締役社長 / 北山友之

「ホカビビト」北森サイ

- 異質であることにそっと寄り添うような、一方で昔話に出てくるような人間の残酷さを、しっかりと描き出す厳しさも見せてくる。物語の力を感じる作品。多くの人に読まれてほしい

ジュンク堂書店池袋本店 / 田中 香織

「僕たちがやりました」荒木光・金城宗幸

- どうしようもないクズがドタバタしている様子がリアルに人間臭くて引き込まれる。

PENICILLIN / HAKUEI

- 次が気になるサスペンス。ありきたりすぎる日常から非日常へのジェットコースターの展開はお見事。

元書店員 / 齋藤隼

「僕と君の大切な話」ろびこ

- 『となりの怪物くん』で大メジャーになったろびこの新作は、ごく控えめに言ってかなり変わっている。で、2巻発売がこんなに楽しみな少女マンガも個人的にはそうはない。読書好きなメガネ男子の東くんと、美形なのにコミュ障気味で挙動不審な相沢さん。1巻の多くはこの平和台高校生の男女2人のやり取りのみで進行する。舞台となるのも各話ほぼ一貫して中央電鉄へいわ台駅（作者によると小田急線の参宮橋がモデル）のホームのベンチのみ。まるで一幕ものの芝居のよう。その舞台装置たるベンチにしても、後ろの壁には「肛門科ひふ科よしじま医院」なる看板が貼ってあったりする。そんな、少女マンガ的キラキラとは無縁の「ど日常」な場所で、派手な展開とも無縁な会話劇だけで、どうにもドキドキ胸の鼓動が高まるスリリングな恋愛（寸前）劇を読ませる。絶妙な「間」、タイミング、小ねたを駆使して描かれる男女のすれ違い、認識のずれ、価値観の対極ぶりと、相沢さんの心中で展開されるドン引きとドキメキの往復運転。これこそ少女漫画家のこだわり、練りに練ったネームの力というもの。絵も繊細美麗。『怪物』連載以前、デビュー当時のスタイリッシュなセンスが復活したような印象で、ひとコマひとコマを追うのが楽しい。「デザート」誌の連載は未見のため2巻の「学校生活編」がどう進行しているのかは分からないが、まずはこの特異な1巻をお手に取っていただければ。

会社員 / 天野賢一

「僕のジョバンニ」穂積

- 穂積さんの作品のこの胸にグッとくる感じがとても好きです。都会でなく、田舎の風景の描写や出て来る人たちの個性がいいですね。突如でてくる天才とそのことに対する少年の心情の変化がこの作品をどう進めて行くのかが気になります。

デザイナー / 平沼寛史

「星の案内人」上村五十鈴

- 憧れ。プラネタリウムの主人のような老人になりたい。僕がこの漫画を友達に勧めたい理由の一つは、それ。この老人を取り巻く登場人物はみんな、この老人に憧れている。ここまで素直に他人に憧れることは、僕にはあまりないことで、なんだか僕の足りない部分をたくさん、そしてやわらかく教えてくれるようなマンガです。宇宙をもっと感じて生きたい、と深く思います。

音楽家 / 谷澤智文

「WHITE NOTE PAD」ヤマシタトモコ

- 昨年は「男女入れ替わりイヤー」だったか？ 某大ヒットアニメ映画の後に本作を読めば、頭がクラクラすると請け合い。別にネタで押してるわけではなく、『とりかへばや物語』や『転校生』等と比較しても（『ドラえもん』にもあるのだ！）、このテーマの歴史的傑作と確信します。あまりにダークで救いのない話で、途中つらいかもしれないが、ラストシーンの切なさ美しさには涙が出ました。ところで、新海映画の入れ替わりがどうにも空振っているように私に感じられたのは、禁忌でエロティックなニュアンスがほとんどないからだと気付きました。でもそれが人気の秘密なのかもしれませんね。

読売新聞東京本社 教育ネットワーク事務局専門委員 / 石田 汗太

「盆の国」スケラッコ

- 最近、私のまわりでは失われてきている「お盆の風習」でも、以前は確かにあってこの時期は「送ったひと」がいまここにいると 当たり前のように話していたことを思い出しました。時間の流れもこんなに早くなって…そんな、ノスタルジックな気持ちに浸れる 1 冊です。

アニメイト 販促課 / 鈴木寛子

- 終わりの来ない夏休みは、誰もが一度は夢みる永遠の憧れだと思います。けれど、来るはずの終わりが来ないほうが、実はとっても怖いのです。普通の日常から始まり、少しずつ非日常へ。話はどんどん不思議に転がっていき、最後はちょっとセンチメンタルで夏の終わりに相応しい。子どものころの夏休み、アイスクャンディを片手に読みたかったです。

図書館司書 / 堀江千秋

- 優しく不思議で、少し怖いお盆のひと夏の冒険を描いたマンガです。このマンガを読んでいるとわくわくに満ち溢れていた子供の頃の夏休みに戻ったような気分になるのですが、それは、夏休みの終わりが迫っている切なさ、長い休みにすこしだれた感じ、少し怖くも温かいお盆の雰囲気、お祭りや淡い恋といったちょっと浮かれた気分、小さな冒険といった子供の頃にしたお盆の頃の空気感がこのマンガにはたくさん詰まっているからだと思います。できれば、お盆休みの頃にこのマンガを読んでみてください。より強く、この盆の国を追体験できると思いますよ。そして、その冒険の後には夏の終わりのようなほのかな涼しさと寂しさを感じられると思います。

システムエンジニア / 廣瀬 公将

「魔王城でおやすみ」熊之股鍵次

- 魔王にさらわれた姫が、魔王城での快眠をもとめてあたりをさすらい、あらゆる手段を使ってここちよい眠りを追及する・・・という、今まで想像もしていなかったテーマのマンガ。ひたすら眠りを追及する姫がカワイイ。油断していると可笑しさのあまりうっかり噴き出すので、電車で読んではいけません。

敬文堂書店 商品担当 / 山川美香

- 魔族に囚われてしまった可憐で儂げなお姫様…でも安眠を貪る事だけは一切の妥協無し！魔王さまだろうが、上級魔族だろうが寝るために必要とあらば踏み台にしてでも快眠を探求していきます。囚われの御姫様ですが、何故か魔王城内を闊歩しています。睡眠ギャグコミックス。

TORICO まんが王 通販部 / 日吉 雄

「マコちゃん、さ」たまいずみ

- いろいろ不器用で王子様を探すものの失敗→部屋でうだうだウジウジを繰り返す様がなぜかいとおしい。そして彼女の決断はいつも若干間違えている。おかあさあんのような気持ちで読んでます。マコォォ！そして2巻を出していただきたい！お願い！

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川元良

「マダム・プティ」高尾滋

- オリент急行でフランス、そこから海を渡ってインドへの旅。インドの王子様と大和撫子の恋というマンガだからこそ読めるドラマティックで贅沢な物語。無鉄砲でひたむきで一生懸命な主人公、万里子が次に何をするのか目が離せなくて一緒に冒険してる気分になれます。

主婦 / 紺野 泉

「町田くんの世界」安藤ゆき

- こんな”町田くん”になりたいと憧れにも似た感情を抱いてしまうこの作品。ごくごく平凡で何の取り柄もない主人公町田くん。それでも人への優しさ、関心、懐の深さ、そして愛情は、読んでる側にじわりと伝わってきます。読むとこの優しさに包まれて温かい気持ちになります。町田くんが大好きです。彼が幸せになることを願います。あっ。町田くんにとってはこの世界にいることが幸せなのかもしれませんが。そうでありたいと思います。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 偽善の香りがゼロの、あたたかく美しい世界。大人に受けているのか？と思って中学生たちに意見を聞いたら、ちゃんと町田くんにはまっている！巻が進んでますますおもしろくなってきたので、昨年8位からの躍進を願ってもうひと押し。このまま恋愛方向にどどどと流れずに（もちろんあってもいいのですが）引き続きゆっくり町田くんの良いところを描いていただきたいなあとと思います。

漫画ライター / 門倉紫麻

「魔法使いの嫁」ヤマザキコレ

- 「忙しくて人に優しくする時間がない」って、人に対して上手く振る舞えなくて落ち込んだ時によく思うんですが、この漫画を読むと立ち止まることができます。時間と、人や物に、ひとつひとつ丁寧に向き合える、そうできるような気持ちになれます。その10分後くらいには仕事のことを考えてまた慌ただしく走っていたのですが、10分でも、立ち止まれるのはたぶんいいことなのだと思います。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「まんが親」吉田戦車

- 伊藤理佐の夫、吉田戦車が描くお父さん視点の子育て本。お父さんから見たら、こうなのねー

主婦 / 柴 架衣

「漫画家とヤクザ」コダ

- 今年の電子書籍で最大の話題作。シンプルでありながらエロのセオリーを外さない、ティーンズラブジャンルをアップデートする作品のひとつです。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「マンガ サ道～マンガで読むサウナ道～」タナカカツキ

- サウナ経験者にお馴染みのサウナトランスの快感をサイケデリックに描く、合法的でヘルシーなオヤジ漫画。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「まんが 新白河原人 ウーパ！」守村太

- 福島の山林での自給自足生活を描いたマンガ。震災との関わりもなしではいられないが、それでもたくましくやれることをやって生きていく姿がいい。こういう生活もいいな、と思わせる。

ブロガー / サイトウマサトク

「みちのくにみちつくる」しまたけひと

- 5年前に、日本列島にそして日本人の心に深い傷を刻んだ東日本大震災。圧倒的な自然の猛威に私たちは立ち竦むしかなく、いまでも立ち竦んだまのように思える。創作者として、このフィクションを遥かに超えた現実（リアル）にどう立ち向かうか、多くの描き手は自ずと問うたはずだ。本作は「みちのく潮風トレイル」という震災後に新たに作られた約700kmに及ぶ復興路を、作者が自らの足で歩いた体験を元に、今の東北で懸命に生きる人たちの物語を描いている。作中に描かれた往時の人々の嗚咽や絶望の叫びは、やはりその現地に寄り添った体験からしか伝えられなかっただろう。本作がいまひとつ世に知られていないのが残念でならない。私はこの本を読み返す度に涙を流さずにいられないのだ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「ミッドナイトブルー」須藤佑実

- 短いながらも何か残る短編集。この中の、「ある夫婦の記録」が好き。ひん曲がった愛情を少しずつ絡ませていき馴染んでいく。血が繋がってない2人が家族になるのはそんなことかもしれない。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「ムシヌユン」都留泰作

- どこにいくのかさっぱりわからない！でもそれがいい。

作家 / 海猫沢めろん

「娘の家出」志村貴子

- “今時”の、そこらじゅうにいるような女の子や奥様、男の子たちそれぞれの目線で描かれるお話にぐいぐいと引き込まれます。みんな普通のようにでいて、アブノーマルだったりマニャックだったりな一面を持っているところがとてもリアル。個人的にはアイドルオタクのキャラに共感を覚えます（笑）

ホビー会社勤務 / 畑中 瀬路奈

- 巻が進むにつれて、ヨコにタテに広がる人間模様。思春期の子供たちも、いい歳した大人も先生もアイドルも、等しく青く人間くさい。そんな彼らが愛情をもって描かれているところに、毎巻なぜか泣けてきます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「結んで放して」山名沢湖

- 創作同人誌即売会を通じて結び付く同人作家たちの人生行路。ポストコミティアクロニクルのマンガ家マンガ。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 夢が必ずかなうとは限らない。なりたい自分になれないかもしれない。マンガを通じて、同人誌即売会を通じて描かれた様々な生き様。沁みます。好きで描いてきたマンガの道を歩き続けてきたヒト、立ち止まったヒト、もう一度歩き始めたヒト。ここに描かれているヒトたちはどこか自分に似ている気がします。ある作家さんが以前に仰っていた言葉を思い出しました。「夢はかなわなくても幸せになれる！」焦らなくても、急がなくても、ゆっくりでもいい。特別な何かなれなくてもいい。勝者にはなれなくても、グッドルーザーでありたいと改めて思わせてくれた作品です。マンガ好きはもちろん、特にコミティア参加者の方にオススメです。ぜひ読んでください！

COMIC ZIN 商業誌部門責任者 / 塚本浩司

- 同人誌業界のお話。ややニッチな題材ではありますが、キャラクターが本気で悩み、未来を選択していく様はたくさんの人に共感してもらえるのではないかと思います。好きなことを続けることも、やめることも、勇気があることで。でも、本当に好きだったなら、無駄なことなんてないんだと、素直に思わせてくれる作品です。一巻にまとまっていて、じわっとあたたかく胸に届く一冊です。

会社員 / 宇田川 結衣子

- 「同人活動」「マンガを描くひとたち」と、一見、特殊な世界の話のようにも思えますが、このお話の大きなテーマはそこだけにとどまらないと思います。少女時代に共通の趣味があり同じ価値観で生活していた女性達が、ある年齢になると自然と別々の道を歩むようになることは、マンガ描きのひとでなくてもよくあることだと思います。その時に感じるさみしさを描いたこの作品にはたいへん共感しました。また、人生の中で自分の大切なものの順番が変わってしまった当事者のせつなさの描き方もリアリティがあり、うーんと唸らせてしまいました。それらをふまえつつ、マンガへの愛情もたっぷり含まれていて、とにかくこの作品自体が愛しくてたまらなかったです。

伊吉書院 類家店 / 中村 深雪

- マンガを描く人、描かなくなった人、それぞれの物語。どうして描き続けるのか、続けられなくなったのか、マンガを好きな人に読んで欲しい話です。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

「メイドインアビス」つくしあきひと

- 巻を追うごとにハードになっていくのは、彼らが生存することも難しい深淵に向かっていくから。そうはわかっていても極限状況での命とか魂とか存在とか、そういうものへの問いかけの残酷さに息をのんでページをめくるのです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 去年、一昨年に続いて何度でもお勧めしたい作品。人類最後の秘境であり浪漫である巨大縦穴（アビス）探検の物語。相変わらず攻略難易度が高すぎる！世界設定の緻密さも相まって、容赦のない自然の恐ろしさや好奇心に取りつかれた人間の強さや狂気がビシビシ伝わってきます。時に残酷で心が痛む場面もあるけれど、予測不可能な展開が最高に面白い！

醤油製造業 / 小野塚博之

- 文明が後退した世界で唯一残された秘境の大穴「アビス」伝説の探検家の娘で孤児でもあるリコがアビス深部から来たと思われる謎の少年型ロボットに出会い…と王道のボーイミーツ&ガール…の筈なんですけど容赦ない生物学的厳しさや障害・人類の業的な要因で過酷な冒険が描かれ一部の猟奇ファンからも熱い視線を注がれる怪作になっており、可愛い絵柄に反してゴリゴリのハードな展開に主人公達の行く末に幸あれと願わずには居られません。

住職兼ライター / 蟬丸 P

- 自分の周辺のボンクラコミュニティでは去年何回か共通の話題に上がったマンガだった。たぶん煽情的で過激で偽悪的で悪趣味でただのポルノではあるんだろう。でも目が離せない感じ。あの取り返しのつかなさ。それでも進むことこそが冒険であるのだ、という価値観。それが魅力ではあるのだろうなあ、と思います。アニメ化はやりすぎじゃねえのかなあ。どうすんだこれ。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- 世界観と物語の両立。すばらしいす。

作家 / 海猫沢めろん

「MAJOR 2nd」満田拓也

- 困りました。MAJOR もめちゃくちゃ面白いのに子供世代の MAJOR 2nd もこんなに面白いなんて……MAJOR 未読でも大丈夫です。登場キャラクターはもちろんほぼ前作と繋がりがあるのでぜひ MAJOR も読んでいただきたいのですが、苦悩する大吾（主人公）が今後どのような道を進むのか。そういったストーリーの強さがこの作品の一番の魅力です。

メガマソ / Migimimi sleep tight / 仙洞田涼平

「モディリアーニにお願い」相澤いくえ

- 絵柄から想像してたのは、田舎の美大生の馬鹿で楽しい日常マンガという内容。大間違いだった。びっくりして思わず泣いた。最初の印象通りの序盤から、突然の告白。そうだ、そうだったなって。若さゆえのまっすぐなエネルギーを直でぶつけられる、たまらん作品だと思います。

オリオン書房ノルテ店 / 池本 美和

「やおろちの巫女さん」武月睦

- ほのぼのとした日常に垣間見える寂しさ、切なさ。そんな雰囲気たまらない作品です。いつかきっと泣かされると覚悟して毎月読んでます。女の子も可愛いけど、それだけじゃなく、敵(?)の怪物達がいい味出しててホント素敵。

文教堂書店浜松町店コミック担当 / 金田健太郎

「やがて君になる」仲谷鳩

- 「特別な好き」を知らない侑と、その侑に「特別な好き」を向ける七海先輩。所謂『百合』作品ですが、知らない方でも十分に楽しめる作品になっています。セリフや仕草、表情を巧みに用いて、キャラクターの繊細な心情を描写させている。「好き」の価値観を考えさせる作品です。

LIBRO ecute 大宮店 コミック担当 / 首藤 瑛

「八雲さんは餌づけがしたい。」里見U

- 未亡人×腹ペコ高校球児という設定はそこまで新しくないのですが、ご飯の内容重視でなく、モリモリ食べる彼の姿がメインで愛おしい。

SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 コミック担当 / 実松由夏

- 家の隣の美人の未亡人が毎日、美味しいゴハンを用意してくれている。ド、ドリーム！

恵文社バンビオ店 店長 / 宮川元良

「やぶとはなもも」有間しのぶ

- 猫のはなももちゃんが、とても可愛くて、何気に小悪魔なのです。そして藪市吾郎が魅力的。茂平ちゃん(猫)も凄く可愛い♪そして、ラブもあります。つくねちゃん(女性)が2巻で言う、圭一さんに対してのセリフが、凄く切ない。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

「山と食欲と私」信濃川日出雄

- 空腹時に読んではいけません！出てくる山飯、ぜ？んぶ食べたい！

漫画全巻ドットコム代表 / 安藤拓郎

- 山の魅力にとりつかれます。ああ、登ってみたい…。登った先で、アツアツグルメを頬張りたいたい…！！

アナウンサー / 松尾 翠

- 正直もうグルメマンガはお腹いっぱいと思ってましたがしかし！別腹がここにございました！外で食べるご飯っていつもより美味しいんですね？そんな気分が味わえるマンガです

(株) キャナルエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 登山漫画といえば、英雄的な主人公の物語や、実用的なガイド本が中心でしたが、こんなに「普通の登山者」にフォーカスした作品は珍しいのでは。人物描写の「あるある」的なリアリティが、単なるグルメ漫画におさまらない魅力になっています。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「闇に這う者 ラヴクラフト傑作集」田辺剛

- ラヴクラフトの世界をビジュアライズした映画・マンガは数あれど、最も成功した作品のひとつだと思います。闇の暗さ・深さ・静けさを描くにあたり、「基本的にモノクロである」という日本マンガのフォーマットを最大限活用している。『狂気の山脈にて』の続巻にも期待！

ダ・ヴィンチ編集長 / 関口靖彦

「雪花の虎」東村アキコ

- 夢中になって読んでいます。歴史にウトいのですが、ご安心ください。アキコのティータイムがありますから。何気に、アキコのティータイム楽しみにしています。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

「吉野朔実の本が大好き」吉野朔実

- 訃報を聞いたときのショックがいまだに尾を引いています。新作が出るのをいつもひそかに待ちわびていた作家さんでした。まだまだこれからもずっと、その楽しみが続くつもりでいました。まさかこんなふうにある日突然、その幸せが断ち切られてしまうなんて思ってもみなかった。悲しい。ただただ悲しいです。さみしいです。この本には、吉野さんの本に対する愛情がいっぱい詰まっています。日々の暮らしを愛し、飼い犬を愛し、何より本を愛してた吉野さん。いつ読んでも色褪せない、素晴らしい漫画をいっぱい描いてくださって、本当にありがとうございました。

主婦 / 安田ママ

- 『昭和元禄落語心中』『げんしけん』『花沢町公民館便り』『ドロップフレーム』など、去年は完結した作品のインパクトが例年よりもあった気がします。「ああ、終わっちゃったんだなあ」って何度かじーンとしてしまいました。しかも、吉野先生の場合は、物語が完結したというよりも著者が亡くなってしまったので、もう新作が読めなくなってしまいました。ほんとに残念ですが、『げんしけん』のような復活はないのです。この本は吉野先生が「本の雑誌」に連載していた読書マンガを1冊にまとめた作品集です。『バーナード嬢曰く。』のアニメ化で読書マンガの認知度が上がり、個人的には「神林は俺の娘！」ってくらいあのマンガも好きですが、吉野先生の読書に対する姿勢にも学ぶところがたくさんあります。また、自分自身もこんなふうにいっきと読書を楽しんでいきたいと思わせてくれるマンガでもあります。

鳥取県立日野高校司書 / 野間勤

「嫁はフランス人」じゃんぼ〜る西

- フランスのかたって、個人的なイメージで、クールなのかな、と思っていましたが、何だか親しみあるな、と思いました。フランスに夫婦で里帰りして、奥さんが思わず転んで、その時「日本に帰りたい！」って言ったのを見て、思わず笑いました。フランスが近く感じました。

有隣堂アトレ恵比寿店 / 桶谷佳代

「夜廻り猫」深谷かほる

- 毎晩涙の匂いを感じる人の元に訪れる猫の遠藤平蔵。平蔵はただ話を聞いて、「あなたの事を知っている」と伝えるだけ。基本8コマ1話の短い物語なのだが、ちゃんと1つの物語になっていて、読ませる。とにかく生きる元気をもらえる漫画です。

丸善ジュンク堂書店・営業本部 / 小磯洋

- 元気がないな〜というとき、読みたくなる深谷かほる作品。だいたいいつも励まされるんだけど、この本にはヤラれました。見るからに柄の悪い野良猫・遠藤平蔵の優しいこと、優しいこと。“涙の匂い”を察知し、寄り添う。でも猫だけあって問題なんて全然解決しないし、できないんだけど、でも、そこがまた良くて。つらいときも、つらくないときもふと思い出すと何度でも読みたくなる作品です。

馬場企画 / 島影真奈美

- 友人に勧められ、どちらかというと、妻が先に手に取った感じでした。「泣く子はいねが～」と、夜のまちを徘徊する猫の遠藤さん。シングルマザーの悲哀にも、無職にも不登校にも独居老人にも、寄り添うことでほんの少し温かい気持ちにさせてくれます。納得のいかないことばかりあって落ち込んでいるときに読むと、ちょっとだけ頑張ろうと思えるマンガです。

衆議院議員山尾志桜里事務所 政策担当秘書 / 三葛敦志

「よろこびのうた」ウチヤマユージ

- 読む前は単なる感動ものかな？くらいに思っていた。全然違った。上質なミステリでもあり、過疎化、介護、虐待、DV、、、色んな要素が盛り込まれ、それでいて重すぎずに感じたのは淡々としたシンプルな絵柄とコマの構成のおかげか。この物語は誰にとっても幸福なラストとは言えない。あの少年は本当に幸せになれたのか？老人たちは本当に最後まで黙っていられたのか？色々な想像も膨らむけれど、あの夫婦はきっと幸せな最期だったのだろう。「男の人ってロマンチストやね」という台詞に泣きました。手ににとってよかったと思える漫画です。

三省堂書店営業企画室 係長 / 内野 智未

「라이어バード」脇田茜

- 画面に迸る音楽、若い二人の不器用なコミュニケーション、それを見守る大人、青春だなあ。泣けます。

往来堂書店 / 三木雄太

「ライフ2」すえのぶけいこ

- 感情を揺さぶるということではさすがのマンガ。見ていて心がザワザワさせられると同時に、次が気になります。

まんたんウェブ副編集長 / 河村成浩

「ラララ」金田一蓮十郎

- 読んだ後、隣にいる人をいつもより大事にしたくなる作品。ひとくせあるラブコメディを得意とする作者の持ち味が光ります。巻を追うごとにゆっくりと「夫婦」になっていくふたりにほっこりします。

事務員 / 工藤圭

「ランド」山下和美

- ふいに出現するファンタジー感にゾクゾクする。不思議だな？、面白いな？。。

PENICILLIN / HAKUEI

- 平成版「火の鳥」！！！！またまた、ここにきて大展開をみせて完全に惹きこまれています。

アニメイト 販促課 / 鈴木寛子

「ルドルフ・ターキー」長蔵ヒロコ

- 1950年代のアメリカを物語にしたストーリーですが、突拍子もない副市長が、色々やらかしながら解決するドタバタコメディなのですが、とにかく作風がおしゃれ。Gangstaみたいな雰囲気の商品が好きな方には本当にオススメです。テンポよく読めてしまうのがすごい。サブキャストの従者達も良い味出していて、スピノフも見たい。アニメ化もしやすい感じでとにかく続きが読みたくなります。

舞台女優 / 大倉照結

「レイリ」岩明均・室井大資

- 大好きな作家さんのコラボレーションが読める日が来るとは…と興奮しました。岩明先生のプロットに、室井先生が全力作画で応える、セッションのような熱さが感じられて、続巻が楽しみです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 音や匂い、更には血しぶきまでも感じられる気がする描写に引き込まれます「レイリってマンガですよね!？」と自問自答したくなるのです

(株) キャナルエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- いろいろ安定感があって読みやすい。良い意味で普通に面白い。ワクワクする。

PENICILLIN / HAKUEI

「レディ&オールドマン」オノ・ナツメ

- オノさんの漫画でよく見かける、気弱な、でも芯の強い男の人が大好きです。そんな気弱な男を威勢よく引っ張っていく、気の強い少女はもっと好きです。オールドマンの身体に関する大きな謎の行方を見守りつつ、普通に運び屋のパディとして活躍する凸凹コンビの二人を見るのが楽しくてなりません。

図書館司書 / 堀江千秋

「Levius/est」中田晴彌

- 圧倒的な画力で描かれるスチームパンクの世界観にベタ惚れ。芸術性が高い漫画にありがちなストーリーの難解さもなく、万人におすすめできる。

元書店員 / 齋藤隼

「連載終了!」巻来功士

- ああ、影から眺める栄光の輝きのなんと眩しいこと…。ジャンプ黄金期の戦場で筆をふるった巻来先生の、生粋のアウトサイダー感到熱く切なくなります。

会社員 / 末永龍介

「ローカル女子の遠吠え」瀬戸口みづき

- 都落ちした女子 OL の物語。静岡の地元愛は素晴らしいです。

ブックファースト新宿店 / 渋谷 孝

- 東京から地元静岡に帰ってからの OL の生活を描いたマンガ。地方から東京に出てきた人にありそうな話が多く。共感を持てる人は多いのではないかな! あー、あるある的な話が満載! 自分も帰ってしまったらこうありそうと思ってしまうですよ!

デザイナー / 平沼寛史

「ろみちゃんの恋、かな?」武田春人

- およそこの人ほど、コミックスが出ることに驚いた人はいない。本人は一貫して女性同士の恋愛(百合)を日常的な視点で淡々と描く。その拙い(失礼)ラフなタッチと相まって、それはまるで女子学生たちの交換ノートに描かれたお遊びマンガのようだ。だけれどそこには、親しい人との関係性や照れも交えた、プライベートな手紙を受け取ったような嬉しさがある。マンガってそういうものだとも思うのだ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「わたしのカイロス」からあげたろう

- 最初に表紙を見た時は、自分には絵柄が可愛すぎて合わないかなァなんて思っていたんですが、あらすじを調べたらビビッと来たので即購入した作品です。不可抗力で犯した罪で流刑星に飛ばされた主人公の女の子・グラジオラスちゃんに課せられたのは、巨大兵器やバケモノと身ひとつで闘わされる無理ゲー刑「剣闘刑」。特に戦闘能力もないので絶体絶命のグラジオラスちゃんでしたが、流刑星で偶然出会った不思議な機械オタク少年・カイロスと心を通わせながら苦難を乗り越えていく、てなガールミーツボーイ、絶望系バトル、けっこうハードなSFとオイシイ素材がばっちり盛り込まれたワクワクなおはなしです。スター・ウォーズばりのスケール感のある世界観とか、なにやら大規模な陰謀めいた敵の動きとかおおきな部分での展開もさることながら、優しくて健気なグラジオラスちゃんと、彼女を守るためにめっちゃくちががんばるカイロスくんのひたすらにまっすぐなキャラクターが好感度ひたすら高し。最近ちょっとヒネたメインキャラクターが引っ張っていくお話が多い感じがしますが、そんな中、自分たちが生き残るために必死でありながらも、優しさだとか倫理とか、そういう綺麗なものを失うまいと頑張る二人の姿が美しいのです。いきなり脚を一本もってかれたり、守ってくれてた優しいおっさんが死んじゃったりとかかなり不遇な目に遭っちゃうグラジオラスちゃんですが、どうにか幸せな結末を迎えてほしいものです。個人的に、いま一番見守りたいマンガの主人公ナンバーワンです。

アニメイト町田 / 岡ノ部亭 真泰